

金色夜叉續々篇

彼は幾ほとほと此の女の宮ならざるをも忘れて、其の七年の愛憎を、今夜の今にして始しはらくも破除するの閒いとまを得つ。信まことに得難かりし此の閒こそ、彼が宮を失ひし以來、唯之に易へて望みに望みたりし者ならずと爲んや。

嗚呼麗しきミレエジ!

貫一が久渴きうかつの心は激しく動されぬ。彼は聲さへ較震くらひて、

「然う申しては失禮か知らんが、貴方の商賣柄で、一個の男を熟じつと守つて、而して其人の落目に成つたのも見棄てず、一方には、身請の客を振つてからに、後來これから花の咲かうといふ體を、男の爲には少しも惜まらずに死なうとは、實に天晴なもの! 餘り見事な貴方の其の心掛に感おぼれ入つて、私は……………涙が……………出まじた。」

貴方は、どうか生涯其の心掛を忘れずに居て下さい! 其心掛は、貴方の寶ですよ。又狭山さんの寶、則ち貴下方夫婦の寶なのです!

今後とも、貴方は狭山さんの爲には何日でも死んで下さい。何日でも死ぬと云ふ覺悟は、始終吃くと持つて居て

下さい。可よう御座いますか。

千萬人の中から唯一人見立て、此人はと念つた以上は勿論其人の爲には命を捨てるくらいの上簡じかんが無ければ成らんです。其の覺悟が無いくらゐなら、始から念はん方が可いので、一旦念つたら骨が舍利しやりに成らうとも、決して志を變へんと云ふのでなければ、色でも、戀でも、何でもないので! で、若し好いた、惚れたと云ふのは上邊ばかりで、其實は移氣うつきな、水臭い者とも知らず、這箇こゝろは一心に成つて思窮めて居る者を、いつか寐返を打れて、突放されるやうな目に遭つたと爲たら、其の棄てられた者の心の中は、甚おんだと思ひますか。」

彼の聲音は益す震へり。

「然云ふのが有ります! 私は世間には然云ふの方が多いと考へる。那樣徒爾せんないたづらな色戀は、爲た者の不仕合。棄てた者も、棄てられた者も、互に好い事は無いのです。私は現に然云ふのを嗜あて居る! 嗜て居るから、今貴下方あなたが恚いかして一處に死ぬ迄も離れまいと云ふ迄に思合つた、其の満足はどれ程で、又其のお互の仕合は實に謂ふに謂はれん程の者であらう、と私は思ふ。」

金色夜叉續々篇

金色夜叉續々篇

其に就けても、貴方の美しい心掛、立派な心掛、どうか其實は一生肌身に附けて、甚悪事が有らうとも、決して失はんやうに爲て下さい——可う御座いますか。而して貴方はお二人とも長く、です、毎も今夜のやうな此心を持つて、睦しく暮して下さい。私は其が見たいのです！

今は死ぬ所でない、死ぬには及びません、三千圓や四千圓の事なら、私が奈何でも爲て上げます。」

聞訖りし兩個が胸の内は、諸共に潮の如きものに襲はれぬ。未だ服ざりし毒の俄に變じて、箇の薬と成れる不思議は、喜ぶとよりは愕かれ、愕くとよりは打惑はれ、惑ふとよりは怪まれて、鬼乎、神乎、人ならば、如何なる人乎と、彼等は覺えず貫一の面を見据えて、更に其目を射に合せつ。

四邊も震ふばかりに八聲の鶴は高く唱へり。

夜すがら兩個の運星を蔽ひし常闇の雲も晴れんとすらん、隱約と隙洩る曙の影は、玉の緒長く座に入りて、光満ると燈火の下に並べるまゝの茶碗の一箇に、小き蛾有りて落ちて浮べり。

續續篇をばり

金色夜叉新續篇



生れてより神佛を頼み候事とは一度も無御座候へども、此度ばかりはつくづく一心に祈念致し、吾命を締め候代に、必ず此文は御目に觸れ候やうにと、それをば力に病中ながら筆取りまゐらせ候。幸に此の一念通じ候て、ともかくも御被せ被下候は、此身は直に相果て候とも、つゆ憾には不存申候。元より御憎悪強き私には候へども、何卒是は前非を悔いて自害いたし候一個の怒る女の、御前様を見懸けての遺言とも思召し、せめて一通り御判讀被下候は、未來までの

御情と何より嬉う嬉う存上げまゐらせ候。

扱とや、先頃は久々とも何とも、御生別とのみ朝夕に諦め居り候御顔を拜し、飛立つばかりの御懐しさやら、言ふに謂れぬ悲しさやらに、先立つものは涙にて、十年越し思ひに思ひまゐらせ候事何一つも口には出さず、あれまでには様々の覺悟も致し、また心苦しき御目もじの恥をも忍び、女の身にてはやうくの思にて參じ候効も無く、誠に一生の無念に存じまゐらせ候。唯其折の形見には、涙の隙に拜しまゐらせ候御姿のみ、今に目に附き候て、且暮忘れやらず、あらぬ人の顔までも御前様のやうに見え候て、此頃は心も空に泣暮し

金色夜叉新續篇

居りまゐらせ候。

久しく御目もじ致さず候中に、別の人のやうに總て御變り被成候も、私には何とやら悲しく、又殊に御顔の
羸、御血色の悪さも一方ならず被爲居候は、如何なる御疾に候や、御見上げ申すも心細く存ぜられ候へば、
折角御養生被遊、何は措きても御身は大切に御厭ひ被成候やう、御くれぐれも念じ上候。それのみ心に懸り候
餘、悲しき夢なども見續け候へば、一入御案じ申上まゐらせ候。

私事恥を恥とも思はぬ者との御さげすみを願ず、先頃推して御許まで参じ候胸の内は、なか／＼御目もじの
上の辭にも盡し難くと存候へば、まして廻らぬ筆には故と何る記さず候まゝ、何卒々々宜しく御汲分被下度
候。さやうに候へば、其節の御腹立も、罪ある身には元より覺悟の前とは申しながら、餘とや本意無き御別
に、いとと思は愈り候て、歸りて後は頭痛み、頭裂るやうにて、夜の目も合はず、明る日よりは一層心地
悪く相成、物を見れば唯涙こぼれ、何事とも無きに胸塞り、ふとすれば思迫たる氣に相成候て、夜晝と無く
劇く慄み候ほどに、四日目には最早起き居り候事も大儀に相成、午過より膝に就き候まゝ、今日まで慄々致
候て、唯々慄しき御方の事のみ思續け候ては、みづからの儘さく身の上を慨き、胸は愈よ痛み、目は見

苦しく腫起り候て、今日は昨日より瘦衰へ申候。

かやうに思迫め候氣にも相成候上に、日毎に闇の奥に引入られ候やうに段々心弱り候へば、疑も無く信心の
誠顯れ候て、此の弊に就き候が元にて、はや永からぬ吾身とも存候まゝ、何卒これまでの思出には、たと
ひ命ある内にこそ如何やうの御恨は受け候とも、今はの際には御前様の御膝の上にて心安く息引取り度くと
存候へども、それも慄はぬ罪深き身に候上は、もはや再び慄しき御顔も拜し難く、猶又前非の御ゆるしも無く
て、此儘相果て候事かと、諦め候より外無く存じながら、とても／＼諦めかね候苦しきの程は、此心の外に知る
ものも、喻ふるものも無御座候。是のみは御憎悪の中にも少は不敏と思召被下度、かやうに認め居り候内に
も、涙こぼれ候て致方無く、覺えず鹿相いたし候て、かやうに紙を汚し申候。御容し被下度候。さ候へば私
事如何に自ら作りし罪の報とは申ながら、かくまで散々の責苦を受け、かくまで十分に懺悔致し、此上は
唯死ぬるばかりの身の可哀をつゆほども御前様には通じ候はで、これぞり空く相成候が、餘に口惜く存候故、
一生に一度の神佛にも縋り候て、此文には私一念を巻込め、御許に差出しまゐらせ候。

金色夜叉新續篇

返すも悔しき熱海の御別の後の思、又いつぞや田鶴見子爵の邸内にて圖らぬ御見致候而來の胸の内、

其後途中にて御變り被成候荒尾様に御目に懸り、しみぐ御物語致候事など、先達而中冗うもく差上申候毎度の文にて細に申上候へども、一通の御披せも無之やうに候へば、何事も御存無さかど、誠に御恨しう申上候。百度千度繰返し候ても、是非に御耳に入れまぬらせ度存候へども、今此の切なく思亂れ居候折から、又假初にも此上に味氣無き苦を憫び候事は堪難く候故、こゝには今心に浮び候まゝを書續けまぬらせ候。

何卒餘所ながら承はり度存上候は、長々御信も無く居らせられ候御前様の是迄如何に御過し被遊候や、さぞかし暴き憂き世の波に一方ならぬ御艱難を遊し候事と、思ふも可恐しきやうに存上候を、ようもく御めであう御障無う居らせられ、悲しき中にも私の喜は是一つに御座候。御前様の數々御苦勞被遊候間に、私どもも始終人知らぬ憂患を重ね候て、此世には苦みに生れ参り候やうに、唯儘き儘き月日を送りまぬらせ候。吾身ならぬ者は、如何なる人も皆可羨しく、朝夕の雀鴉、庭の木草に至る迄、それぐに幸ならぬは無御座、世の光に遠き囹圄に繋れ候悪人にも、罪ゆり候日の樂は有之候ものを、命有らん限は此の苦艱を脱れ候事愜はぬ身の悲しさは、如何に致候はば宜しきやら、御推量被下度候。申すも異なる事に候へども、

抑も始より私心には何とも思はぬ唯繼に候へば、夫婦の愛情と申候ものは、十年が間に唯の一度も起り申さず、却つて憎き仇のやうなる思も致し、其傍に居り候も口惜く情疎み果て候へば、三四年前よりは別居も同じ有様に暮し居候始末にて、私事一旦の身の潰れも漸く今は淨く相成、益堅く心の操を守り居りまぬらせ候。先頃荒尾様より御証も受け、さやうの心得は、始には御前様に不實の上、今又唯繼に不貞なりと仰せられ候へども、其始の不實を唯今思知り候ほどの愚なる私が、何とて後の不貞やら何やら辨へ申すべしや。愚なる者なればこそ人にも勾引され候て歸りたき空さへ見ぬ海山の果に泣倒れ居り候を、誰一個も慰みて救はんとは思召し被下候はずや。御前様にも其の愚なる者を何とも思召し被下候はずや。愚なる者の致せし過も、並々の人の過も、罪は同じきものに御座候や、重きものに御座候や。

愚なる者の癖に人がましき事申上候やうにて、誠に御恥しう存候へども、何ともく心得難く存上候は、御前様唯今の御身分に御座候。天地は倒に相成候とも、御前様に限りてはと、今猶私は疑ひ居り候ほど驚入まぬらせ候。世に生業も數多く候に、優しきく御心根にもふさはしからぬ然やうの道に御入り被成候までに、世間は鬼々しく御前様を苦め申候か。田鶴見様方にて御姿を拜し候後始て御尊承はり、私は幾日も

幾日も泣暮し申候。これには定て深き仔細も御座候はんと存候へども、玉と成り、瓦と成るも人の一生に候へば、何卒昔の御身に御立返り被遊、私の焦れ居りまゐらせ候やうに、多くの人にも御慕れ被遊候御出世の程をば、偏にく願上まらせ候。世間には随分賢からぬ者の好き地位を得て、時めかし居り候も少からぬを見るにつけ、何故御前様には然やうの喜からぬ業を擇りに擇りて、折角の人に優れし御身を塵芥の中に御捨て被遊候や、残念に／＼存上まらせ候。

愚なる私の心得違さへ無御座候は、始終御側にも居り候事とて、さやうの思立も御座候節に、吃度御諫め申候事も叶ひ候ものを、返らぬ愚痴ながら、私の淺はかより、みづからの一生を誤り候のみか、大事の御身までも世の廢り物に致させ候かと思ひまゐらせ候へば、何と申候私の罪の程かと、今更御申譯の致しやうも無之、唯そら可憐しさに消えも入度く存まゐらせ候。御免し被下度、御免し被下度候。

私は何故富山に縁付き申候や、其氣には相成申候や、又何故御前様の御辭には従ひ不申候や、唯今と相成候て考へ申候へば、覺めて悔しき夢の中のやうにて、全く一時の迷とも可申、我身ながら驛解らず存じまゐらせ候。二つ有るものゝ善きを捨て、悪きを取り候て、好んで箇様の悲しき身の上に相成候は、よくよく私に

定り候運と、思出し候ては諦め居り候。

其節御前様の御腹立一層強く、私をば一打に御手に懸け被下候は、なまじひに今の苦難は有之間敷、又さも無く候は、いつそ御前様の手籠にいつれの山奥へも御連れ被下候は、今頃は如何なる幸を得候事やらんなど、愚なる者はいつまでも愚に、始終愚なる事のみ考居り申候。

嬉しくも御赦を得、御心解けて、唯二人熱海に遊び、昔の濱邊に昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候は、其の心の内は如何に御座候やら、思ふさへ胸轟き、書く手も震ひ申候。今の彼の熱海に人は参り候へども、そのやうなる樂を持ち候ものは一人も有之まじく、其代には又私如き可憐の跡を留め候て、其の一夜を今だに歎き居り候ものも決して御座あるまじく候。

世をも身をも捨て居り候者にも、猶肌身放さず大事に致候實は御座候。それは御遺置の三枚の御寫眞にて、何見ても樂み候はぬ目にも、是のみは絶えず眺め候て、少しは憂さを忘れ居りまゐらせ候。いつも、御寫眞に向ひ候へば、何くれと當時の事憶出し候中に、うつとも無く十年前の心に返り候て、苦しき胸も暫は涼しく相成申候。最も所好なるは御横顔の半身のに候へども、あれのみ色褪め、段々薄く相成候が、何より

情無く存候へども、長からぬ私の實に致し候間は仔細も有るまじく、亡き後には棺の内に歛めもらひ候やう、母へは其を遺言に致候覺悟に御座候。

ある女世に比無き錦を所持いたし候處、夏の熱き盛とて、差當り用無く思ひ候不覺より、人の望むまゝに貧與へ候後は、いかに申せども返さず、其内に秋過ぎ、冬來り候て、一枚の曠着さへ無き身貧に相成候ほど、いよく先の錦の事を思ひに思ひ候へども、今は何處の人手に渡り候とも知れず、日頃それのみ苦に病み、慨き暮し居り候折から、さる方にて計らず一人の美しき女に逢ひ候處、彼の錦をば華かに着飾り、先の持主とも知らず、貧しき女の前にて散々ひけらかし候上に、恥を與へ候を、彼女は其身の過と諦め候て、泣くく無念を忍び申候事に御座候が、其錦に深き思の繋り候ほど、これ見よがしに着たる女こそ、憎くも、悔しくも、恨しくも、謂ほうやうなき心の内と察せられ申候。

先達而は御許にて御親類のやりに仰せられ候御婦人に御目に掛りまおらせ候。毎日のやうに御出で被成候て、御前様の御世話萬事被遊候御方の由に候へば、後にて御前様さぞく御大抵ならず御迷惑被遊候御事と、山々御察し申上候へども、一向さやうの御内合とも存ぜず、不躰に參上いたし候段は、幾重にも御詫申上まおらせ候。

尙數々申上度存候事は胸一杯にて、此胸の内には申上度事の外は何も無御座候へば、書くともく盡き申間敷、殊に拙き筆に候へば、よしなき事のみくだくしく相成候て、いくらも大切の事をば書洩し候が思殘に御座候。惜しきく此筆止めかね候へども、いつの限無く手に致し居候事も叶ひ難く、折から四時の明近き油も盡き候て、手元暗く相成候まゝ、はやく戀しき御名を認め候て、これまでの御別と致しまおらせ候。唯今の此の氣分苦しく、何とも難堪き様子にては、明日は今日よりも病重き事と存候。明後日は猶重くも相成可申、さやうには候へども筆取る事相叶ひ候間は、臨終までの胸の内御許に通じまおらせ度存候へば、覺束無くも何なりとも相認め可申候。

私事空しく相成候とも、決して餘の病にては無之、御前様御事を思死に死候ものと、何卒々々御慰み被下、其段はゆめく詐にては無御座、みづから堅く信じ居候事に御座候。

明日は御前様御誕生日に當り申候へば、わざと陰膳を供へ候て、私事も共に御祝ひ可申上、嬉しきやうにも悲しきやうにも存候。猶くれぐれも朝夕の御自愛御大事に、幾久しく御機嫌好う明日を御迎へ被遊、ます

御繁榮に被爲居候やう、今は世の望も、身の願も、そのみに御座候。まづはあらうかして。
五月二十五日

戀しきく

生別の御方様

まゐる

おろかなる女

(一一)

隣に養へる薔薇の香の烈しく薫じて、想と座に入る風の、此の讀盡されし長き文の落つると見れば、紙は舟々々舞延びて貫一の身を祭り、猶も跳らんとするを、彼は徐に敷据えて、其膝に俯げなる面杖柱きたり。憎き女の文など見るも穢はしと、前には皆焚棄てたりし貫一の、如何にして這回ばかりは終に打拆きけん、彼は其の手にせし始に、又は讀去りし後に、自ら其故を讓めて、自ら知らざるを愧づるなりき。彼は旋て屈めし身を起ししが又直ちに重きに堪へざらんやうの頭を支へて、机に倚れり。

縁濃かに生茂れる庭の木々の軽々なる燥氣と、近き邊に有りど有る花の葉とを打雑せたる夏の初の大氣は、ただ慢く動きて、其間に旁午する玄鳥の聲朗に、幾度か返しては遂に往きける跡の垣穂の然らぬだに燃ゆるばかりなる満開の石榴に、四時過の西日の影しく輝けるを、彼は煩はしと目を移して、更に梧桐の涼しき廣葉を眺めたり。
文の主は恚れと祈るばかりに、命を捧げて神佛をも驚かしと書けるにあらずや。貫一は又、自ら何の故とも知らず、獨り之のみ披くべくもあらぬ者を披き見たるにあらずや。彼を絡へる文は猶解けで、殿に涙の瀉くが如く懸れり。
そのまゝに専と思入るのみなりし貫一も、漸く惱しく覺えて身動くと與に、此の文殺の埒無き様を見て、良慌てたりげに左肩より垂れたるを取りて、二つに引裂きつ、さて其の一片を手繰らんと爲るに、長きこと帯の如し。好き程に裂きては累ね、累ねれば、皆積みて一冊にも成りぬべし。恚る間も彼は自と思に沈みて、其の動す手も怠く裂きては一々讀むかとも目を凝しつ、良有りて裂了りし後は、恰も劇しき力作に勞れたらんやうに、弱々と身を支へて長き項を垂れたり。

然れど久しきに勝へずやありけん、にほか卒に起たんとして、彼の殻の委まきたるを取上げ、庭の日陰に歩出で、一步に一たび裂き、二歩に二たび裂き、木間に入りては裂き、花壇を繞りては裂き、行きては裂き、裂きてくす々に作なしけるを、又引振りては歩み、歩みては引振りしが、はや行くも苦しく、後様に唯有る冬青の樹に寄添へり。折から縁に出来る若き女は、結立の圓器源しげに、襷掛の惜くも見ゆる眞白の濡手を彈きつゝ、座敷を覗き、庭を窺ひ、人見付けたる會釋の笑を衝と浮べて、

「旦那様、お風呂が沸きましたか、」

此の姿好く、心まめや信かなるお静こそ、僅にも貫一が此頃を慰むる一の唯一たの者なりけれ。

(二)の二

浴すれば、下立ちて垢を流し、出づるを待ちて浴衣を看せ、鏡を据るまで、お静は等閑なほどりならず手一つに扱ひて、敷ならぬ女業の効無くも、身に稱はん程は貫一が爲にと、明暮を唯其のみに委ぬるなり。然れども、彼は別に奥の一間に己の助くべき狭山あるをも忘るべからず。そは命にも換ふる人なり。又然れども、彼と我との命に換ふる大恩を此の主にも負へるなり、如此かくのごとく孰れ疎おろそかならぬ主と夫とを同時に有てる忙しさは、

盆と正月との併せ来にけんやうなるべきをも、彼は仍未だ覺めやらぬ夢の中にて、其の夢心地には、如何なる事も難しと爲るに足らずと思へるならん。寢ねに彼は然も思へらんやうに勇み、喜び誇り、樂める色あり。彼の面は爲に謂ふばかり無く輝ける程に、常にも愈して妖艶あでやかに見えぬ。

浴後を涼み居る貫一の側に、お静は習々と團扇の風を送り居たりしが、縁柱いに靠れて、物をも言はず勞れたる彼の氣色を左瞻右視て、

「貴方、大變にお顔色がお悪いぢや御座いませんか。」

貫一は此言に力をも得たらんやうに、萎なれ頹れたる身を始て揺りつ。

「然うかね。」

「あら、然うかねぢや御座いませんよ、奈何あそばしたのです。」

「別に奈何も爲はせんけれど、何だか恚う氣が閉ぢて、惺然はつきりせんねえ。」

「惺然あそばせよ、麥酒でも召上げませんか、ねえ、然う被成ないまし。」

「麥酒かい、餘り飲みたくもないね。」

「貴方そんな事を有仰らずに、まあ召上つて御覽なさいまし。折角私が冷して置きましたのですから。」

「何で御座いますつて?」

「いや、常談ぢやない、然うなのだらう。」

「狭山は、貴方麥酒なんぞを戴ける今の身分ぢや御座いませんです。」

「那樣に堅く爲んでも可いさ、内の人ぢやないか。もつと氣樂に居てくれなくては困る。」

「此上の氣樂が有つて耐るものぢや御座いません。」

「けれども有物だから、所好なら飲んでもらはう。お前さんも克くのだらう。」

「はあ、私もお相手を致しますから、一盃召上りまじよ。氷を取に遣りまして——夏密柑でも剥きませう——

「お前さん飲まんか。」

「私も戴きますとも。」

「いや、お前さん獨で。」

「貴方の前で私が獨で戴くので御座いますか。而して貴方は?」

「私は飲まん。」

「ぢや見て被居るのですか。不好ですよ。馬鹿々々しい! まあ何でも可いから。左も右も一盃召上ると成なさいまじよ、ね。唯今直に持つて参りますから、其處に被居まじ。」

氣輕に走り行きしが、程無く老婢と共に齎せる品々を、見好げに獻立して彼の前に陳ぶれば、有聚に他の老婆子が寂しき給仕に義務的吃飯を強ひらるゝの比にもあらず、良や難拵心地もして、コップを取舉ればお靜は慣れし手元に噴溢るゝばかり酌して、

「さあ、呷と其を召上れ。」

貫一は其半を盡して、先づ息へり。林檎を剥き居るお靜は、手早く二片ばかり刻きて、

「はら、お着を。」

「まあ、一盃上げやう。」

「まあ、貴方——いゝえ、可けませんよ。些とお顔に出るまで二三盃續けて召上れよ。然すると幾らかお氣が霽れますから。」

「那樣に飲んだら倒れて了ぶ。」

「お倒れなすたつて宜いぢや御座いせんか。本當に今日は不好きな御顔色で被居るから、それが恚う消えて了ぶやうに、番發して召上りませよ。」

彼は覺えず薄笑して、

「藥だつて然うは利かんぞ。」

「奈何あそばしたので御座います。何處ぞ御體がお悪いのなら、又無理に召上るのは可う御座いせんか。」

「體は始終悪いのだから、今更驚きも爲んが……」

「いゝ、お酌。あゝ、餘りお見事ぢや御座いせんか。」

「見事でも可かんのかい。」

「いゝえ、お見事は結構なのですけれど、餘り又——頂戴………あゝ恐入ります。」

「いや、考へて見ると、人間と云ふものは不思議な者だ、今迄不見不知の、實に何の縁も無いお前さんが、恚して家に来て狭山君は那して實體な人だし、お前さんは優しく世話をしてくれる。私は決して他人のやうな心持は爲んね。それは如何なる事情が有つて恚う成つたにも爲よ、那裏で逢はなければ、何處の誰だかお互に分らずに了つた者が、急に一處に成つて、貴方が奈何だとか、私が恚だとか、………や、不思議だ！ 奈何か、まあ、渝らず一生恚してお附合を爲たいと思ふ。けれど、私は高利貸だ。世間から鬼か蛇のやうに謂れて、此上も無く擯斥されて居る高利貸だ。お前さん方も其の高利貸の世話に成つて居られるのは、餘り榮でも無く、然ぞ心苦しく思つて居られるだらう、と私は察して居る。のみならず、人の生血を搾つて迄も、非道な貨を殖えるのが家業の高利貸が、縁も所因も無い者に、設ひ幾らでも、それほど大事の金をおいそれと出して、體まで引取つて世話を爲ると云ふには、何か可恐い下心でもあつて、それも猶且慾徳渾成で恩を被るのだらうと、内心ぢや甚だにも無氣味に思つて居られる事だらうと其も私は察して居る。」

「さあ、コップを空けて返して下さい。」

「召上りますの？」

「飲む。」

酒氣は稍彼の面に上れり。

「お静さんは奈何思ふね。」

「私共は固より命の無い處を、貴方のお蔭ばかりで助つて居りますので御座いますから、私共の體は貴方の物も同然、御用に立ちます事なら、其處にでも遊してお使ひ下さいまし。狭山も那樣に申し一居ます。」

「忝ない。然し、私は天引三割の三月縛と云ふ躍利を貸して暴い稼を爲てるのだから、何も人に恩などを被せて、其を種に錢儲を爲るやうな、廻り迂い事を爲る必用は、まあ無いのだから、どうぞ決して那麽懸念は爲て下さるな。又私の了簡では、元元些の粹興で二人の世話を爲るのだから、究竟そちらの身さへ立つたらそれで私の念は届いたので、其念が届いたら、もう剩錢を貰はうとは思はんのだと言たらば、情無い事には、私の家業だから、鬼が念佛でも言ふやうに、お前さん方は愈々怪く思ふかも知れん——いや、屹度然う思つ

て居られるには違ひ無い。残念なものだ。」

彼は長吁して、

「それも悪木の蔭に居るからだ！」

「貴方、決して私共が那樣事を夢にだつて思は致しませんけれど、那樣に有仰いますなら、何か私共の致しました事がお氣に障りましたので御座いませう。恁云ふ何も存じません粗才者の事で御座いますから。」

「いや、……………」

「いえ、私は始終言はれて居ります狭山に濟みませんですから、どうぞ行届きません所は、」

「いや、然云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴だから、然う氣に懸けてくれては甚だ困る。」

「ついに那樣事を有仰つた事の無い貴方が、今日に限つて今のやうに有仰ると、日頃私共に御不足がお有なすつて、」

「いや、悪かつた、私が悪かつた。なかく不足どころか、お前さん方が陰陽無く實に善く氣を着けて、親身の様に世話してくれるのを、私は何より嬉しく思つて居る。往日話した通り、私は身寄も友達も無いと謂つ

て、可いくらゐの獨法師の體だから、氣分が悪くても、唯一人薬を飲と言つてくれる者は無し、何彼に就けて其は心細いのだ。然云ふ私に、戀いで居るから酒でも飲めど、無理にも勧めてくれる其の深切は、枯木に花の咲やうな心持が、いえ、嘘でも何でも無い。さあ、嘘でない信に一獻差すから、其積で受けてもらはう。」

「あゝ、もう是には無し。」

「無ければ嘘なので御座いますせう。」

「未だ半打の上有るから、他を皆注いで了はう。」

「可うございますね。」

買一が老婢を喚ぶ時、お静は逸早く立ち行きけり。
(二)の三
話頭は酒を更むると與に轉じて、
「それはまあ考へて見れば、随分主人の面でも、友達の間でも、踏踏つて、取る事に於ては見界なしの高利

賃が、如何に虫の居所が善かつたからと云つて、人の難儀——には附込まうとも——それを見かねる風ぢやないのが、何で那麼格にも無い氣前を見せたの平と、是は下番を立てられるのが當然だ。

けれども、ねえ、いづれ其譯が解る日も有らうし、又私と云ふ者が何云ふ人間であるかと云ふ事も、今に必ず解らうと思ふ。其が解りさへしたら、此上人の十人や二十人、私の有金の有丈は、助けやうが、惠まうが、少しも怪しむ事は無いのだ。恁云ふと何か酷く偉がるやうで、聞辛いか知らんけれど、是は心安立に、全く奥底の無い所をお話するのだ。

いや然う考込まれては困る。陰氣に成つて可かんから、話ばもう罷に爲う。而してもつと飲み給へ、さあ。」

「いゝね、どうぞお話を聞かせなすつて下さいませ。」

「肴に成るやうな話なら可いがね。」
「始終狭山とも然う申して居るので御座いますけれど、旦那様は御病身と云ふ程でも無いやうにお見受申すのに、いつも恁う御元氣が無くて、お險しいお顔面ばかりなすつて被居るのは、何云ふものか知らんぞ、陰ながら御心配申して居るので御座いますが、」

「これでお前さん方が来てくれて、内が賑に成つた丈、私も密かから見ると餘程元氣には成つたのだ。」「でも其より御元氣がおもんならなかつたら、さあ御座せう。」「死んで居るやうなものだ。」「

「奈何もそばにたのた御座いますね。」「

「やはり病氣だ。」「

「何云ふ御病氣なので。」「

「鬱ぐのが病氣で困るよ。」「

「何爲て然う鬱さるそばすので御座います。」「

「實は自ら嘲りて苦しげに晒へり。」「

「究竟病氣の所爲なのだね。」「

「ですから何云ふ御病氣なのですよ。」「

「どうも鬱ぐのだ。」「

「解らないぢや御座いませんか。鬱ぐのが病氣だと有仰るから、何爲てお鬱を遊すのですと申せば、病氣を鬱ぐのだつて、それぢや何處まで行つたつて、同じ事ぢや御座いませんか。」「

「うむ、然うだ。」「

「うむ、然うだぢやありません、緊りなさいませよ。」「

「あゝ、もう酔つて来た。」「

「あれ、未だお酔ひに成つては可けません。お横に成ると御寐に成るから、お起きなすつて居らつしやうまし。さあ、貴方。」「

お酔は寄りて、彼の肘杖に横はれる背後より扶起せば、爲ん無げに柱に倚りて、女の方を見返りつゝ、

「此を富山唯繼に見せて遣りたい。」「

「あゝ、舎て下さいまし。名を聞いても慄然とするのですから。」「

「名を聞いても慄然とする？ 然う、大きに然うだ。けれど、又考へて見れば、彼に罪が有る譯でも無いのだから、然して憎むにも當らんのだ。」「

「ええ、些の大好かないばかりですー」

「それぢや餘り差はんぢやないか。」

「那麽奴は那箇だつて可いんです。第一活きて居るのが間違つて居る位のもです。」

本當に世間には不好きな奴ばかり多いのですけれど、貴方、何云ふ者でせう。三千何百萬とか四千萬とか、何でも太した人数が居るのぢや御座いませんか、そんならもう少し氣の利いた、肌合の好い、嬉しい人に撞見しさうなものだと思ひますのに、一向お目に懸りませんが、ねえ。」

「然う、然う、然う！」

「而して富山見たやうな、那麽奴がまあ紛々然と居て、番狂せを爲て行くのですから、それですから、一日だつて世の中が無事な日と云つちや有りは致しません、奈何したら那麽にも氣障に、大好かなく、厭味たらしく生れ付くのでせう。」

「おう／＼、富山唯繼散々だ。」

「あゝ、もう那麽奴の話をするのは馬鹿々々しいから、貴方、舍しませうよ。」

「それぢや然云ふ話がある。」

「はあ。」

「一體男と女とではだね、那箇が情合が深い者だらう乎。」

「あゝ、何爲で御座います。」

「まあ、何爲でも、お前さんは奈何思ふ。」

「それは、貴方、女の方が甚だに情が、」

「深いと云ふのかね。」

「はあ。」

「情にならんね。」

「へえ、情にならない證據でも御座いますか。」

「成程、お前さんは別かも知れんけれど、」

「可う御座いますよー」

「いゝえ、世間の女は然でないやうだ。それと云ふのが、女と云ふ者は、慮が浅いからして、奈何しても氣が移り易い、是から心が動く——不實を不實とも思はんやうな了簡も出るのだ。」

「それはもう女は淺抄な者に極つて居ますけれど、氣が移るの何のと云ふのは、依樣本當に惚れて居ないからです。心底から惚れて居たら、些も氣の移る所は無いちや、御座いませんか。善く女の一念と云ふ事を申しますけれど、思察めますと、男よりは女の方が餘計夢中に成つて了ひますとも。」

「大きに然云ふ事は有る。然し、本當に惚れんのは、奈何だらう、女が非いの乎、それとも男の方が非いの乎。」

「大變難しく成りましたのね。然ですな、それは那箇乎が非い事も有りませう、又女の性分にも由りますけれど、「概に女と云つたつて、一つは齡に在るので御座いますね。」

「は、齡に在ると云ふと。」

「私共の商賣の者は善く然う申しますが、女の惚れるには、見惚に、氣惚に、底惚と、慙う三様有つて、見惚と云ふと、些と見た所で惚込んで了ふので、是は十五六の赤襟盛に在る事で、唯奇麗事でありさへすれば可

いのですから、全で酸いも甘いもあつた者ぢやないのです。それから、十七八から廿そこくの處は、少し解つて来て、生意氣に成りますから、顔の好いのや、扮裝の奇なのなんぞには餘り迷ひません、氣惚と云つて、様子が好いとか、氣合が嬉しいとか、何とか那樣處に目を着けるので御座いますね。ですけれど、未だく猶且浮氣なので、此人も好いが、又那人も萬更でなかつたりなんぞして、究竟お肚の中から惚れると云ふのぢやないのです。何でも二十三四からに成らなくては、心底から惚れると云ふ事は無いさうで。それから本當の味が出るのだとか申しますが、那樣ものかも知れませんよ。此齡に成れば、曲りなりにも自分の了簡も据り、世の中の事も解つて居ると云つたやうな勘定ですから、いくら洒落氣の奴でも然うく上調子に遣つちや居れるものぢやありません、其處は何と無く深厚として來るのが人情ですわ。慙うなれば貴方、十人が九人までは滅多に氣が移るの、心が變ると云ふやうな事は有りは致しません。あの「赤い切掛け島田の中は」と云ふ唄の文句の通、惚れた、好いたと云つても、若い内は奈何したつて心が一人前に成つて居ないので、猶且それだけで、爲方の無いものです。と言つて、お婆さんに成つてから、やいのやいの言れた日には、殿方は御難ですね。」

お静に一笑してコソフを擧げぬ。眞二は連に頷きて、
「誠に面白かつた。見惚に氣惚に底惚か、酔に在ると云ふのは、是は大きに然うだ。酔に在る！ 確に在るやうだ！」

「大相感心なすつて被居るぢや御座いませんか。」
「大きに感心した。」

「ぢや屹度、胸に中る事がお有なるとは御座いますね。」

「ははははは。何爲。」

「でも感心あそばし方が凡て御座いませんもの。」

「ははははは。愈よ面白う。」

「あら、然なので御座いますか。」

「ははははは。然なるとは奈何なの。」

「まあ、然なのですな。」

彼は故に瞪れる眼を凝して、貫一の酔ひて赤く、笑ひて綻べる面の上に、或者を羨むらんやうに打睨れり。

「然だつたら奈何かね。ははははは。」

「あら、それぢや愈よ然なので御座いますか！」

「ははははは。」

「可けませんよ、笑つてばかり被居つたつて。」

「ははははは。」

(新續篇をばり)

紅葉集



紅秋 葉濤 山居 人士

冬ふゆの日は既に暮れて、嚴寒げんかん膚はだを劈つんざく華氏ワ氏の十九度、街燈げんとうの光は黯くく狭せま霧立きりたち軍ぐんめて、仰あやげば落おつたる星影ほしかげ冴さえたり。地ちは大おほ雪ゆきに蔽おほはれ、雪ゆきは敷ふ石いしの如ごとく踏ふ固かためられて、唯ただ時にトロイカと稱なづふる乗のり合あ橋はしの往ゆき來きを見る片かた側がは町まちの簷えん下したに、客待きやくまちの馭者おんしやが兩箇ふたりして胸頭むねがしらをしながら、

甲「ええ、かう、滅法めつぽう寒さいぢやねえか。これぢや全ぜんく方返ほうがへしが付つかねえや。」
乙「ところが、這こん麼な寒さい晩ばんには、懐ふと合ごうの煖あつけえ手合てあひが飲のみに出掛でけたがる奴やつよ。そこが此方輩こつぱらの着目つげめなんだ。樂たのをして居ゐちや錢ぜには取とれねえとよ。」

甲「へん、死おんだ親父おやぢが宜よろしく申ましますだらう。」
乙「迷まげねえ。」

と絶たえず足踏あしふみをして幾分いくぶんの寒ささを凌しのいで居ゐると、忽たちち「馭者おんしや？」と呼よぶ聲こゑ。

甲「おゝ、お客おきやくだ。」と彼等かれらは勇ゆうを作して、トロイカトロイカの馭者おんしや臺たいに飛乗とびのりるまゝ聲こゑせし方かたに馬うまを追おへば、客きやくは

寒 牡 丹

寒 牡 丹

毛皮の外套に同じ帽子を冠つた三人連の紳士、之を載せて箭の如く奔去つた迹は、寂々寥々たる白妙の砂漠と見るばかり。

抑も此町たるや、露西亞の都聖、彼得堡市の場末、一面には古色蒼然たる人家立續き、對面は六尺許の塀圍をした野廣い畑になつて、家々の道に臨む小窓は防寒の爲二重造りにして、其の間に盆栽などを並べ、内には白い窓帷を引いてある。いづれも仕舞屋で、如何なる種類の者が住へるかと謂へば、小金持、後家、恩給を受ける者等が寄合つて、質素に暮して居るのであるから、極めて陰氣な町通。けれども道路は廣く、空氣の流通は好し、日映は好し、前は畑で、遠く木立の空に接する眺望も好し、閑人達の事なれば食後に窓帷を掲げて外を眺めて楽しむのを常とする。

例に因つて今が彼等の眺むる時刻、吹くともなしに寂しい夜風は窓に訪れて、トロイカの馬鈴が何とも謂れぬ哀切の遠音を送つて、胸の逼るやうな感が有る時、響は次第に近いて、旋て橋の雪を軋る音が聞ゆれば、二壱三壱と續いて窓下を馳せて行く。中に六人乗と謂ふのには、男女の笑ひ聲がして、唱ふ、騒ぐ、太陽氣に飛して行くのは、陸軍士官が敵娼を伴れて飲みに行くので、其が通り過れば、窓に倚つて居た者は、

「あゝ、又「紅茶屋」か。」

と呟きながら内に入つて了つた。

扱其の「紅茶屋」と謂ふのは、此の町盡頭に在つて元來は居酒屋、都へ通ふ車力、人足などの立場であつたのが、段々と爲出す中に何時面目を改めて、當今では天晴流行の料理屋に成つたのである。其の繁昌を來したのは、此の近傍に一時決闘の行はれた事が有つた爲に、おのづと土地の名が揚つた所から、伴れて「紅茶屋」なる者も知らるゝやうに成つたとの説が有る。

其昔は見る影も無き居酒屋であつたのが、今日の「紅茶屋」は儼然たる老舗となつて、割烹は勿論座敷から給仕に至る迄萬端達いたものであるから、聖彼得堡の紳士社會は此を二無き者にして最賈にする。従つて客種は中以上上流に限られて居る有様、之に反して此に出入る婦人と謂へば娼妓のみである。

扱て此夜の寒氣は格別で、然云ふ晩には例のトロイカを飛して飲みに来る紳士が多い、坐敷は皆塞つて、燈影衣香の間に笑語の聲は薄くが如く、興酣に、樂を極めざる處も無かつたが、十時過より寒威の俄に裏つた爲に各宴を撤して、十二時頃には客は大方起つて了つた。

然るに、此時非常の速力を以て、人跡絶えたる雪の砂漠の中を眞一文字に飛し來る一臺のトロイカがある。年若き陸軍士官が三人乗合つて居るが、いづれも泥酔の體。

甲「こら、馭者。馬が疲れたやうぢやから、少し休ませい。而して其から壯に「紅茶屋」へ突貫するのじや、可いか。」

橋は暫く其處に駐る。

甲「あゝ、愉快、愉快、大いに愉快じや。」

乙「愉快な事は無い。彼奴等は何爲吾輩と一緒に來んのだらう。失敬ではないか。平生の愛顧に酬る道を知らんと云ふのは、實に怪しからん話だ。惡むべき者だ。」

此人は吳城中尉と云ふ。

丙「毎も來るのに、今夜に限つて來んと謂ふのは何云ふ譯か。」

甲「鞠江の曰くじや、僕と吳城が大酔して居るから、それが可厭ぢやから來ん、と言つたぞ。」

吳「何！吾輩が大酔して居る？大いに飲めば大ひに酔ふのは當然だ。酔ふ爲に飲んだのではないか。大酔し

て居るのが奈何したのだ。大酔して居るのが彼等に奈何あるのだ。利いた風な事を言ふ奴、吳城中尉たる者が自ら好んで酔つたのだ、匹婦の分在として譎語を吐くな、おのれ！」

甲「まあ可いぞ。それで僕は彼に然う言うて遣つた。貴様達が來んなら來んでも、「紅茶屋」の酒は旨いのじや。」

吳「勿論！」

甲「貴様達ばかりが女と思ふな。」

吳「勿論！」

甲「と云うた語が識を成して、今來る途で彼奴等より數等美なる婦人に會うたぞ。」

吳「うむ、そりや妙だ。其婦人を拉して行かう。」

丙「もう十二時ではないか、今頃此の寂しい處を女が通るものか。早く行くと。」

甲「いんや、通る、通る。僕の先に見た美人は此方へ來るのぢやから、最少し待つて居る内に必ず來る。」

吳「面白い。是非其を招待して「紅茶屋」へ行かう。」

此中に酔の最も少いのは丙なる靈泉府中尉、試に席を起つて奮來し道を窺へば、果せる哉、白妙の中に一點黒き人影。

靈「おゝ、那か。成程、女のやうじやのう。」

甲「来たか。おゝ、那じやく。」

吳「来た？ 天の賜だ。」

其有つて間近に顯れたる婦人の姿は、次第に此方を指して来る。待構へたる吳城中尉は櫓を飛出て、躊躇ながら婦人の傍に走り寄つた。微黯い街燈の光であるから、すつぱり防寒具を着込んだ人の顔容は判然せぬが、容易に年若き婦人とは知られた。

吳「いや、途中甚だ失禮でありまするが、此のお寒いに夜中何方へお越で。お手間は取せません、是非何か暖い物でも差上げたいと存じて、那へトロイカを用意致して置きました、些と其處までお出を願ひたい。」婦人の驚愕は一方ならぬ。此分では如何なる狼藉に遭はうも知れぬが、四邊を見れば人影は無し、家々の窓は皆閉じて一點の燈の流るゝ處も無い。こりや奈何したら可からう、と迷身になつて戦々顛ひながら、

「御常談を有仰つては困ります。」

と言ふも苦しまぎ絶體絶命。此の様子を見て駈來つたのは大酔の澤毛野中尉、

澤「いや、御遠慮無くどうぞ那へ。さあ、まあく那へ。」

と手を取らんとする。

其處へ又立顯れたのは靈泉府である。是とても二人ほどは酔うて居らぬが、十分に酒氣は帯びて居る。大の男が三人而も各踰限に吃醉つて居て、怪しからぬ振舞にも及ばんと爲るのであるから、婦人は毒蛇の腮にも臨む心地。

「皆さん、此をお通じ下さいませ。然も無いと私は大聲を立てますが、宜うござりまするか。」

澤「那樣家暮を云ふものではありません。奈何じや、諸君、早うお伴れ申さうではないか。」

吳「其が可からう。」

と言ふより早く、誰が眞先に手出を爲たとも無く、矢庭に婦人の兩脚を抄つて、體の浮く所を一度に扛擧げた三人は、恰も蒼鷹の鳩を擲たる勢、難無く手籠にしてトロイカの中に推込み、頭から熊の敷皮を打被

寒 牡 丹

けると云ふ始末。婦人は始終命限りに抵抗したのであるが、男三人の力盡、聲限に叫びもしたが、寂しき町の氷る真夜中。

「取者、遣れ。」と云ふ聲の下に三頭の馬は足掻を揃へて、疾風の如く奔った。

二分間許にして「紅茶屋」の前に着けば、三人は婦人を中に取籠めて、身動きも爲せず、聲をも出させぬやうにして、奥まりたる一室に引擦り込んで了つた。女と云へば娼妓などよりは來ぬ家の事であるから、客が酔つて恣云ふ悪作劇をして、女が泣き騒ぐなど云ふ事は往々有るから、給仕も目慣れて居て別に怪むものもない、苦笑をしながら室の入口に控へて居ると、

澤「こら、一時間ほど経つたら何か見繕うて持て來い。」

「畏りました。」

と給仕は圍を立てる、びんと内から錠を下して、澤毛野は錠をポケットに入れた。

(一一)

此夜は満月で、九時頃より晝を欺くばかりの月色、狭霧は雲渡りて夢の覺めたる如く、道の雪は玲瓏と

覆いて、麗しき夜は唯寒く靜に更け行くのみ。時に此の町盡頭の只有る家の戸が啓いて顯れたのは一箇の老人。識世經ぬらんと見ゆる毛皮の外套を絡ひ、帽子を目深に冠りて、戸口を出ると其處に佇んで、類に往來を眺め、或は耳を欲て、何やら心を配る體であつたが。

「奈何したと云ふのぢやらう、もう還りさうなものぢやに、此の様に晚いとは、吁、氣懸な事じや。」

と溜息响きながら又内に入つたが、其室の燠爐の傍には見るも可傷く病勞れた妻が椅子に懸つて居る。此婦人は十數年來のリウマチズムで全身不隨、骨と皮ばかりに瘦衰へた體を椅子に結付けてある。夫の悄然と入つて來るのを見て、

「未だ見えませんか。那の子に限つては何が日に此の様に晚くまで還らない事は有ませんのに、途中で間違でも有つたのでは御座いませぬかねえ。」

老人は含黙で室内を歩きながら類に考へて居る。

「不如誰かを倉府の奥様の所へ見せにお遣りなさいませぬ。」

「うむ、然うだのう。」

寒 牡 丹

と急いで臺所へ行くと、庖人と給仕も晚餐の支度を爲たまで、令嬢の歸來を待たせ居る處。直に一人を倉府夫人の許へ走らせて、老人は居間に復つて来たが、益々不安心の様子で翌々として居る。

「貴方、まあ然う氣を揉まずに、何ぞ其處に在る物でも召上りましな。」

と病人に慰められる始末。疾に晚餐の膳立が出来て、両親は先から娘の歸來を待つのである。

「いや、俺は何も欲うないが、お前奈何じや。」

母親は猶更欲くはない。話は是で切れて、互に無言の中に心を傷めて居ると、程無く臺所に聞ゆる話聲、使が返つたな、と老人は慌てゝ行かうとする出會頭、直と入つて来た給仕の顔を見るより、

「奈何じや〜、娘は居たか。」

「いえ、奥様の有仰いますには、今日はお嬢様はお見なさいません。」

「何、娘は倉府さんへは行かん!? それぢや何處へ行つたのぢや。」

と老人は顔色を變へて、病人の傍に寄つたが、何と言出づる語も無く、唯其手を把つて途方に昧れて居た。病人は故と笑顔作つて、然も心安げに、

「貴方、まあ那樣に心配なさる事は御座いませぬよ。屹度ピアノのお師匠さんへ行つたのだらうと思ひます。然すれば、もう還りませうから、御酒でも一盞上つて被在します。」

「もう十時じや。這様に晩うまでピアノの師匠の處に居る筈は無い。こりや何か間違が有つたのじや。」

と情無さうに妻の顔を眺むれば、然らぬだに心弱き病人は脱然氣を落して、

「蕾又や〜」と娘の名を呼んで泣俯した。

「貴方、奈何したのでせう、蕾又は死にでも爲たのぢやありませんか。若も那樣事でも有つたら、私は奈何しませう。丹精に丹精して育て上げた大事の〜獨子、吁、然ふ念ふほど胸が張裂けるやうで……。」

と母は涙を搾つた悲歎に沈む。

「いや、まさか那樣事もあるまいけれど、今時分まで還らんと云ふは、何分氣懸な事じや。」

と父親も口には言はねど心中には、千萬無量の取越苦勞。

「いえ、今迄還らない所を見ると、他の身に凶事が有つたに違ひ有りません。貴方、早く聖像の前に御燈

を供^もげて下さいまし。私達が婚禮に用ゐた那の蠟燭は、病氣災難等の有る時神に御救を願ふには、那を點^{とも}して祈禱を爲るが何よりと云ひますから、然う致しませう。もう、此上は神の御救を願ふより外は有りません。早く御蠟^{ろうそく}を、

と言ふので、老人は次の間から聖像と件の蠟燭とを持來りて、テンプルの上に押直し、火を點^{とも}して、恭しく之に向ひ、手を以て胸に十字を畫きつゝ三度禮拜^{らいはい}して後、妻の傍に來て、互に手を執つて一向專念^{いっかうせんねん}に祈禱をした。

折から聞ゆるチアヤチの鐘は十時半。益^{カアテン}迫る月の光は窓帷を洩れて差入る處、煖爐^{ストーヴ}の火は衰へて碎然^{ヒツツ}と石炭の燃え落つる音、蠟燭の火影は陰々として老夫婦の愁深^{うれひ}き面を照す。父は突然顔を擧げて、

「はて、足音がするやうぢやが。」

「何、足音が。」と母は伸上つて耳を澄したが、何も聞えぬ。

「然うぢや御座いせんよ。」

「いや、少し待てよ。」と猶聞澄して居れば、歴々^{あか}響く人の足音、次第に近くと思ふ間に、ぱたくと來て門口に止つた。母親は吾を忘れて、

「もし、那の子のやうです。」

「然じやく。」と父は飛出して戸を開けば、疑も無く娘の鬢^{かみ}又。

「鬢又か！」

「父様！」

「おゝ、鬢又が還つたぞ！」

と居間の方へ聲を掛ける隙に、鬢又は直^{コソ}と通つて、母の顔を見ると等しく其膝に取付いて、わつと泣出した。「おゝ、鬢又！お前、まあ奈何お爲た。」

「母様！」と更に泣顔れて居る所に入つて來た父親は、無事に還つた娘の姿を見れば、又有^{さすが}繫に家を忘れた不貞の疑無き能はずで、

「鬢又、何處へ行つたのぢや。」

と苦い顔をして言放つ。母親は覺えず利かぬ手を動して娘の肩に掛けて、泣入る顔を覗きながら、

「お前、今頃まで何處へ行つて居たのだえ。父様も私も甚麽に心配したか知れはしないよ。」

「まあ、何處へ行つたのじや、早う言はんか。」

其時螢又は容を正して、

「私は何處へ行つたのですか、而して奈何したのですか、實に申しやうも無い不幸に遭ひました。」

と外套を脱ぎ、手袋を抜いて、やをら椅子に掛けたと見ると、顔色は灰の如く、髪は散々に亂れて、手の甲には幾處も血滲んだ掻傷、中には大く赤痣に成つた處も有る。

螢「私が今出て来た處杯は何處だか存じません。又那樣處へ誰に連れられて行つたか、それも存じません。

私は、然し、此上も無い名譽を傷けられて、父様や、母様に合す顔が御座いません。孱弱い女の身の悔しさに、謂ふに謂はれない無禮を受けました。」

と身を顛して泣立てた。之を聞いた母親は劇しく心を動して、咄と云ふと絶入した。娘は見るより氣附薬を與へて介抱すると、頓て目を開くや否や螢又を引寄せ、物をも言はず唯其顔に涙を滌ぐのみ。是まで熱

と考へて居た父親は、

「本當の事を言へ。親を詐ると内には置かんで。」

「神に誓ひます。神に誓つて吃と此復讐を爲なければなりません。」

「おと、善し。それで善し。さあ、話を爲て聞かせなさい。」

と娘を中に兩親は左右に控へた。螢又はやうく氣を鎮めて、

「今日はピアノの稽古日で参りました所、先生が他出をなすつたものですから、お歸來を待つて居た爲に稽古が晚く四時から始まりまして、了つた頃には日が暮れましたので、誰かに送らせやうと有仰つたのでしたけれど、遠方ではなし、慣れた道の事ですから、お断申して、急いで歸つて参りますと、我家から半町ばかりの處で、通過きたトロイカが待つて居まして、私を見ると三人の男が出て来て、一人の者が、一緒に來いなどと常談を言ひますから、二言三言應つて居ますと、三人とも可恐く酔つて居るので、理も非も無く、哄と言ふと私を手取り足取り橋の中へ扛込んで、聲を出さうにも熊の伎に裏まれて、行先も判らず載せられて行つたのは、或る立派な家の座敷。其三人の者は近衛士官で、名は知りませんが、三人が三人とも私は

顔は能く見覚えて居ます。死ぬまで忘れられない程見覚えて居ます。惜いのは其の士官達、私の驚いて騒ぐのを面白半分の玩弄物にして、欲しいほどの贈物を爲るから意に従への、貨が好ければ貨を遣らうのと、テエブルの上に紙入の紙幣や銀貨を打覆けて、可厭がるものを引寄せたり、取付いたり、逃げやうと爲れば押へられ、聲を立てても来る者は無し、其時闇を叩く音がして、酒を持って来たのでしたから、其口から逃げやうとした所が、給仕に突飛されて、猶且出ることには出来ず。持つて来た酒はシャンパンで、其を是非飲めど、三人してもう煩く勤めますから、私は突付けられたコップを取つて其處へ撲き付けて、其の破片を又一人の顔に打付けて遣りました。而すると、其男が起上つて、もう好い加減に爲んど何を爲るか知れんから、早く始末を爲たが可からうと言ふと、皆惣立になつて、隣の眞暗な室へ無理無體に私を推籠めました。私は其時死んでも可い氣になつて手向ひをしましたけれど、到頭室の隅の方へ推付けられて、二人の者は出て行くと、唱ふやら、躍るやら、非常な騒ぎをして、私が聲を立てるのを聞せないやうに爲るのです。泣いても叫んでも来る者は無し、逃げやうにも逃げられず、悔しい悲いで取逆上て、何が何だか夢中でしたが、残念なのは女の効無さに、其奴の爲に名譽を傷けられて了ひました。體は然して汚されましたけれど、

此の精神は、父様、母様、些も穢れずに潔白で啓ますから、どうぞ堪忍して下さいませ。」

と齒咬を作して涙を流せば、聽居る父は己が身を祈らるゝよりも辛き思、拳を握り、唇を頭せて、

「其奴の顔は覚えて居るの？」

「黒暗々の事で判りません、でしたけれど……。」

「何、判らん？ 見覚えは無いのか！」

「其奴の顔こそ判りませんが、三人の顔は好く知つて居りますから、私は必ず見出します。」

父は仰いで太息したが、さて聲を和けて、

「而してお前は其處から奈何して出て来たのじや。」

「外に居た二人の者が急に闇を啓けて、其奴を呼んだものですから……。」

「名を呼んだか。」

「いえ、早く来い、と二聲ばかり呼びました。それで、其奴は出で行きましたから、直に私も其處を出ますと、三人の者が立談をして居りましたが、外の方で顔に警察官と云ふ聲がして騒々して居ました。私が出

て参ると三人の者が傍に寄つて来て、早く此を出て行けと申して、外套を着せたり、手袋を持つて来たりして、一人がポケットから短銃を出して、若し此で聲を立てたら唯一撃に爲ると脅迫しました。私は黙つて戸外の方へ行かうと爲ると、又引拵めて、其處まで送らうと言ふので、其時はもう三人とも酔は醒めて居て、心苦しうな顔色をして居ました。トロイカに乗れと言ひますから、又三人と一緒に乗りますと、始のやうに熊の皮で何も見えないやうに私を裏んで、五分間ほど駆けさせたかと思ふと馬を駐めて、其處で卸しました。——丁度那の堀割の際で。

父様、私は自分の不束から身を汚しまして、何とも申譯は御座いませんけれど、自ら犯した罪ではないのですから、どうぞ御勘辨なすつて、娘の奮又に生恥を搔せた復讐をなすつて下さいまし。私は此の復讐を爲なければ生きては居りません、又此の復讐を爲ない内は私は決して死にませんから——

「お、好ふ言うた！ 此父とても其通じや。其の無禮者を引提へて肚の癒るほど仕返を爲んどや、死なうとて死なるとか。」

「御苦勞を掛けまして、父様、誠に濟みません。」

と奮又は又もや聲を放つて哭いた。重病の母は始終の物語を聴いて、唯涙に味れて居たが、此時暴に氣色變りて、容易ならず見えたので、父と娘とは大きに驚き、直様ベットに移して手宛を施し、醫師を迎へて、其夜は寢ずの看護。親としては娘の淑徳を傷けられ、夫としては妻の危篤に際すと謂ふ、一夜に降つて湧いたる兩様の災難。老人の心痛は幾と狂氣に及ばんとするばかり。

十數年來のリウマチズムの爲疲れに疲らされたる母親の體は殆ど朽木と一般で、唯僅に生きてゐると云ふ形を保つに過ぎるのであつた。其處へ家の寶とも身の樂とも頼み切つた愛娘が不慮の殃、世に出ることも克はぬ疵物に成つたと聞いた失望は、然らぬだに脆かる朽木に手強き斧の一撃を與へて、劇變の容體と成つた。

夫たる老人は三十年間も陸軍の醫官を勤めた人であるから、醫師を招いて駭かさるゝ迄も無く、最早病妻の末期は此夜の内を出でずと曉つたのであるが、果せる哉、東雲の空白く窓に映する頃、病人は朽木の碎けて風に散る如く何の苦も無く往生した。

夢とも現とも分かぬ娘の奮又は涙も出でず其の枕邊に頽折れて、重なる不幸に失心の體。老人は昨夜を歎き、

今朝を悲む中にも、明日より親子が爲すべき事の樂からざる前途を念ひなどして、得堪へぬ愁に沈んで居た。扱意で有るべきにあらざれば、式の如く葬儀を執行ひて、數日の後には親屬朋友等を招いて酒饌を出す。露西亞の風習として士分の家にては二種の苦味を帯びたる氷酒を用るのが此日の禮で、之を「不幸の盃」と稱へる。

老人は右の「不幸の盃」を舉げて、來客に對して一言を述べた。

「今日御來會下されました皆様に向つて申し上げます。御承知の如く私の家内は十年越の長病、なれども猶若干の餘命を保ち、程無く初孫の顔を見る樂も有つたので御座ります。然るに突然にも不幸、私は愚痴を申すのでは御座りませんが、こりや決して病の爲に斃れたのでもなく、又彼の命數の盡きたのでもないと思はるので御座ります。既に世間へも遊々は知れ亘りました娘奮又が身の上の災難、親たるものゝ情として、之を苦に病みました餘に、敢無く命を殖しました次第で、其喪に服し居ります我々親子の者は、尋常一様に妻を失ひ、母を失ひました悲傷の外に、忍ぶ可からざる苦痛を感じますので御座ります。然しながら今日に於る幌尾家の大不幸も、天に居ります奮又が母の誠と、又其誠を鑒みたまふ上帝の公平なる裁判

とを以て、必ず釋さるゝ日が有らうと信じて疑ひませぬ。何卒皆様方にも亡き靈の此世に遺せし念を憫み、又不幸に不幸を重ねる親子の心を御推察ありまして、一日も早く吾が幌尾家の此の厄運の中より救われますやう、俱共に御祈願あらんことを冀ひまする。」

此の演説の訖るを俟つて、客は同音に悲き讚美歌を三度繰返して謳つた。

老人が自ら言ひし如く、奮又の遭難一件は既に洩れて近所の取沙汰と成つたのであるが、其は單風聞と謂ふに止つて、悉い顛末は知れぬのであつた。然るに「不幸の盃」の日から二日過ぎて其事情が始めて世間に傳播した、と謂ふのは、當地の警察署が被害者の手から告訴狀を受取つたのである。親戚知人は皆眉を蹙めて、事も有らうに恚る事を告訴するとは何たる意であらう、闇黒の恥を明白へ出して、娘が彌よ疵物に成るとは氣が着かぬか。然りとは老人の分別とし覺えぬ無謀、と中には訪來て深切に言ふ者も尠からず。然るに老人は如何にも覺悟の體で、

「私とても決して娘の不名譽を吹聴したうは御座りませんが、何分にも既に世間に知れ亘つた事實と成つて見れば、其際此方が度さうとしたとて度さるゝものではない。又告訴したのは聊か思ふ子細も有るので、

今日の所我儕親子は彼の不名譽に就て恥づると申すよりは、其の以上の事を實は考へて居りまするで。」
 と云ふ挨拶。娘の蓄又とても其言の如く、少も恥づる氣色は無くて、平常のやうに外出をする、而して名譽を
 傷けられた貌も爲すに平然として往來するから、通り過る者は謂ふに及ばず、到る處そこらの窓から首が出
 て、「他が然うだ」と目引袖引好い見物にされる。中には其の鏡面皮を憎んで悪口する者も有る。如何に覺
 悟は有りと言ひながら、娘心に其の辛さは一通りでない、後には可成り引籠つて居るやうに爲たが、然し日
 に一度づつは其中でも必ず散歩に出る。父親と手を携へて、貴族の多く往復する町、近衛士官の聚る公園、
 と専ら目を着けて徘徊するのである。

親子の者が不名譽に不名譽を重ねて告訴したのも、群集の中に忍んで生恥を曝すのも、頼むところは復讐の
 一事、其の一事の爲には二人ともに身を忘るゝのであつた。

話次分頭爰に皇后陛下の名譽女官として貴婦人社會に隆々の盛名を貢ひ、夙に淑徳の聞え高き吳城伯爵夫
 人と云ふは、若年にして殿を失ひしが、志操高く品行端正にして、位に矜らず、富に傲らず、頗る慈善を喜
 んで、弱きを助け、貧きを憐むるので、上下ともに敬慕して、此夫人の名を聞けば、實に草木も靡くばかり。

扱慈善を施すと云ふ中にも、吳城夫人ならでは能はざる事が有る、設へば政府に向つて其身の不幸を歎願し
 て聽れざる者、彼等は其恨を抱いて皆夫人の門に伏して哀を乞ふのである。然る時は、訟の筋に因つては直
 奏して聖斷を仰ぐ。又叔康を勞すほどの事であれば、財を吞まずして飽くまで彼等の爲に盡して遣る。
 憊る次第であるから、夫人の門前は日毎に市を成して、貧き者、病める者、老いたる者、幼き者、憂ふる者、
 悲む者、八方より集り來て皆濟はるゝ。又一面には上流の交際を控へて居るから、其方の出入も盛なる者で、
 木曜日を公然の面會日と定めてあるから、此日の如く夫人の邸の賑ふ事は無い。

(三)

此日は木曜日で、而も吳城邸より遠からぬ佛蘭西大使館に舞踏會の催さるゝと云ふ其夜に相當したのであ
 るから、之に赴く交際社會の花形は皆車を寄せて挨拶をして行く。門前の繁華、客殿の混雜は夥しきもので、
 伯爵夫人は正面の長椅子に倚つて其の大客を一々引受けて、倦める色も無く八面玲瓏に應答するのである。
 一時 客も減じて、席に在る者約十餘人、其時、

「伯母様。」 と呼掛けたのは夫人の甥なる吳城中尉、富夜酔に乗じて兇行を犯せし其の張本とは誰知る

寒 牡 丹

者も無し。

吳「今夜は舞踏會へ御出はなりので御座いますか。」

夫「木曜日は私は外出する譯に行かないのですからね、それに今日は非常に勞れて居ますから、何方に
しても出られません。」

傍に居た外交官が、

「いや、お察し申します、毎日の事で御座いますから定めて御疲勞で御座りませう。然しながら善い事を
作つてお勞れ遊ばす、お勞れ遊ばす程善い事を作るので御座りますから、實に這麼お可羨しい事は御座りま
せん。」

之を聞いて夫人は微笑を含み、

「いえ、もう心の中では那も慙もと思ひますけれど、さて實行と申す事は難いもので、自身では十分の力を
盡した意でも、其實十分の一の事よりは出来ないので御座います。何云ふもので御座いますか、近頃世間が煩
くなりましてね、靜な生涯が送つて見たくて成りませんから、暫く此の繁雜な社會から退隱したいと思つて居

ります。」

「伯母様が然云ふ事になつたらば世間の可憐な者は奈何しませうか。此の世の中に拯はるべき者の有らん限
は、伯母様も此の世の中を捨てる事は出来ません。」

夫人も心には其の如く自ら負ふ所無きにしてもあらざるので、有緊に満足なる面色にて、其事に就いて再び言
はずして止んだ。語を次いだのは年紀五十餘の陸軍參謀長。

「此の世の中は捨てたいと觀じたら、實に捨てたい。又捨てられぬと考へたら、到底捨てらるるもので御座
りません。我他ともに力を戮せて之を濟はなければ、滔々相率めて社會は毎日に退歩するやうな有様が御
座います。」

今朝でありました、私は警視總監の所で怪しからん犯罪の話を聞きました。

と頗る感じた氣色であるから、如何なる物語を聞せるであらう、と一座固唾を嚙んで居れば、そのまゝ參謀
長は黙して了つたから、一個の貴婦人は憤れたさうに、

「それは甚だ犯罪なので御座いますか。」

...

寒 牡 丹

「さあ、其が些とお話を致し難いのでありますが、文明の今日に於て有得へからざる野蠻、殘刻、鄙劣、……罪惡中の罪惡とも謂ふべき兇行を、肆まにした曲者が有りましたので。」

「何か盜賊でござりまするか。」

と訊ねたのは吳城中尉。

「なか／＼盜賊如き輕々しいものではありません。」

彼の貴婦人は恠へかねて、

「どうぞ其のお話をお聞せ下さいませ。皆様も御所望で御座いませう。」

「是非伺ひたいもので。」

「それは面白／＼なお話。」

と四方から聲が掛る。參謀長は大きに當惑の體で、

「いや、實は其事件は未だ公にすることは出来ないので、警視總監も今朝始て、私の居りました時、其の報告に接したくらくらぬでありますから、此でお話を致しては、警察上の秘密を洩す嫌が有りますので、残念ながら悉い事は申上げかねる。」

「然やうならば概略で宜うござりますから、どうぞ。」

と彼の貴婦人は飽まで聞かうと爲る。參謀長は益す窮して、

「固より概略よりは存じませんので、私が其の報告書を読みまして……。」

「報告書を御覽あそばしたので御座いますか。」

參謀長咄と塞つた。其時一座の客は口を揃へて、警察上の妨害にならざる限の事實を語るやうにと迫りに迫つたので、參謀長も今は道る路無く、如何にも口は禍の門と頭を掻いて、

「然やうなればお話を致しますが、幸ひ此席には令嬢方の御在が無い……。」

と座中を見亘す時、吳城伯爵夫人は一言の注意を與へた。

「若しお話が聞苦しいやうで御座いましたら、貴官に御退座を願ひますから。」

參謀長は之に對して目禮した。一座忽ち肅然として水を打つたるやう。

「貴婦人方には少く憚るべきお話でありまするが、是は私が面白／＼くでお話を致すのではない、吾が露西亞帝國の體面に関する由々しき一大事、又社會の風致上忽にならざる事件として、私が大いに心を痛めます。」

る餘、之を皆様に訴へまするのでありますから、其の御積でお聽取下さるやうに。」
と沈痛の語氣を以て説出したので、聽衆は覺はす容を正して、座中益々鳴を鎮める。

「三四日前の事、處は場末ではありまするが、此の聖彼得堡の市内、陛下の御膝下で御座りまするぞ、而も夜の七時頃一人の若き娘が通行の際トロイカに乗つた三名の陸軍士官に勾引されたのであります。」
憂然と墮ちて物の碎ける音に參謀長は物語を中止した。人々も眼を轉じて響せし方を見ると、其處の飾棚に在つた支那製の小形の花瓶が墮ちて粉微塵に壞れたので。奈何して墮ちたのであるか、吳城中尉が墮した。奈何して墮したのであるか、話を聞くと愕然として吾を忘るゝ拍子に、彼の脇が觸れて突落したのである。
「伯母様、私は大變な粗相を致しました。御大事の品を這處に致して、何とも相濟みません。」
と中尉は耻入つて詫げる。伯爵夫人は目も掛けずして、

「那樣物は拘ひませんよ。而して其娘は爾後奈何いたしました。」
參謀長は更に打咳いて、

「其娘は其處から彼の「紅茶屋」へ伴れられて、終に謂ふべからざる恥辱を受けたと申す事で、其士官達は

甚しく酔つて居りましたさうで、いづれ酒の上の事でござりませう。吳城中尉、貴方は非常に感動された御様子であるが、是はお互に聞捨にならん事でありませう。吾が名譽ある軍隊の面目を蹂躪し、猶其身は三軍の模範たるべき士官の分として、禽獸に等しき振舞、唯々驚入るの外は無い。箇様な不埒者が一人でも吾が軍隊に居ると云ふ事を貴方は想像なさいませうか、私には想像することが出来ん。然しながら其の兇行者の堂々たる陸軍士官なることは事實として顯れたのであります。」

彼の貴婦人は又々慄へかねて、參謀長の語を遮り、

「爾後其の娘は奈何致しました。」

「其の娘は再び三人の士官が家の近處まで送つて来たさうであります。家では兩親が非常に心配、そこへ娘が還つて来たのは可かつたが、泣く泣く其話を爲ると、病身の母親は甚しく精神を激動させた爲に忽ち容體が變つて、其夜の内に死亡したのであります。」

談じて此に到れば滿座驚嘆の聲を發して、誰一人大使館の舞蹈を思ふ者も無い。參謀長は自ら語りながら今更に不快の色を作して、茫々然として手を拱いて居た。

「話か餘り小説的で、少しく信じられんやうですね。」
と言ふのは外交官。然思ふ人達は顔を見合せる。
参謀長は威丈高になつて、

「いんや、小説的ではあるが事實でありますよ。現に娘の親が告訴を致しました。其のみならず、證人まで出たさうであります。」

「證人が出ましたか！」

と訊ねるのは吳城中尉であつた。

「それに、「紅茶屋」の主人が拘引されたさうであります。」

「これは然うで御座いませう。而して彼は悉皆白状いたしましたですか。」
と問ふ者が有つた。

「彼は其の三名の士官の姓名を知らんと言ふのですが、是は實際知らんらしいので、唯三人の士官が一人の婦人を無理遣に連込んで来たと言ふ事を言つて居る。然しながら、那樣事は能く有るので、別に意にも留め

んかつたと言ふので。」

伯爵夫人は徐に口を開いて、其の被害者の身分、姓名を訊ねたのである。

「非職軍醫の娘でありまして、姓は幌尾、雷又と申します。十八歳に成ります。」

吳城中尉は胸の中で雷又、幌尾と繰返して居た。時に一箇の貴婦人、

「それから奈何になりましたので御座います。」

「さあ、其先は犯罪者を見出す一段でありますが、是が餘程の一大事に成りませう。」

と参謀長は愁然として容を改めた。屹と其顔を視たる伯爵夫人は稍聲を勵して、

「實に怪しからん話では御座いせんか。早々其の大罪人を逮捕いたさなければ國家の威信に關ります。第一其者は何處の聯隊の制服を着けて居つたので御座います。」

「甚だ申難いのでありまするが、聞く所に據りますれば、此に吳城伯の着けて居らるゝのと同じであつたさうに御座ります。」

之を聞くと與に聽衆の眼は矢を射る如く吳城中尉の一身に注いたのであるから、皆に其服の同じさのみなら

寒牡丹

す、其人までも同じき吳城伯は、幾と目眩まで仆れんとしたのである。冷汗背に瀧を作して、胸も破れぬべき鼓動の未だ鎮らざる時、突然、

「お前さんぢやあるまいの。」

と聲を掛けた者が有る。中尉は戦慄して蒼くなつた。それとも知らず一同は哄然と笑つたので、覺えず息を啣いて、何奴なれば奇怪なる仇い、と其方を見れば、毎に常談を言ふ縁家の老伯爵、はたと顔を見合せたので、爲う事無しに苦笑をして、

「どうか判りませんよ。」

伯爵夫人は痛く感動したる氣色で、

「其は決して等閑にならん事件で御座います。其の蓄又とかいふ娘が娼妓同様の者でなかつたならば、實に此上も無い不幸で、其の胸の内は甚麼であらうか、思遣らるゝでは御座いせんか。同じ女の身の私達は之を傍觀して居つては奈何も濟まん事と考へます。」

「然し、或は娼妓同様の者であるかも知れんで御座いますな。」

と彼の外交官は喉を容れた。

伯「然やうで御座いますから、若し良家の娘であつたならと申すので。」

外「如何にも。」

伯「それで是は大問題で御座います。犯罪者が捕はれた曉に、當局者は何と處置を致すか知れませんが、加害者が貴族である、近衛士官であるからとて、毫釐でも斟酌するやうな迹が有りましたら、其こそ國家に取つて由々しい事に相成ります。で、此事件に就いては大いに意を用ゐて、最も公明正大の處置を望まなければなりません……。」

と伯爵夫人は口を極めて勢の爲めに法の枉ぐべからざる旨を主張した。座客は皆耳を傾けて、心々に娘の身の上を憫むと與に、貴族たる近衛士官の如何なる嚴刑に處せらるゝ事ならん、と罪は憎みながらも、又有緊に其の運命を悲むのであつた。

旋て舞踏會の開かるべき時刻も近けば、客は一人二人と漸く散ずる。吳城中尉も長居は後目痛く、櫛を見計つて席を起つたが、門外に出で利刀の如き寒風に吹捲らるゝまで、如何にして彼の長き廻階子を下りたの

寒牡丹

やら、誰が外套を着せてくれたのやら、吾と歩み、吾と着ながら、心痛の餘に其の吾を覚えぬのであつた。發熱したる頭腦の外氣に觸れて冷さると快さは、恰も酔後の水の如く、中尉は待せし儘にも乗らず家路を辿つた。さて彼は途上思ふやう、

「既に告訴して、警視總監へ報告が廻つたと云ふからには、人相等も書上げられたに違無し。それに近衛士官と云ふ事が始に判つて居るのであるから、或は最早嫌疑者と目指れて居るかも知れぬ。今夜歸ると手が廻つて居つて、直に引立てられるやうな事が有りは爲ぬか。

身は伯爵たり、近衛中尉たる己に對する法律の裁判は如何なる者であらう。又社會の制裁は如何なる者であらう。酒興の上とは謂ひながら立派に罪惡を犯したのであるから、其に對する處刑は辭する所でない、又社會の制裁を受くるのも覺悟の前。唯死しても愧づべきは、身荷も堂々たる伯爵の頭榮を荷ひ、刺へ至尊の守護たる軍隊の尉官ともありながら、己を己とも思へぬ人非人の破廉耻、實に那夜の事は天冤が見入つたと謂ふより外は無い。噫、情無い、淺ましい事を爲た。

決して此罪を免れんと爲るのではない、處刑を懼るゝのではない、が伯爵たり、近衛中尉たるの故を以て、

此身を法律の手に瀆させたくない、唯其のみが願だ。然し、今日となつては如何にとも遁るゝ路は無い——無からう——恐くは有るまい！

苦し彼の娘が其實娼妓のやうな者であるなら、之より大いなる幸は無い。千萬金を積んでも此の告訴を買つて了ふ、其は容易だ。

先に聞けば、非職軍醫の娘ださうだが、餘り裕でないと思えて、服装は善くなかつたが、容貌はなかく優れて居つたやうに覺ゆる。靈泉府や澤毛野は娼妓とも見做して居つたやうであつたけれど、自分は始から良家の娘と信じて居つた。大聲に叫んだり、涙を流したりして哀を乞ふのも、能く知つて居つたのだ。然るに泥酔して居つたこととて全く前後の思慮も無く、ちよつと思へば淺しいと謂ふよりは無殘な事を爲た！ 然るに泥酔して居つたは居つたが、自分は彼の娘の汚すべからざる者である事を識らなればなかつたのだ。而して又、彼の娘が自分の無禮を怒つて、力を盡して反抗した險脈は、若し又物でも持つて居つたならば、必ず自分を刺したらうし、又爲損じたらば自ら刺して、寧ろ潔く死なうと云ふ決心であつた——確に然う見えた。であるから、其の無禮、其の侮辱、其の暴行に對して彼の娘が飽くまで復讐せうと謂ふのは當然、復讐せずんば

止まぬのであらう。して見れば、縦や金力を用ゐらるゝ娘の身分であつても、那の復讐の念は賣るまい。噫、到底免れられん！己は今夜で滅びて了ふのだ。もう伯爵でもなければ、近衛中尉でもない、一箇の愧づべき犯罪者！然う覺悟せんければなるまい。然し、彼の娘は此方の顔を識つて居るであらうか。己を辱しめたのは此の吳城であることを認めて居るであらうか。當の敵を此方と知つて此方一人を告訴したのか、それとも、三人の内誰とも知らずに一同を敵手取つたのか。此方と知つて居つても三人とも告訴したのであらう。」後から櫓を曳いて、跟いて来る取者は時々咳拂をして、己の在るを忘れざらしめんと企つるのであつたが、何處まで來ても殿は召るゝ氣色は無い。寒風の夜道を櫓で徒行の御供は大分辛いから、取者は耐りかねて、今度は大聲に馬を叱り始めた。それで曉つた吳城中尉は直様櫓に乗つて、二人の共犯者を訪はんと爲たが、時計を見ると其の時刻でないから、眞直に自宅へ走らせた。

歸邸して居間に入ると、一通の書狀が來て居る。早速披見すれば、唯一行の文言。

「即刻御出ありたし 靈象府より」としてある。

吳城は其の文を持つたまま暫く考へて居たが、慌々として出て二階を下りると急いで支關へ行くから、家從は驚

いて追懸けながら、

「御前には何方へ。」

「些と其處まで。」

「唯今御乗物を。」

「いや、歩いて行つて來る。」

「然やうで。」と云ふ間に飛出して、門を出ると、辻待の橋に乗つて靈象府の邸へ駈着けた。

書齋の内には主の靈象府一人でない、彼の澤毛野中尉も來て居る。二人とも甚だ心配の體で、主は窄袴の衣兜に兩手を差込んで、熟と首を俛れたまゝ室内を彼方此方と頻に歩いて居る。澤毛野は煖爐の前の樂椅子に頰杖を拄いて身轉も爲す思に沈んで居ると云ふ始末。吳城中尉の入つて來たのを見ながら誰も言を掛けぬ。吳「何で今時分呼びに寄越したのかね。」

靈「大變な事に成つたのぢや。」

澤毛野は面を捻向けて、

澤「君は未だ知らんのかい。」

吳「知つて居るさ。」

靈「知つて居るぢやらう。那の娘の親が告訴したと云ふ話ぢやが……。」

吳「話どころではない、確に告訴した。」

澤「確に告訴した迄知つて居りながら、君は酷く落着いて居るでないか。」

吳「些も落着いては居らんけれど、實は唯今伯母の處で人から聞いたばかりだ。」

靈「で、奈何する積なのか。」

吳「何とか工夫して法律の制裁だけは免れたいと考へて居るのだが、計は有るまいか。」

靈「さあ、其じや。」

と靈象府は又首を俛れて彼方此方と歩くばかり。澤毛野に到つては絶望して顔色無いのである。

吳「告訴したと云ふのだが、三人とも遣られたのか、或は一人だらうか。」

澤「一人と云ふ事はない、無論三人さ。又事實三人が合體して引昇いたのだから、三人とも遣らるゝのは當

然であらうでないか。」

吳「それや當然ぢやない。眞の犯罪者と謂ふのは、手を下した所の僕だ。僕が一切引受けたから、君達は決して心配したまふな。」

靈「何を言ふのかい。罪を貴様一人に嫁けて、それで恬然として居る我々と思つて居るのか。」
と靈象府が寂しげに苦笑すれば、

澤「僕等の着う成つて騒ぐのは、己の罪を免れんが爲でないのだ。貴族の面目と近衛聯隊の名譽を思つて、二人の傷つく者も無くて事を納めたいと願ふのみなのだ。吳城、僕等を見損はんやうに爲い。」

靈「固より死なば諸共じや！ のう、近衛の三人兄弟と謂うたら知らん者の無い我々じや。貴様が一人名乗つて出たら、法律は或は我々を救すかも知れん、社會が赦さんじや、社會が！」

澤「社會が赦さん先に僕等の友誼が許さんから、のう。」
と二人は手を拍うて笑つたのである。

吳「いや、然うでない。然うでないよ。君達二人が傷かずに居てくれれば、又自ら僕が御蔭を蒙る道も有る

寒牡丹

のだ。」

澤「那樣事は有るものから。」

吳城は大意して、

「此分ぢや事の發覚するのは目前だ。手を束ねて捕はれる位なら、潔く自首して出た方が器量が良いな。これは自首かな。」

靈「自首すると云ふか。」

吳「……………」

靈「奈何か、澤毛野。」

澤「自首するなら惣出だ。」

靈「そりや勿論然うじや。」

少頃^{しばし}は三人とも無言であつた。テンプルに片臂置いて、皺めた額を抑へた吳城中尉は、漸く頷きつゝ面を擧げて、

吳「是は奈何だらうか。」

聞けば那の娘は生活も裕でないやうだから、十分に持参金でも遣る事にしたら、奈何か納るだらうと考へる。で、罪は實際僕が重い^{むたか}のだから、其の方の始末は萬端僕が引受ける。然して贖罪金を出しさへ爲たら、餘は大した刑を受ける事は無からうから、まあ君達は知らん顔で居てくれ給へ。」

靈「いや、隊長はのう、嚴刑に行はなければ成らんと言うて居るのじや。」

吳「隊長が?! ふゝ、餘り他の事は言はれん隊長だ。左に右酒興の上の戯だ、戯だが人の娘を傷けたのだから、其處は大に悪い、悪いから癒すに足るべき金を出して罪を謝すのだ。夫で事は済んで居る、隊長如きが嚴利も糸瓜も有るものか。」

澤「此で那樣事を謂ふたつて爲方が無い。左に右に罪を受くるなら三人で受くると云ふ事を誓はうではなからか。」

靈「そりや善じ。」

と起上つた澤毛野、靈泉府の二人は、切に辭む吳城中尉に逼つて、遂に誓の握手を行つたのである。席に着

寒牡丹

寒牡丹

くと又暫く無言、良有つて噓と小膝を拍つた吳城中尉、
 吳「好い智慧が有る！ 靈象府、君に姉上が有る。」
 靈「そりや有るわの。」

吳「あの姉上の勢力を用ゐて警視總監を説いてもらふのだ。是は實に名案だ。事が表沙汰に成つて了つては面倒だが、今の内手を廻せば未然に防ぐ事が出来る。それには警視總監を伴にこつて了ふのだが、彼を伴に爲るのは君の姉上の力より外は無。君の姉上ならば擒縦自在なものだ。」
 靈「それは然うかも知れん。」

澤「うむ、そりや確だ。」

吳「で、奈何も是は事を未然に防ぐに越した策は無いのだ。若し是が表沙汰の騒にでも成ると、他の賣色輩が好い事にして、今後甚麽事を言出すか知れんやうになる。然う成つた日には、吾人の名譽など云ふ者は馬前の塵に等きもので、何日何時何處で奈何吹飛されて了ふか知れん。」
 靈「大に然うじや。」

吳「であるから未然に防ぐ、又未然に防げば軽く防がれるのだ。君は姉上の處へ行つて、警視總監の一件を頼む。それから、澤毛野、君の伯父上は大臣ぢやないか、早く行つて保護を請ひ給へ。君の一身の浮沈に拘る大事だ、延ては大臣の名義にも及ぼす事だから、大臣も必ず棄てゝは措かんに極つて居る。然して一方からは大臣が運動し、一方には警視總監が手を飲めてくれれば、此の一件は首尾好く秘密の中に葬られて了ふのだ。」

と吳城中尉は九死の境に一生の血路を開き得たる満面の喜色。

澤「それから君は又君で吳城伯爵夫人の孫を求め給へ。」

吳「いや、其が可かんだ。伯母は大の反對な事は既に解つて居る。先之伯母の邸で此話が出た時、非常に激して我々の罪を鳴して居つたから、是は到底手が出せん、からして、僕は贖罪金の方を擔當する。」
 靈「然うか。それぢや各手分をして直に運動せんけりや成らん。翌の朝僕は早う姉の處へ行て來う。」

澤「僕も然う爲るわ。」

吳「僕は娘の方の動靜を搜る。」

寒牡丹

爰に三人は再び誓の握手を爲て、翌日又聯隊にて會はんと約して立別れた。

(四)

其夜靈象府は幾と寐すに明して、翌朝姉なる公爵夫人の家を訪れたのである。此の夫人は當時聖彼得堡の上流社會に並ぶ者無き美人で、十年前に阿茅淳公爵と云へる式部官と結婚したのであるが、其公爵家が又有名の金満であるから、交際社會に於ける夫人の勢力は目覺しいもので、恚るをや飛ぶ鳥も落つるとは謂ふならんと覺れた。

弟の例ならず早朝の來訪に、公爵夫人は何事の起つたのか、と大に驚いて早速居間に通じた。靈象府は心痛の餘夜一夜眠らぬので、顔色憔悴として、元氣沮喪して居る。其と看たる夫人の心中は一層驚いたのである。然りとは知らぬ靈象府は、有繋に何と言出したものかと運つて居ると、

夫「お前さん那の事件で來たのではありませんか。」

と突如に水破抜れたので、靈象府は覺えず頭ひ上つて、

靈「奈何して其を。」

夫「奈何してはありますせんよ。それではお前さんが那麽悪戯を爲たのですか、まあ實に怪しからんではありませんか。貴族全體の名譽に関する亂行………、呆れますね、お前さんは！」

と熱と顔を視らると辛さに、靈象府は身を縮めて穴にも入りたき想。

夫「而して他の二人は誰です。」

靈「それは申されませんが、聯隊の名譽にも關する事で、」

夫「知れた事ですとも。」

靈「どうも此儘に爲て置れんです。就ては我々三人の事は扱置き、貴族の名譽、又聯隊の名譽を思召して、何とか此事が内分に濟みますやう、貴方からお言を警視總監に………。」

夫「私から警視總監に？ 警視總監。」

と思ふ所有り氣に呟いたが、

夫「では私の言ふ事なら警視總監は聽くと思ひなのだね。」

靈象府は姉の顔を見て首肯した。

夫「然すると私から内々に頼むのは、三人の者を見免してくれと言ふのですか。」

靈「いや、然ではないのです。究竟貴方の御考で、箇様な事が世間に知れては、貴族の面目を汚すから、然る可く斟酌してくれ、と何處までも貴方が有仰る體でお話し下さるやうに願ひたいのですが。」

夫「はあ、解りました。」

と徐に頷いた公爵夫人は、貴族の面目を汚すの一言に尠からず心を動されたのである。

夫「而して其娘と云ふのは何者だね、町人ですか。」

靈「非職軍醫の娘だそうです。」

夫「那樣者の娘が奈何して又お前さんの目に着いたのです。餘程の別品でも在つたのかね。」

靈象府は頭を撫で、

靈「那樣事を有仰つては困るです。」

夫「困るなら始から馬鹿な事は爲んが可いのです。」

靈「つい大醉の餘り……、非常に後悔して居るのです。」

夫「知れた事です。而して隊長から何云ふ罰を受けるのか、知つてお在かい。」

靈「噂では爵位を褫奪されるとか申します。」

夫「高が町人の娘一人の爲に、三人の貴族が爵位を褫奪されるのかい、那樣無法な事が有りますものか！」

と公爵夫人は冷笑した。

夫「それぢや直に警視總監の所へ行きますから、他の二人の事も聞いて置なければ成ません。」

靈「其は困るです、如何なる事が有つても互に名は出さんと云ふ契約を爲たのですから。」

夫「其人達の名ぐらゐは私に判つて居なくては、先方へ行つて話が出來ないぢやありませんか。然し、お前さんが言はなくても、警視總監から言ふでせう。」

靈「總監も我々の名は知らんです。」

夫「それではお前さんの名も總監は知つては居ないのですか。」

靈「無論知る譯はありません。」

之を聞くと公爵夫人は長椅子の上に横仆になつて笑ひ立てた。

寒牡丹

夫「然すると、私が出掛けて行つてお前さんを告訴するやうなものね。」
 靈「謂はば那樣ものです。」

夫「まあ何に爲よ、私は是から行つて話して見ませうから、三時頃に又來て下さい。首尾好く行くやら、行かぬやら、判らないけれど、十中の八九は……。」

靈「何分宜く願ひます。」

夫「そんなら又後程、三時頃に。」

と夫人は軽く會釋して化粧の間へ入つた。靈象府も直に此を引取つて、契り置きし今日の三時の吉凶をば心の中に書きつゝ家路を辿つた。

程無く阿茅淳公爵夫人の馬車は警視廳の門前に見えた。警視總監線布將軍は人を退けて、おのれの事務室に夫人を請じて、

總「ようこそ御越下されました。」

と謹んで貴婦人の手に接吻する。

夫「突然で御座いますが、今日出ましたのは、貴方の御力を拜借いたしたい事が御座います。」

總「はい、何御用で御座りまするか、品物でも御紛失遊はしましたか。」

夫「いえ、然やうな事では御座いません、是非貴方御自身の御力を拜借いたさなければなりません事が御座いますので、十五分間ほど御話が願ひたいので御座いますが、」

總「私で御役に立ちまするならば、甚だ満足で御座ります。」

夫「それは早速難有う存じます。」

總「して、御用と仰せ遊ばすのは？」

夫人は微笑を含みて、

夫「何用だと御考へ遊ばします。」

總「どうも其は解りかねますで御座ります。」

夫「御了解になりますまいでせうか。」

總「解りかねます。」

寒牡丹

夫「實は、此頃噂の高い陸軍士官の勾引一件で御座いますね、」

總「はあ、成程。」

夫「那事に就いてはもう説が區々で、何が事實であるから少しも解らんで御座いますが、私の聞きました所では、皆話が妄らしく一つも信じられんで御座います。で、どうか貴方から直々に那の事件の顛末を伺ひたく存じますので御座いますか、」

と徐に説起す公爵夫人、其の唇の丹花に風有りて動くが如く、宛轉たる嬌喉は鳥の初音を弄するに異ならず。夙て此の妖艶の容を寤寐に忘れぬ縹布將軍の眼に、何かは耐るべき、今日を心して粧へる公爵夫人の美形、唯恍々惚々として彼有るを見れども、吾有るを覺えず、身は一場の香しき夢に掩れたる心地。

總「それは最易い事で、委細お話を致しますので御座りますか。」

夫「少しも遺漏無くお話し下さいませうか。」

總「報告書に記し在ります通申上げませう。」

夫「報告書? 何ならば其の報告書を拜見致したう御座いますか、」

總「公文書類は御覽に入れかねまする。」

高笑をしたる公爵夫人は手に持てる柄眼鏡にて總監の腕を軽く拵つて、

夫「其の報告書を讀んだと申す者は大勢居るでは御座いませんか。私にはお見せ下さいません譯が有るので御座いますか。」

總「いや、決して那樣事は、」

夫「無ければ些と内見をお許し下さいませ。」

總「其の事實さへ細密にお話を致しましたらばお宜いでは御座りませんか。それで御免を願ひまする。」

夫「細密にお話し下さいませなら、報告書をお見せ下さいませしても、同じ事では御座りませんか。報告書には其の顛末を悉く記してあるので御座います。然う致せば私が其を拜見致して居る間に、貴方は御多忙の處、彼方で御遠慮無く御用を遊ばして下さいませ。一舉兩得では御座りませんか。」

と打笑みながらテンプルを拵つて論詰める。縹布將軍は其理に服した譯でも何でもないが、唯偏に御意を損ねんことを懼れて、直に報告書を持て來たのである。すると夫人は總監の手を把つて室の外に連出す、連

寒牡丹

出された總監は難有く夫人の手を接吻して立去つた。彼と云ひ、此と云ひ、其の一舉一動、掌上に人形を弄するにも異ならぬ。夫人は獨り嫣然一笑して彼の報告書を手にしたが、旋て一遍讀了ると、

夫「最少し面白からうと想つたら、此の、まあ下らない事。是でも他見を禁ずる秘密書類だらうか、ふふふとこころ。」

其處に在る呼鈴を鳴せば、靜に靴の音がして、總監は入つて來た。

總「御覽になりましたか。」

夫「拜見致しました。」

總「如何で御座りますか。」

夫「充らんものでは御座りませんか。」

と言ひながら持つて居た報告書をテエブルの上に投出した。其處へ吹入る窓の風、三十枚ばかりの書類は驚の舞立つたるやうに室内に散亂する。慌て憚り總監は、此處に三枚、彼處に五枚、飛さじ、遣らじと大蹠いぬつくばひに這廻り、テエブルの下まで撈かきさがして、一心不亂に拾ひ聚むる不體裁。額の汗を拭つて漸く座に着けば、夫

人は頗る不興の體にて、

夫「這こんな麼な那話ななしが有るものでせうか？常談も大概が可いでは御座りませんか。」

總「はあ？何云ふ譯で御座りまするか。」

と縹布將軍は拾ひ聚めたる書類を一枚々々揃へて居た手を停めて、目を瞪みはつた。

夫「今日の世の中に這こんな麼な事ことが有るものですか、考へても知れた話では御座りませんか。」

總「然し……。」

夫「いゝえ。」

總「然し、此の報告書……。」

夫「いゝえ。」

總「被害者の告訴……。」

夫「いゝえ。」

總「告訴状と、それから其の管内の警察署に於て……。」

寒牡丹

夫「いゝえ、いゝえ。」

と夫人は一圖に頭を掉つた。

夫「其の犯罪者と目指れて居るのは誰かと思へば、貴族の花とも謂れる人達……。」

總「いや、其は未だ花とも葉とも判らるので御座りまする。」

夫「いえ、花では御座いませぬか、近衛の士官と申すからには、實に立派な花で御座いますよ。爵位有り、名譽有り、教育有る人達が何で那樣暴行を働かませう。設へば如何に酔つて居りましたからと謂つて、田舎育の兵卒ならば卒知らず、到底有るまじき事では御座いませぬか。」

と口までも誣ひられたやうに阿茅停公爵夫人は愛ぐと故と色を作す。

總「いや、其點は私も大きに考へたので御座りまする。仰せの如く有るまじき事、又信ずべからざる事で御座りまするけれども、如何にせん、被害者より告訴も致した事でありまするに因つて……。」

夫「でありますから、萬一にも其の嫌疑者として、苟くも貴族たる者が法廷に引出されるやうな事が有りましては、犯罪の眞偽は扱置き、貴族の體面を汚すことは非常なので御座いますよ。而も對手と云ふは、取る

にも足らん下等な女……。」

總「いや、然やうでは御座りまするが、其娘の事に就いては十分に取調を致しましたる處、家系は可なり正しいので御座りまする。」

夫「家系は奈何ありませうとも、高の知れた非職軍醫か何かの娘では御座いませぬか。其等風情が皇室の藩屏たる貴族に對して犯罪呼りを致すとは、實に沙汰の限であらうと私は考へます。是が不幸にも貴族の敗訴にでも成つて御覽遊ばせ、然う先假定致すので御座いますよ、其が例と成つて起りまする弊害は甚麼でございませうか。奴婢のやうな者までが見様見真似に主人を對手取つて、上を上とは思はんやうな風が行はれましたら、貴族の前途が想遣られます。」

警視總監は打笑つた。

總「そりや餘にお話が進み過ぎまする。」

夫「決して然で御座いませぬ。平生我々貴族社會とは格別御懇親の貴方が、其の貴族の名を嫌疑者の名簿にお記し遊ばすと云ふのは、餘り交誼の無いお話で、又其が社會の風紀に大いなる影響を及ぼすことも御考へ

寒牡丹

無いやうに存じますが、

總「段々御心配では御座りますが、目下取調中で嫌疑者の姓名さへ判らん始末で御座りますからして……。」

夫「其處で御座いますの。幸に嫌疑者の名さへ判らるので御座いますから、其内に貴方の御了簡で此の事件が物に成らんやうに何とか爲て戴きたいので御座います。」

總監は類に髭を拵つて、

總「成程。」

夫「如何で御座いませう。」

總「さあ……。」

夫「どうぞ御靈力を願ひます。」

總「さあ……私も職務上……甚だ……迷惑……致しまするで……。」

夫「では御承知下さいませぬので。」

總「どうも甚だ……實に私も職務上……。」

操布將軍も義理と職務と人情の重圍の中に陥つて、いづれ自害の絶體絶命。

夫「若し此の事件が世間に暴露致しますれば、取も直さず貴方の御手で暴露されたので御座いますから、我々貴族社會は擧つて貴方に反抗致します。」

公爵夫人は作聲を願せて、

夫「で、既に其の模様が有るので御座いますから、私は一方には同族の代表者として、それは表向で、一方には貴方の親友として、今日はお話に上つたので御座います。貴方が飽くまで職務にお盡し遊ばす御精神は私感服いたしました。けれども、其が爲に貴方は今後私共の交際社會へ出入あそばす事は御断り致さなければ成りません。私とても不本意ながら今日限御交際を絶ちますで御座います。」

此の一言は警視總監の肝膽を破る鐵鎚の大打撃であつた。

總「貴方も絶交あそばすと有仰るのです?!

夫「無論の事で御座います。嫌疑者は近衛士官と申しますからには貴族の花で御座います。其花を散すやう

寒牡丹

寒牡丹

な事が有りましては、貴族は薪も同じ枯木と成つて了ふので御座いますから、私も貴族の一人として其の名譽を保護致さなければ成しません。其が又私の職務で御座います。」

總監は堅く拱いたる腕を崩るゝ如く釋いて、

總「然やうなれば、被害者の其の娘の名譽は何と遊ばしめまする御考で。」

總監の顔を尻目に挂けたる公爵夫人、

「那樣娘の名譽も何も有るもので御座いませうか！ 金さへ興れて遣つたら、其を持參に奈何など形付くのです。欲いほど金を取せて遣ります。」

總「して、其の金の出所は？」

夫「義損金を募るので御座います、貴族から。其は私が十分周旋致します。其の率先の義捐者は誰であると御考へ遊ばします。」

又總監は考へさせらるゝのであつた。

總「何方で御座いませうか。」

夫「御考へが付きませんかね。」

總「奈何も解りかねるで御座います。」

夫「では申しませうか。」

總「どうぞ。」

夫「其人は此に居るので御座います。」

總「はらあ、公爵夫人で御座りますか。」

夫「いええ。」

總「はらあ？」

夫「最一人の御方で。」

總「はらあ？」

夫「此には貴方と私と二人よりは居りません。」

總「はらあ。」

寒牡丹

夫「其の二人の内私で御座いませんければ……。」

總「私で？」

夫「貴方で！」

總「私が一番に義捐を致すので？」

夫「然やうで。」

總「はあ。」

と言つた限總監は二の句が出ない。夫人は威儀を正して、

夫「社會の秩序を監督遊ばします警視總監として、又御交際ある貴族の名譽を保護する親友として、お手許から百ルウプル(百二十圓弱)お出し遊ばしまして。」

惚れた弱身の是非無さは、

總「外ならぬ貴方の御言で御座りまするから、何程なりとも差出します。然し、どうぞ悪名に願ひまする。」
夫「御無理を御聞濟下さいまして、此様な嬉しい事は御座いません、いづれ此の御禮は、」

と意有り氣に總監を見遣つて、公爵夫人は暇を告げた。然しも警察部内の一大問題たる「紅茶屋事件」の取調は此日の内に俄然中止されたのである。

(五)

話次分頭被害者なる蕾又と父とは衷寂しくも裏に籠り居る今日此頃、食堂の窓には懸聯ねたる籠の禽歌ひ、テエプルには種々の鉢の花咲けど、在りても戀しかりし人の亡き迹とて、差向ふ親子兩箇の顔見合せては、徒に思の種となるばかり。可憐き形見とて仍其處に大椅子を据ゑ、正面の壁には老夫人の肖像を掛けて、娘の誓、母の仇と束の間も忘るゝ事無く、唯悲と恨とに日を送るのであつた。

扱中食を了れば、親子は手を携へて例の如く散歩に出る。今日は譬に廻合ふか、明日は肖たる面影を見るか、と蕾又は行交ふ人に目を着けて、群集の中を徘徊するのであつたが、逢ふほどの士官に其ぞと思はるゝのも無い。特に裏中であるから黒の面紗を被けて居るので、見る目が朦朧として、人を物色するに誠に不便を感じる。一順散歩して來ると随分疲勞するのであるが、蕾又は寧ろ之を樂む如く、父親が還ると言ふまでは決して還るを思はぬので、此日は常より人出が有つた所から、散歩時間も長く定刻を過して、

歸宅したのは點燈頃、はや「紅茶屋」へ急ぐと覺しきトロイカが三四臺も門前を通る。其を見た當又は一層窓に洗んで内に入つても物をも言はず、窓帷を挑げて悄然と往來を眺めて居る。

折しも門口の呼鈴が鳴るので、庵人が出て行つた。當又は窓を離れて、

當「父様、希しいぢやありませんか、誰か来たのですよ。」

父「然じや、のう、此の一週間は誰も訪ねて来んに、誰ぢやらうか、知らんで。」

と老人は席を起つて居間の口に待つて居れば、庵人が急脚に復つて来て、

庵「お嬢様に些とお目に掛りたいと有仰つて、御婦人の御客で御座います。」

當「お名前は何？」

庵「有仰いけません。唯些とで宜いから、是非お目に掛りたいと有仰るのです。」

父「誰ぢやらう。」

當「誰ですか、生面の人でせう。それぢや此方へお通し申しておくれ。」

と急に蠟燭を點け足して座敷を明くし、取散した物を片付け、椅子を正して待つて居る處へ、直と入つて來

たのは、黒の衣服に質素なる肩掛を絡ひ、飾の無い帽子を冠つた五十前後の婦人。

當「どうぞ之へお掛け下さいまし。」

と言ふのに會釋して客は雅に座に着き、小き手提を膝の上に置いて、極洗んだ調子、

客「お初にお目に掛りますが、私は或貴婦人方の名代で出ましたので御座いますが、其の夫人方は貴方の御身の上に就いて格別同情を寄せられて御座います。」

當又は切に傍なる父の顔を見た。幌尾老人は屹として、如何にも容を正して居る。

客「伺ひますれば、此度御母様が御逝去あそばしましたさうで、何とも申上げやうも無い段々の御不幸で、

其の貴婦人方にもお可憐う思召さるゝ餘、お見舞申して來るやうに、と私へのお頼で、それゆゑ今夜出ましたので御座います。」

幌尾老人は聲嚴に、

父「誰方様からの御頼で有りまするか。」

客「セントピイマスアルケの有名なる貴婦人方が組織されました慈善事業の團體を代表致しまして、」

寒牡丹

一國者の幌尾老人之を聞くと佛然として、

老「手前どもは決して他様の慈悲に與るやうな者では御座りません。」

客「其は些と御言が違ひは致しませんか。慈善事業と申すと、強ち金錢を恵むばかりでは御座りません、精神上の慰藉なども随分其の主なる者で御座います。私の總代として上りましたのも究竟其なので御座います。噫では其筋へ告訴あそばしたとやら、事實で御座いますか。」

老「如何にも事實で御座りまする。」

客「事實で？ 然やう致しますと、對手は國民の上流たる貴族、それを告訴なさいますに就いては、十分御熟考あそばしましたので御座いますか。」

客「又は之に答へんと爲ると、父が目授をしたので、黙つて了つた。」

客「此事は何に致せ、貴族全體の體面に關るので御座いますから、上流社會は一同令嬢を敵にして居らるゝので御座います。」

老「貴方のわざ／＼御出下されましたのは、手前どもの利益になる事と信じて居ります事で御座りまするか。」

客「無論然やうで御座いますとも。」

老「貴族社會は一統手前どもを敵にして居らるゝと云ふに、何故貴婦人方は同情を表して下さるので御座りませう。」

客「其で御座います。其に就きまして内々御意見が伺ひたく、今夜出ましたので御座います。」

客「若し御訴へあそばす時分に私が御懇意で御座いましたら……。」

老「然も口惜しうに言半して二人の顔を見たのである。」

老「それは何爲で御座りまするか。」

客「私が御懇意でありましたら、這様に事を大く爲すに濟みましたので御座いますもの。第一告訴などを遊ばすには及ばないので御座います。」

幌尾老人は覺へず苦笑した。

客「恚云ふ評判が世間へ弘るのは、令嬢の爲にも決して喜ぶべき事ではないので御座います、然やうで御座

寒牡丹

いませう。

で、又其の犯罪者が捕はれて處刑されました所で、極僅少の損害賠償か何かで事済に成つて了つて、令嬢の方には何の利益も無いので御座います。然やうでは御座いませんか。」

此言は親子の者に尠からざる悪感情を與へたのである。なれども二人は猶黙して客の言ふ所を聞かんとした。

客「お見受申しますれば、失禮ながら御財産も多からんやうに考へられますが……………」

老「御覽の如く、一向何も持ちません。」

客「然やうなれば猶更の事、令嬢の行末も御考へ遊ばさなければ成りません。箇様な噂が立ちましては、第一御縁邊の邪魔に成ります事は一様では御座いません。して見ますれば……………」

と客は今百尺竿頭に一步を進めんとする時、幌尾老人は肩を聳かして、

老「いや、是は夫を有ちまする儀は断念致し居ります。」

客「あゝ、然やうなれば是非御聽に入りたいお話が有るので御座います。唯今申上げました貴婦人方も其邊を

御考へ遊ばしまして、此儘都に御永住遊ばすよりは田舎へ御引移に成つた方が、却つて御宜からうから、然う申上げるやうに、と諄々も有仰つて御座いました。」

老「御深切は雖有う存じまするが、手前どもは別荘を持つて居るではなし……………」

客「いゝえ、それは唯今丁度ラールガ河の傍に好い家が賣物に出で居りますので、御存の通那處は閑靜で、而して誠に眺望が宜いので御座います。那の邊へ御移になりましたは如何で御座います、御望で御座いますれば貴婦人方が御周旋申上げたいと仰有るので御座います。」

老「いや、なか／＼以つて然やうな力は御座りません。」

客は手を抗げて其言を遮り、

客「それは貴婦人方から御見舞として貴下方へ差上げますので御座います。」

幌尾老人は有緊意外の言に驚いて、何と答へたものであらうと、言はず語らず娘の顔を視た。端然と手を拱いた娘の顔又はじろりと父の顔を見たばかりで、何とも言はぬ。さては不承さうなど見て取つた客の婦人は嘖らす疊みかけて、

客「若又田舎へ行つしやるが御否ならば、依よ頼より此に御在あそばして、而して差支無いやうに御取計申しても宜いので御座いますか、」

暫く考へた父親は再び雷又に向つて、

老「お前奈何か。」

雷又は敢て口を開かぬ。

客「御老人様の御考は如何で御座いますか。」

老「さあ、手前は親の情として一人の娘の事で有りますから、是の爲行末善かれと願ふで御座ります。」

客「御尤で御座います。貴婦人方に於れましても、そりや御本人の事は申すには及びません、貴方と云ふ御歳を召した親御様の御心中を十分御察し遊ばして被ま在らるので御座います。で、どうぞ其の御志をお受け遊ばして下さいます。」

老「は、」

客は膝に置いたる手提の中から幾個ともなく取出す紙幣の把たを、テーブルの真中に積重ねた。

客「一萬五千ルウブル（一萬七千圓弱）御座います。失禮ながら御二人の、御活計の料として、貴婦人方から差上げます御見舞で、どうぞ御受取下さいませうに。」

目前に堆うまたき一萬五千ルウブル！ 是程有れば親子二人が安樂は更なり、好き夫をも求めらるゝのであるから、父親の心は大に鈍つたのである。

老「雷又、奈何か。」

今は雷又も口を閉ぢては居られぬ。

雷「一萬五千ルウブルの御金？」

老「然さじや、一萬五千ルウブル！」

雷「お父様 其の一萬五千ルウブルは誰が何の爲に下さるので御座います。」

老「慈善會の貴婦人方からして、」

客「御二人の御災難に格別の同情を表せられました、」

雷又は客の顔を熟じとっと見て居たが、

蓄「貴族は私の響、響の同情を受ける覺は御座いません。」
 眞として言放つた彼の聲は甚しく震へて居た。

蓄「お父様、百萬ルウブルでも私は那の恨は賣りません！」

蓄又は汚はしと謂はんやうに衝と席を起つた。此の一言に勵されたる父親、

老「折角では有りまするが、娘が那申まするから、是は御持返り下さるやうに。」

客「然やう有仰らずに御受け遊ばしたら如何で御座います。」

是が千ルウブルとか二千ルウブルとか申のなら知らん事、一萬五千ルウブルと云ふ額では御座いませんか。」

老「いや、どうぞ御持返りを。」

客「貴婦人方にも殊に御心を籠められて、筒様に總代まで立ててお見舞を遣はされたので御座いますから……」

老「いや、然し、左に右是は御持返りを。」

客「然やう遊ばしては、却つて貴下方の御爲に成りませんで御座いますよ。」

老「いや、左に右御持返りを。」

客「貴方も一旦受けると有仰つたものを、今更然やうな事では私も迷惑致しますから、

と猶様々に言を盡す。断れば断るほど無理推付に推付けるので、氣早の老人赫となりて、

老「ええ、冗い！ 勿々とお歸りなさい。」

客「では筒様に申上げましても……」

老「冗い！」と言ひながら椅子を起つた老人は客の顔を屹と睨め着けた。

客「然やうなら是非も御座いません。然し、後悔あそばしますな。」

老「早うお歸りなさい！」

客「早く歸りたくても、此の金を仕舞はなければ歸られんでは御座いませんか。」

と手提の口を擴げて、彼の積上げし紙幣を形付け始めた。

傍に立つて居る老人は足踏をして、

老「早う爲さい。」

客「五十や百の金ではありませんから、然う早くは参りません。」
老「何じや、失敬な！」

と言ひながら老人は矢庭に其の紙幣の一把を取つて、客の胸頭に撲着けたので、辯舌達者の婦人も之には懼を作して忽ち引抱へた一萬五千ルウブルの手提、後をも見ずして廊下へ出たが、又倉皇と引返して來るので、老人は大喝した。

老「何じや、又入つて來たな。」

客「肩掛を忘れたのです。」

老「那樣物早う持て行け！」

と今にも掴み懸らん險脉に、怖氣を震つた客の婦人は、其處に置いたる肩掛を取るより早く這々の體で歸り去つた。

「雷又、雷又。」と父の呼ぶ聲に娘は應接間に入つて來たが、彼の一萬五千ルウブルの使の爲に痛く激したる心の色は面に顯れて、恨を含める目元より溢ると涙は漣々として蒼白き頬に濕るのである。

老「雷又や、お前の名譽は金では買れん、能う解つた。必ず雷を復つて遣る、安心せい、のう、安心せい。」
衝と寄つて父の手に縋り着いた雷又は、一聲揚げて泣くと見れば、忽ち咥と悶絶して仆れた。

(六)

吳城中尉は陰に一萬五千ルウブルの額を以て其罪を償はんと爲たのであるが、使の婦人は逐返されて、事は成らずして止んだ。然れども、阿茅淳公爵婦人對警視總監の策は見事に成効して、其後警視廳の刑事掛は全く此の事件を放擲して了つて、一時は火山の破裂せんする勢を作して四方に噂されし大問題も、今は殆ど世間の記憶に存せざる有様と成つた。

帆尾親子は神も正理も無き世か、と一旦は落膽したものの、上には聰明なる皇帝陛下の在すあり、到頭死を以てしても聖斷を仰ぎ奉らんと思定めて、雷の手懸を得んには、なか／＼恚る時こそ好けれど、彼等は益す搜索に油斷無かつた。とは謂ふものゝ、一私人の手を以て此の犯罪者を狩出さんは、彼等に棹して大海を横截らんと爲るに等しき者、親子は終に其力の及ばざるを悟つたので、此上は何日までか遅々として、徒に無念の月日を過すべき、唯頼み奉る皇帝陛下の慈仁なる大御心に訴へん、と切に九重の空を仰いだが、

悲い哉、一個の私民たる者が関に伏して直訴する事は法の禁する所である。若し聖聞に達し得べき道を求むるならば、然るべき手續を経るの外は無い、が、其も公に計ふことは克はぬから、誰にてもあれ、陛下に咫尺し奉る御方を頼みて、密に叡慮を驚し奉らんと、乃ち宮中に出入する貴人の名簿を繰抜けて、適當の人物を擇んだのである。

親子の俱に指したのは當時皇后陛下の最も優渥なる殊遇を蒙りて、而も其の人爲るや世間を擧げて一視同仁の慈愛深き吳城伯爵夫人であつた。因で老人は直に意を決して、貴賤老若の常に聚れる夫人の門を指して急いだ。恰かも好し、彼の着する時、夫人は是れより朋友を訪はんとて馬車を門外に牽出したので。窓の内より何心無く見ると、帽も冠らざる白髪の老人が物言ひた氣に佇んで居るから、直に車を駐めて聲を掛けた。

夫「貴方、何ぞ御用が有るのですか。」

老「はい。」と老人は忙しく進み寄つたが、遽に心着いたやうに屹と一揖して、

老「手前は先頃彼の「紅茶屋」に於まして、御聞及も御座りませうが、災難に遭ひましたる娘の父で御座りま

て。」

夫「あゝ、然やうですか。其後さつぱり那話を聞きませんやうですが、何ぞ那事に就いては御用が有るの

で御座いますか。」

老「はい。彼の事件に就きましては、手前どもは法律の保護を受くる事が出来ませぬので御座ります。」

と夫人は始て驚いた。

老「然やうで御座ります。其故伯爵夫人に嘆願の筋が御座りまして、實は今日罷出ましたので御座ります

が。」

夫人は先より彼の風采容貌等に注目して居たのであるが、

此時心物に傾いて、

夫「然やうですか、それでは伺ひませう。」

と言置いて取者を呼び、

寒牡丹

夫「出掛けるのは見合せるから、馬を取外して宜い。貴方、それでは此方へ入しつて下さい。」
 快く邀へられたる老人の喜は何に況へんやうもあらず、彼は其の應接室に温厚玉の如き夫人と相對して、事の顛末を語ることに一時間餘、夫人は聞く毎に驚くより外は無かつた。

夫「一萬五千ルウブル！ まあ、那樣事が御座いましたか。而してお娘御は何と有仰つてました。」

老「百萬ルウブルでも此恨ばかりは賣らんと申して、取迫めて氣絶致しましたやうな始末で御座りまする。」

夫「はあ、御尤で御座います。それで、お娘御は蕾又さんと有仰ひましたね、蕾又さんは然ぞお美しいので御座いませうね。」

老「親の口から申上げまするも如何で御座りまするが、決して醜い方ではないので御座りまして。」

夫人は少く打案じて、

夫「では、誰かに思を懸けられたと云ふやうな事實は是迄に御座りませんかでしたか。」

老「然やうな事は断じて御座りませぬ。母の手元でのみ育ちましたので、それは男の影も踏みました事は無いで御座りまする。」

寒牡丹

夫「段々伺ひますれば實に重大な事件で、猶篤とお話を致さなければなりません。どうぞ又明日御出を願ひます、其節は是非蕾又さんも御同道下さいまし。」

老「雖有う存じまする。然やうなれば猶又御面會を願ひまするで。」

老人は椅子を起つたが、又小腰を屈めて、

老「え、些と御含置を願ひまするのは、今日手前が箇様な儀を嘆願に罷出ました事は、極々秘密に、何方へも御話の御座りませんやうに、」

夫「それは何云ふ譯で。」

老「御承知の如く、此の事件は上流社會の人達を敵に致しまするので、既に警視廳が突然探偵を中止して、犯人の罪跡を蔽はんと致す有様で御座りまするのも、全く貴族の権力の爲す業で。然やうな次第で御座りまするから、若し手前が飽くまで復讐を企つると云ふ事が知れましたらば、今度は金銭で奈何致す事も出来んの有りまするゆゑ、必ず娘か、手前か、或は又親子共に命を取れまするやうな事が無いとは限らんと考へられまする。」

寒 牡 丹

伯爵夫人は聞くに可憐おそろしと謂はんやうに眉を動した。

老「尤も然やうな事は手前の取越苦勞でも御座りませうけれど、何に致せ、段々不幸に不幸を累かさねまして、自然心の弱りから様々の事が氣懸に成りまする所から、老人の愚痴まで御耳に入れまして、何とも恥入つた儀で御座りまする。」

夫「いえ、御無理も無い事で御座います。それでは、今後私へ御出の節には貴方の御名は有仰らんが宜うございます。又明日お二人で入しつても、直に此方へお通し申すやうに好く申付けて置きますから。」

是で蜷尾老人は感謝して立歸る。迹あとに伯爵夫人は暫く居殘つて、或は輕卒に老人の言を信じ過ぎは爲なんだかと云ふ事を考へたのである。けれども、事實は事實で、人も知たる紅茶屋事件、吾手にて密に其の真相を搜り見んと、直様馬車を命じて、一二の朋友を尋ねたが、格別得る所も無い。其の弟が近衛士官なる事を思出したので、試に阿茅淳公爵夫人の邸を訪うた。

先衣服の流行から慈善會、舞踏會などの雑話を試みて、さて善しと思ふ頃吳城伯爵夫人は太息して、

吳「どうも露西亞の警察は未だ一向不完全な者で、實に信用が出来ませんでは御座いませんか。那の先達さきだつて而の

「紅茶屋事件」などはもう一月餘にも成りますのに、何の沙汰も無いとは、奈何いたしたと申すので御座りませう。」

と探さぐりを入れたる言の端々、公爵夫人は唯頷くのみであつた。

吳「警視總監の繰布くりぬのさんち様も那の事件では然ぞかし御骨折で御座いませうが、今だに何の手掛も無いとは、些と警察の不面目では御座いませんかね。」

阿「然やうで御座いますとも、三人の内せめて一人ぐらゐは上げられさうな者で御座いますのに、何云ふもので御座いませうかねえ。」

是が現在加害者の一人たる靈象府中尉れいざうちゆうじゆうを弟と爲る阿茅淳公爵夫人の言である。

吳「然し、噂に據りますると、警視總監は何故か急に探偵たんていを弛めたとか申すでは御座いませんか。」

阿「那樣事は決して御座いますまい、非常に御心配のやうにお見受申しましたよ。」

吳「然やうなれば心強う御座いますが、那の事件に就いては、何で御座いますか、面白からぬ噂が立つて居りますから。」

寒 牡 丹

阿「何方で那樣噂をお聞き遊びしました。」

吳「東宮御殿で然云ふ話を爲て御在のお方が御座いました。」

阿「本に那の事件と申すと、一時は到處評判で御座いましたが、私には如何にも事實とは考へられぬので御座いますよ。何か是には女の方に譯が有つて騒立てた仕事ではあるまいかと思ひますので。」

吳「いゝに、然やうでも御座いますまい、私は事實であらうと寧ろ考へます。」

阿「私は飽まで信じませんのです。瘦せても枯れても貴族では御座いませんか、而も近衛の士官とも有るべき者が、如何に何でも那云ふ罪を犯さう道理が無いでは御座いませんか。是は屹度貴族攻撃の狂言に使はれた人形に相違有るまい、と私は考へます。其故に警視總監も迂濶と手を下し得ぬので御座いませうよ。」

吳「繰布將軍から然やうなお話が有りましたので御座いますか。」

阿「いゝえ、それは唯私の考量で。」

吳「で、警視總監は何云ふお見込なので御座います。」

阿「總監の見込などは私存じません。」

吳「御存じ無い筈は御座いますまい。」

阿「何爲で御座います。」

吳「大相懸意で御在遊しますから、無論悉いお話が御座いましたらうと存じたので御座います。」

阿「いゝえ、一向。」

此に談を收めて吳城伯爵夫人は辭し去つたのであるが、公爵夫人は此人を甚だ無氣味に思つた。

(七)

約の如く其の翌日幌尾老人は娘蕾又を伴ひて再び吳城伯爵夫人を訪問したのであるが、老人の一舉一動は昨日に増したる心の不穩を顯した、と謂ふのは、此の會見に於て親子の運命は善惡定るので、見放さるるか、助けらるるか、浮沈の關する大事の一時と念ふのである。之に反して蕾又は神色自若として、況へば深淵の澄めるが如く、又自ら犯すべからざる威嚴も見ゆるのであつた。父が目にも著く感ぜらるるものは、彼が遭難の前までは、生得沈着の質ではあるが、有繋に子めかしい仇無い處の有つたのが、今日では俄然と様子が変わつて了つて、宛然花無き梢の霜を帯びたる風情、美しと雖も色無く、色無しと雖も清く、吾子ながら

寒牡丹

らも其の氣品の高さに驚かざるべかり。さうは今應接間に出来る伯爵夫人も一見して此娘の爲人を會得したのである。

夫「嬢さん、まあ其へお掛けなさいませ。」

と椅子を指して、旋て主客の座の定つて後、

夫「貴方はお幾歳にお成です。」

蕾「十九歳に成りまする。」

夫「誰方から御教育を御受けなさいました。」

蕾「主に母親からで御座います。」

夫「而して何處ぞ學校へお入學でしたか。」

蕾「いえ、先生には宅に來て戴きまして、學問以外の事は皆母が教へてくれましたので御座います。」

夫「あゝ、然やうですか。外國語はお話しなさいませうか。」

蕾「佛蘭西語に獨逸語は奈何やら話せませう御座います。」

夫「音楽は如何です。」

蕾「はい、音楽だけは左に右人に教へます位練習致しましたので。」

夫「今でも續いて御勉強なすつて御在でませうか。」

蕾「はい、始終心掛けて居ります御座います。」

會談の冒頭は此に訖つて、伯爵夫人は本文に入るの口を開いた。

夫「昨日はお父様の御出で、お話は残らず伺ひましたが、那の事件の處置に就て貴方の御望は何云ふので御座いますか。」

蕾「裁判を受けたいと存じます。」

夫「無論然やうでは御座いませうが、裁判と云つても、何云ふ意味の？」

蕾「兇行者を討しまするやうに。」

と蕾又は靜に答へた。

夫「然やうなれば、外に何も貴方の身に就ての御望は無いので御座いますか。何か御考が御座いませう。」

寒牡丹

蕾「損害賠償と申すやうな事で御座いますか。」
夫「然やう。」

蕾「然云ふ事は一向御座いません。」

此答を聞く時、伯爵夫人は蕾又の顔を睨めて、殊に耳を傾けたのである。然るに、一身に就ては何等の要求も無いとは、若や己の聞遠ではあるまいかと疑ふまでに考へた。

夫「それでは、損害賠償のやうなものは欲くないと有仰るので御座いますね。」
蕾「はい。」

夫「失禮ながらお父様から段々お話を伺ひまして、御家内の事情も略承知いたして居るのですが、近頃では音楽の御弟子も断つて御了ひなすつたと云ふお話、して見れば自今御生計向に差支が出来は致しませんか。」

蕾「いよく裁判でも決しましたらば、私共は此の彼得堡を立退さまする考量で、皇帝陛下に於いても私共の姓名を變へまする勅許は下し置るゝであらうと信じますゆゑ、然して田舎へ引籠りましたらば、其日

を暮すだけの道は奈何にか付くで御座いませうと考へます。」

夫「では田舎へ往しつて、何方へか奉公でも作らうと云ふ御積ですが。」

蕾「いえ。私のやうな汚れた體を以ちましては、なか／＼良家などに奉公が出来るものでは御座いません。奈何にか致して、父の傍に居つて世話が致したいと存じます。實は少々でも父に恩給が下りますので御座いますから。」

老人は始終固唾を嚙んで耳を傾けて居たが、吾も及ばぬ天晴なる娘の口上に頗る満足の體。伯爵夫人も心陰に感服した。

夫「然し、嬢さん、貴方は從來生活の事に就て苦勞などは全で作らんでしたらう、又、御縁組をなさると云つても御自由であつたので御座いますよ。けれども、今日となつては其も是も御心任には参りません。其中にお立ちなさる困難と云ふものは、自今一日毎に増して行くばかり、目に見えて居ります。然やうですから、私は御忠告を致します、其の損害に對する賠償をお受けなさるが宜いでは御座いませんか。」
蕾「私は何處までも然やうな物は望みません。既に先頃も断然辭りましたので御座います。」

寒牡丹

と較やし、有繋に蓄又は激したのである。

夫「些ちとお待ち下さい、秘密に受取る金と損害賠償とは別で御座いますよ。」

蓄「いづれに致しましても、金銭などは欲ほくは御座いませんので。唯私の名譽を傷け、私の將來を害した者を罰して下さいますれば、それで十分なので御座います。」

蓄又の面上おもてに動すべからざる決心を讀みたる伯爵夫人は、

夫「其の様にまで有仰おつしやる事ならば、何とか盡力いたしませうで御座います。之を聞いたる老人の歡喜は、滴はろく、涙の流るゝを拭ぬひも敢あへず椅子を起ち、伯爵夫人の手を把とつて接吻せつぶんした。

夫「嬢さん、貴方は御承知でもありませんが、法廷では恚いか云ふ犯罪の罰と云ふに至つて軽いもので御座います。然し、私が此事を上奏いたしましたして、勅裁を仰おんがぎます段に成りますと、此罰は尋常ひんじょうならん嚴重の者に成ります、で陛下の御聖斷に對しては何人も味あじを容れる事は出来ません。犯罪者は勳位を褫奪ちたつされ、財産を沒收めつしゆされますかも知れません。其邊は御承知で御座いませうね。」

蓄又は面色忽たちち蒼あざ蒼あざ、四肢皆震ふるふまでに怒つて、轟然すうぜんと座を起つた。

蓄「勳位の褫奪ちたつ、財産の沒收は、私の身に享うけました不幸より不幸なので御座いませうか！ 私の家は貧いのでは御座いますが、親子三人が睦むつましく、互た互たに便たに致し合つて、平和の生活を樂しんで居りましたので御座います。其處へ計らずも彼の災難に遭あひました爲めに、私の一家は甚い甚いに成つたと思召すので御座いませう。」

蓄又は此に到つて涙を潁あべた。

「私は無禮を受け、名譽を傷けられました上に、再び得られませぬ女子たるの徳をも失つて了つたので御座います。其が爲世間へ顔向かほむけも出来ませず、音樂の弟子も謝ことわりまするやうな始末で、忽ち活計に差支を生じまして、年寄つた親にも憂目うれめを見せしますので御座います。で又私の身に致しますと、實に生効いきがひも御座いせんので、結婚いたします事は出来ず、人の母たる事は出来ず、父の御座いせん後には、便も無い孤身ひとりみで此世を送らなければなりません。特に無念なのは、亡なりました母の事で御座います。病身の母は私の災難に遭あひました事を聞ききますと、其を苦に致して、卒にはかに歿はつしました。是れは取も直たださず彼の人達ひとが殺したの

で御座います。筒様な次第で御座いまして、那の遭難の結果と申すものは、私一身の不幸に止らずして、母を殺し、父を苦め、而して私の家庭を滅したので御座います。此の様に罪惡を逞くした者に對して、伯爵夫人には仍慈悲の御心をお持ち遊ばすので御座いますか。若し私共親子の者に十分の御同情がお有りあそばしません事ならば、私共は強て貴婦人を勞しませぬことを望みませんので御座います。」

と言訖つたる蕾又は仍伯爵夫人の前に立つて身轉も爲ぬのであつたが、目は血走り、唇は顫へて、顔の色は大理石の月を帯びたるやうに凄く満蒼んで、亂れた呼吸が忙しく聞える。夫人は感動して、物をも言はず蕾又の手を把つて引寄せ、其の玉の如き左の頰に接吻した。

夫「能く解りました。何人でも唯今のお話を伺ひまじらば、貴方をお助け申さん者は御座いますまい。私は屹度御力に成りまして、陛下の御聖斷を仰ぎませう。」

親子の者は齊く起つて容を正して、伯爵夫人の前に敬禮を行つた。

夫「私の及ぶ事ならば何なりとも致しますから、御用が有らば遠慮なく有仰つて下さい、御金の御入用が御座いませう、何ほどでも御用達申しますから、」

老人は恭しく之に答へた。

老「何から何まで御懇切に仰せ下さりまして、御禮の申上げやうも御座いけません。手前共は毫釐ながら自分の所持致し居ります分で、何なり恚なり凌いで参られます御座りまするゆゑ、其の御心だけを難有く頂戴いたしまする。」

程無く親子は暇を告げて退出せんと爲る時、夫人は遽に彼等を呼留めた。

老「何を御用で。」

夫「嬢さんは其の士官達の顔に御見覺がお有なさいますか。」

蕾「確に見覺えて居りまする。」

老「實は、其故、毎日同道しまして探索に出まするので御座りますが、未だ一向手掛を得ませんので。」

夫「然やうならば猶一層御穿鑿なさるのが肝要で御座います。又いづれ近日お目に掛りましてお話を致しませう。」

と夫人は起つて内へ、親子は別れて外へ、と各應接間を出たのである。

寒牡丹

彼等の支那を出て、石段を降りんと爲る時、鼻の前に一臺の雪車が今駐つた所で、其から下立つた紳士は毛皮の外套の襟を立て、帽子を目深に冠りたれば、面部は幾と褻れて居るのであるが、是も來訪者と見えて、石段を昇らんとしつゝ、親子の者に屹と目を着けた。愕然と見たる菅又は忽ち足を駐めて、頭を回したが、其時遅く、紳士の後姿は既に團の前に在つた。

老「こりや菅又、何を見て居るのじや。」

菅「お父様、那の男は三人の中の一人で御座いますよ。」

老「何ぢやと！」

菅「顔を褻んで居ましたから、能くは見えませんでしたけれど、確に其の一人です。」

老「然うか、成程、士官ぢやつたな。待て、一つ檢べて來う。」

と門番所に到りて其の姓名を訊ねれば、

番「唯今お在の御方かな、他は先殿様の甥子様の吳城中尉殿であります。」

急ぎ立復つたる老人は、

老「菅又、今のは、伯爵夫人の甥子様ぢやさうじや。お前、人違ではあるまいのう。」

菅「決して違ひありません。」

と後少時打案じて居たが、

菅「違ひは有りませんけれど、今此で事を暴立てるのは却つて可う御座いせんから、今日は抛つて置させう。もう恚う知れましたからは、何時でも那の人は、」

老「おら、蟻の鼠じや！」

相見て竊に笑つた親子は手を携へて伯爵家の門を出た。

之に反して謂知らず胸を轟かしたる吳城中尉、彼は吾が敵の伯母の家に出入せんとは餘に思設けざるのであつた。

「こりや危いぞ。」と念ひながら、伯母の居間に通ると直に其事を訊ねた。

吳「唯今當家から出て行きました、裏服を着けた二人の者は、他は何者ですか。」

夫「他はね、大相可憫な身の上の者で、私が拯つて遣りませうと思つて居るのです。」

伯爵夫人は此の甥が彼の加害者と軍籍を同うせる近衛聯隊附なれば、語るも可けれど、事の洩るゝは好ましからずと思ふから、如何なる身の上とも打明けぬ。中尉も亦其を推して訊ぬる勇は無かつたのである。

縦し問はずとも知れたる三人が身の大事、此の訴狀が伯母の手に握られては、是非分明、彼の直、我の曲、鏡に影の映るが如し。晏然として居るべき所にあらず、と好き程に此を辭して、直に靈象府の邸を訪うて此の次第を話したのである。

靈「然し、其娘は那の者に相違無いか。」

吳「相違無い。」

靈「断じて相違無いか。」

吳「断じて相違無い。」

靈「それぢや證據が有るか。断じて相違無いと見極めた所の證據は無いのぢやらう。或は疑心暗鬼かも知れんぞ。」

吳城中尉は殿に頭を掉つて、

吳「證據の有無を僕に問ふ事は無い。君等よりは多く彼に就て識らなけりやならん筈の僕だ。罪を犯した本人の僕が見たのではないか。」

靈「そりや大いに然うじや。實は僕は酔うても居たし、彼が始終顔を背くやうにして居つたから、能う覺えんのぢや。迎も戸外で會うたぐらゐでは何が然うじやか判りはせん。一體甚麼女かね、少は好い女か。」

吳城中尉は苦り切つて、

吳「那樣事は僕は知らん。」

靈「知らんと云うて、貴様今迄に逢うたのではないか、晝間見た所は奈何かと言ふじや。」

吳「何も恚も那樣事を檢べて居る暇が有るものか。僕は彼に一目見られて時には、唯慄然として了つて何も覺えんかつた。彼は確に僕の顔を識つて居るのだ。」

靈「そりや又識らんでか。」

吳「而して其の夜の僕と云ふ事を彼は當時認めたらしいのだ。靈象府、もうお互に覺悟せんけりやならんぞ。」

寒牡丹

靈象府は顔に髭を拵つて居たが、竟に溜息を呷くより外は無かつた。

吳「縦し、然うでなくても、伯母が彼等を保護する事になつたら、もう休矣だぞ。必ず近い内に發覺する。で、恚して居れば、徒に刑の宣告を待つやうなものだから、左に右此を違かつて、何處かへ旅行しやうではないか。而して其の旅行中に何とぞか………。」

靈「可かんさ！ 五月の大演習の前に那樣事が出来るものかい、隊長が許可を與へるものか。」

吳「うむ、五月の大演習か。」

と之には當惑した吳城中尉、續く二の句も無いのである。

靈「まあ、然う鬱いで居つた所が爲方無い。今夜姉の屋敷に茶話會が有る。警視總監も來るぢやらうから、是から行つて見やう、而して様子を探るのは奈何じや。」

吳「其も可からう。可からうけれど、もう事が恚なつては、警視總監の力には及ばんぞ。阿芽淨公爵夫人の力にも及ばんぞ。」

靈象府も其の所以を知るからして、空しく緘黙して居る。

寒牡丹

吳「今日では此の事件は警視總監の手を離れて、伯母の手に渡つて了つたのだ。」

靈「吳城伯爵夫人か。」

と靈象府は力無げに咳いて、頭を低れた。

吳「僕の伯母ぢやあるが、知る通の大義親を滅する側の人だ。」

靈「もう言ふな！」

吳「言はん！ 言はんから、もう覺悟したまへ。」

靈「おゝ、覺悟した。」

吳「僕も既に覺悟して居る。」

靈「覺悟したからは女々しく考へて居る事は無い、是から茶話會へ行つて大に勢を張らうでないか。」

吳「可からう。」

靈「ぢや出掛けるか。」

吳「善し、時に澤毛野は奈何したかな。」

寒牡丹

靈「然う、些と誘つて見やうか。他も事件が沙汰罷に成つたで、頗る得意で居つたけれども、此話を聞いたら落膽するぢやらうよ。」

吳城中尉椅子を起たんとして、靈象府と面を合せ、

吳「どうも君達には實に濟まんよ、なあ。」

靈「ええ、もう言ふな！」

(八)

其の翌夜の事、吳城伯爵夫人は皇后陛下の御召に應じて参内した。一週に一兩度づつは必ず伯爵夫人を召されて四方山の御物語が有る。此夜も外に四人ほどの貴婦人が伺候して居るのであつたが、少も御前と云ふ氣色は無く、誠に打寛ぎたる團圓。談も暫く途切れて一同無言の折から、陛下は伯爵夫人に向ひ給ひて、何ぞ興有る話を聞せよとの御意であつた。

伯「別に是と申して御聞に達しますほどの話も御座りませんので。」

と申上ぐると、更に御言が有つて、慈善事業に就いて何ぞ聞くべき事は無いかと仰せらるゝ。蕾又の事を奏

上するは此時と、伯爵夫人は心中斜ならず喜びて、

伯「然やう御座りますれば、慈善に關したお話として、申上げます程の事では御坐りませぬが、世にも哀なる親子の身の上に就いて御物語を致しませうで御座りまする。」

是は一月ほど前に起りましたる事件で、其の親子の者には私も會ひまして、能う存じて居りまする。」

と云ふのを發端として、幌尾の家内の有様から娘蕾又の容貌、性質、其の教育、と具に説來つて、さて遭難の顛末に入り、彼の娘が家に歸らんとする途に、一臺のトロイカが忽ち顯れて、中より出でたる三人の男はいづれも泥酔して居たと云ふ條に及ぶ時、室の外に重き足音が聞けたのである。すると團が啓いたから、陛下を始一同其方に注目して伯爵夫人も談を轆めたのである。入來られたのは皇帝陛下である。陛下は手を以て話を續けよと命じ給ひて、伯爵夫人の前に立たれた。

夫人に於ては今宵は如何なる吉日なるか、願うてもなき兩陛下の御前に此事を聞ゆる喜ばしさ、と益す力を得て、感に堪ふるまで巧に蕾又が不幸の一遍を述べたのである。然るに主上は、

「それでは未だ話は濟まんではないか。結局は何云ふのであるか。」

寒牡丹

伯「はい。私の心得て居ります所では、未だ結局は付きませんやうに御座ります。」「結局は付いて居らん！ 而して那樣事が何日何處に有りました。」

此時席を起つたる伯爵夫人は、陛下の前に敬禮して、

矣「恐多くも處は此の聖彼得堡の町盛頭で御座りまして、今より凡そ一月ほど前の事で御座ります。」「御前に侍る貴婦人達は密に目と目を見合せて、各心に駭いたのは、固より此の事件たるや、誰知らぬ者も無いのであるが、終に之が叢中に達したる事と、陛下に於て如何なる聖断を下さるかと云ふ事の二件である。」

主上は森嚴なる口氣にて、

「伯爵夫人、次の問まで參るやうに。」

皇后陛下にも同行あるべき旨を仰せられて、此間を起たせられた。便ち伯爵夫人は兩陛下の御前に於て十分に上奏する所有つたので、其が平生信用あらせらるゝ伯爵夫人より熱誠を以て具陳せられたのであるから、兩陛下には大に驚かせ給ひて、棄置くべき事ならずとの思召。

「早速其の三人の者を捕へんければ成らぬ。伯爵夫人の言ふ所では近衛士官であるとの事。其の報告書は警視總監の手許に在らうのう。」

どの被仰であるから、伯爵夫人は謹んで黙答した。主上には直に待従を召して、報告書を取寄するやうに仰せ出されたが、さて皇后陛下に向ひ給ひて、此の犯罪者に就て如何に思さるかとの御訊が有つた。近衛聯隊より罪人を出すは心苦しき事ながら、罪は罪として十分に糺さねばならぬとの御答。主上にも御同意の旨を仰せられて、更に伯爵夫人に對して、

「好い事を聞せてくれましたして、甚だ可喜しく思ふ。箇様な地位に居つては世間の事は全く知らずに過す、二三の知る事が有つても、違うた報告を受けて居やうも知れぬ。然るに夫人が居つて箇様な事を教へらるゝと云ふは、實に難得き幸福で、又皇帝たる者の名譽と思ふ。」

どの御挨拶で、聖徳の厚きに感じたる吳城伯爵夫人は、旁望外の面目を施して退出したのであるが、果せる哉、翌日の新聞は號外を發して、驚天動地の事實を急報した。其の一は、警視總監の懲戒免官、其の二は、近衛士官の營内禁足。「紅茶屋事件」の再燃は聖彼得堡を攪亂して、到處人心洶々として

唯其の噂。全市の説は二つに分れて、聖断を非とする者と蓄又を憐れむ者と、聾呼紛争して相送らぬのであつた。

前夜晩く寐たりし阿茅淳公爵夫人は午頃に起出でると、喧々擾々の最中、非常の新聞が有る、と夫から此の次第を聞された。固より犯罪者に次いで驚かざる可からざるのは此人であるが、如何にも其通り驚いた。夫「何云ふ譯で警視總監が懲戒されるので御座いませう！ 而して誰が後に直りますので御座いませう。」公爵は聞いたばかりで笑つて居たが、

公「様子を搜つて來やうかの。」

夫「然やうで御座いますね。」

公「行つて見やう。」と云ふなり外出したが、迹に夫人は居ても起つても居らるゝのではなし、一び活路を得せしめたる舍弟は今又綱裏の魚と成つて、既に或處に組板は据られて在るので。差當つて何とも之を拯ふ術が無い。家扶を呼んで段々問合せて見ると、近衛士官は一人も餘さず徴集されたまゝ營内に拘禁されたとの事、之を聞くと夫人は直に馬車を命じて、試に舍弟靈象府中尉の邸を訪れたが、其の言に差はず、

今朝隊長よりの親展書で召れたと云ふ。其の様子では兵營へ尋ねても面會は許されまい、と悄悄引返して、心も心ならず内に居て結局の如何を待つのみであつた。

勅を奉じて部下の尉官を徴集したる近衛聯隊長は、彼等の整列の前に立つて、嚴に左の宣告を與へた。

長「諸君。吾が最も榮譽有る近衛聯隊は、最も恥づべき汚名を蒙つたのであります。聞く所に據れば、諸君の中に其罪を負ふ者が三名有る。實は本官も其事は可成く暴立てずに處分したい考量であつたなれど、もはや今日と成つて見れば、其の手段を取ることゝ克はず、公然と罪を案じて罰を行はなければ成らぬ。本官も相當の處分を爲んければ成らぬと知りつゝ、今日まで放擲して措いたのは、己の罪として深く悔る所であります。然のみならず、三名の犯罪者に對して嚴罰を加ふるの已むを得ざる地位に立つ所の本官は、私情に於て實に忍びざる苦痛を感ずるのであります。

して、其の犯罪の事跡と云ふのは、諸君も知らるゝであります。凡そ一箇月前に起つた彼の「紅茶屋事件」で、三名の近衛士官が大醉の上不名譽なる罪惡を行つたと云噂。其噂が恐多くも皇帝陛下の敕聞に達したのであります。陛下に於ては軍隊の名譽を重んぜらるゝが故に、其罪を假し給はず、今日中に屹度右

寒 牡丹

三名の兇行者を逮捕せよ。然らざる時は、此の聯隊の尉官の勳位は總て褫奪すべしとの勅令を下されたので。本官は謹んで命を奉じて、之を諸君に傳ふるのであります。

就ては諸君の意見は如何でありますか、本官も此度は諸君と進退を共に致す決心であります。で、十分に御協議有りたい。」

聯隊長は一禮して席を退けば、二三の士官は早くも彼の前後を擁して、其の意見を叩かんとした。聯隊長は冷然として、

長「自分は己の行ふべき事だけを知つて居るので、諸君も自身に決心なさるが宜い。」

と言捨てて此を立去つた。述に一同は愕然として爲ん術を知らず、彼方此方に叫く聲の聞ゆるのみで、誰出で主として詢る者も無く、皆心々に如何に成行くらんと氣遣ふのであつた。其時忽ち顯れて衆の前に立つた者が有る。場内の視線盡く之に注げば、其人は吳城伯爵である。續いて又二人顯れて、彼の傍に副うて立つのを見れば、猿象府、澤毛野の二伯であるから、一同目を瞪つて、覺えず手に汗を握つた。

吳「諸君。吾が近衛聯隊の神聖なる面目を汚せしのみならず、其の嫌疑の爲に諸君の名譽をも傷けたる罪人

は此方でありまする。」

彼の二人も容を正して、

靈「我々も同じく罪人なる事を、」

澤「諸君の前に自白いたしまする。」

之を聞いて駭かぬ者は無い。さては彼の兇行者は此の三人であつたかと、或は嘆じ、或は陋み、呆る者有り、憤る者有り、様々であつたが、聯隊中に彼等を憎める者とは無かつたので、誰の心も偏に其の無罪を願つたのである。

(九)

藩又親子は此朝吳城伯爵夫人から至急に招かれて参邸した。彼等も號外附録の報道に因つて大略模様は知つたのであるが、夫人に面會して聞けば聞くほど由々しき大事と成つたのは、夢にはあらずやと疑はるゝばかり。藩又も恚ままでに晴々しき復讐を爲んものとは思寄らぬのであつた。老人は又是が餘に表沙汰と成つて、上流社會の面目を傷くることの太甚しきに過るのを、際に面白からず思ふやうでもあつた。

寒 牡丹

寒牡丹

夫人は親子と贅壘を共にして後、聖旨を伺はんが爲に、少時と二人を留め置いて参内した。が、程無く急ぎ歸て来るのを見ると、待ちかねる親子はかきこき邊の消息を洩聞んと爲たのである。伯爵夫人は其には答へずして、

夫「嬢さん、貴方は加害者の顔を御存じで御座いませうね。」

雷「はい。」

夫「それでは、其の人達を御覽になれば直に判りませうね。」

雷「判りますで御座います。」

夫「宜う御座います。然やうならば是から私と一緒に被入して下さい。」

雷「何方へ参りますので御座います。」

夫「陛下から直々に御聖断を仰聞けらるゝので御座います。」

雷「はい。」と言つたまま雷又は頭へたのである。

夫「さあ、参りませう。」

雷「父は如何いたしたもので御座いませう。」

夫「然やう、御老人の事に就いては何とも御沙汰は御座いませんでしたから、……………」

老「甚だ恐入りますが、どうぞ私も御召連下さいますやう願ひまする。」

夫「はい。何とか御執成を致しませうから、御一緒に御出なさいまし。」

親子は伯爵夫人の馬車に陪乗して近衛聯隊の門前に着いた。夫人は二人を率て營内の廣間を通ると、内に並居る尉官は皆武装を解いて、鬼挫ぐ手も胸に置くより外は無く、顔色憔悴として心懨懨する體は、見るもなかく可哀であつた。上座に椅子を並べて控ふるものは、聯隊長と新任の警視總監。萬縁叢中の紅一點と見るべき雷又の入来る姿は、乍ち衆目の焼點と成つて、噂に高さ「紅茶屋事件」の女主人公は是かと飽かず眺むるのであつたが、雷又は色蒼白めて、其容雨に懨懨する體は、驚き懼れたる氣色は更に無くて、閉に場内を一遍胸した。時に聯隊附の僧官は其の傍に進み寄つて、僧「神明に誓ひ、誠意を以て、御身は今己を辱めたる者を過たず指示するのでありますぞ。」

雷「神に誓ひまする。」

寒牡丹

寒 牡 丹

其聲は低いのであつたが、隈無く響き度るばかり場内は肅然として、物凄き沈黙を凝した。

僧「此方へ来て其者をお指しなさい。」

僧官は彼を導いて尉官の列の前に進んだ。日脚は既に傾きつゝ、雪に映ふ夕榮は的瞭として、丈餘の白き窓帷を射る處に、尉官の面は一齊に向けられたのである。此に立つた蕾又は有繫に忸怩として、胸のみ躍る女氣の如何に爲んとも分まかねて居た耳元に、一聲高く、

僧「陛下の勅命でありますぞ、速かに罪人を指點なさい。」

蕾又は屹と心を取直し、尉官の面貌を一々熟視して、甲を歴、乙を過ぎて、澤毛野の前に行くと、痛恨の記臆は忽ち喚起された。

蕾「此人でございます。」

又進んで靈象府の前に到れば、

蕾「此人でございます。」

今一人なる吳城伯爵は早く既に蕾又は認められて居たのである。けれども彼には其人を指點する勇が無かつ

た、寧ろ指點せざらんと爲た。其人は憎むべき加害者の一人ではあるなれど、現に大恩を蒙れる伯爵夫人の甥と知つては、義として罪を負するに忍びぬ。左にも右にも看過すより外は無いと胸を定めたが、又思へば、然にあらず、若し三人の中にて此人が無禮を加へし當の敵で有つたならば、彼等二人を討するも益無き事、伯爵夫人に大恩を蒙るも、畢竟此の復讐をせんが爲なるに、何とて今更怨の刃を鈍すべき。然は云へ、此人にして其敵ならざらんに、夫人の恩を如何に爲んと、蕾又は姑く思亂れて、二人を指點したまふで立竦んで了つた。

聯隊長は聲を勵して、

長「今一人は何の人でありますか。」

蕾又は辛うじて面を擧げると、傍より僧官が又促す。

僧「お判りになりませんか。」

蕾又は是までと覺悟して、吳城伯爵を指したが、極めて小聲に、

蕾「那の方で。」

寒 牡 丹

寒 牡 丹

「何の方で御座います！」

と云ふなり走り寄つたる伯爵夫人、

夫「是でございませうか。貴方お見違ではありませんか、氣を落付けて能く御覽なさいませう。」

娘は面無げに差俯いて、

蕾「決して違ひ御座いません。」

夫「是に違ひ御座いませんか。」

蕾「はい。」

衝と中尉の傍に寄つた伯爵夫人は、涙聲を顔はせて、

夫「お前さんは何と謂ふ事で御座います！ 其が貴族たる者の行でせうか、實に見下げ果てた人非人。吳

城の家名を奈何なさるのです。伯爵の勲位は奈何なさるのです。不心得とも、不埒とも……………」

と其處に泣倒れたのである。聯隊長は一同に向つて、

長「是にて諸君に被る嫌疑は霽れましたに因て、いづれもお引取になつて宜しい。三人は直に陛下の御前へ

出まするやう、罪の判決は陛下御自身に下さるものであります。」

三人の中尉は謹んで旨を領して退出した。題いで蕾又親子は馬車に打乗つて宮中へ導る。伯爵夫人は此の

不面目なる列席を堪へ難きものに思煩ひつゝも、勅なれば辭し難く同伴したのである。三名の犯罪者と、蕾

又親子と伯爵夫人とは打揃つて御前に召出された。陛下には先蕾又に御目を留められて、其の容儀の雅な

るを心陰に御感ありて、さて加害者に向はせ給ひ、

「こりや、其の三名の中にて誰が最も重き罪を犯したのであるか。申せ。」

吳城中尉は低れたる頭を擡げて、

「恐入りまして御座りまする。」

「其方であるか。」

時に傍より靈象府は慌忙しく奏聞した。

靈「申し上げます。三名の者は何も同じく重き罪を犯しまして御座りまする。」

澤「恐れながら、誰彼と申して、輕重の差別は無いので御座りまする。」

寒 牡 丹

各罪を争つて決する所が無い。陛下も有繋さすがに其志を心中には満足に思召されたのであるが、三人同罪と謂ふ譯の者ではないから、更に蕾又おたつねに御訊おたつねが有る。

「是は重大の事件であるから、其方も有の儘を裏うらまはず言はんければならん。眞偽とも其方の申條に因つて、彼等の罪が定まるのであるから、誓つて實の事を申せ。」

蕾「はい。」

「此の三人の中で其方を辱はづかしめたのは誰か。」

蕾又の蒼白き頬は殆ど薄紅うすくれなひを帯びたるのみで、敢て言はぬのである。

「奈何じや。」

「何の方で御座いましたか、存じませぬで御座います。」

「判らんと申すか。屹いと然やうか。」

「はい、見覺えませぬで御座います。」

陛下は良久く打案じ給ひて、

寒 寒 丹

「然らば朕が旨を以て裁斷するより外は無い。先づ三人の中の年長者は誰か。」
吳城中尉は一揖して、

吳「私に御座りまする。」

陛下は重ねて、

「最も家の富とどんで居るのは誰か。」

之に答へまつるのも亦吳城中尉であつた。陛下は御聲高く、

「其方此娘と結婚を致せ。」

此の意外なる宣告を受けた吳城中尉は自失じしつするばかりに呆おぼれ惑まどうたのである。

「今宵直に聯隊の會堂に於て結婚式を擧るのであるぞ。」

其方に屬する一切の財産は總て新婦たる蕾又に讓るやうに。他の二人の財産も同様の處分を申付くる。又三人の者は今夜式の濟次第西伯利亞へ追放致すに因て然やう心得るやうに。

蕾又は吾を忘れて領伏ひれふさんとするばかりに拜謝した。父は軍醫の格を以て嚴正に敬禮を表するのであつた。

寒牡丹

旋て眼を轉じて伯爵夫人を御覽じたる皇帝陛下は、其の愁然として顔色無く、今は此世に望も絶へ果てたる體なるを可憫に思召されて、

「伯爵夫人の愁傷は實に察し入る。人の爲に計つて忠なる其事は、不幸にも却つて身の仇と成つた。然し、此の慈善に對する眞の報酬は、必ず天帝の御手より受けらるゝのである。朕が正理に與する心は、今後一層貴夫人を敬うて庇略は無い、と云ふ事を能う記臚して欲い。」と御挨拶有つて座を起せられたが、又三人を顧み給ひて、

「其の罪に因つて追放は命じたなれど、其方達が友誼の厚きに愛で、爵位並びに官職等は其の儘に差許すぞ。」

此に一同は御前を退出した。

即夜奇怪なる結婚の式が擧げられて、其場から西伯利亞へ追放と云ふのであるから、加害者も被害者も唯夢に夢る心地、彼方でも此方でも支度の忙しさは一秒時をも争ふ間に、日ははや暮れて、聯隊の會堂には一面に紅氍毹を敷詰め、數千の蠟燭を耀し、近衛の將校は一同大禮服用で列席して居る。皇帝陛下の御名代

として侍従武官長、皇后陛下の御名代としては一名の女官が臨場して、威儀堂々と盛典の擧げらるゝに反して、廐の前には罪人を載する馬車が既に準備せらるゝのであつた。

偕此式の名譽立會人に選ばれたのは、靈象府と澤毛野とで。阿茅淳公爵夫人も澤毛野の母も列席したのは、此の盛典を観んが爲と謂ふよりも、其の子、其弟に盡せぬ名残を惜まんが爲であつた。吳城中尉は伯母なる伯爵夫人に伴はれて式場に入來ると齊く、琅々として讚美歌の聲が起つた。聖斷の名の下に結婚の暴刑に處せらるゝ彼が心中の悲憤は其の面上に溢れ、歩々に怨を帯びて來賓席の前を横截り、やをら己の座に着いた。此に歌は止んで、場内暫く靜肅になつて後、劉曉たる樂の音の起ると與に、糴しく禮装したる侍従武官に導かれて入來る新婦の蕾又は悄然として、満身に紗を被いたる頭には橙の花ならで薔薇を挿み、純白の上衣を透いて下襦の黒の見ゆるほど、總て再婚者の服飾を用ゐたのである、此意は彼は妻にもあらず、寡婦にもあらず、又娘にもあらずと謂ふに在るので。

吳城中尉は新婦の來るを見て座を起ち、一步進めば、蕾又は新耶に手を與へた。式は之より始まるので、讚美歌は再び湧いた。僧正は夫婦の前に立ちて一場の演説ありし後、吳城に問ふ、

寒牡丹

寒牡丹

僧「御身は斯人と婚結することを望まるとか。」
尤も望まぬのであるが、處刑と有れば是非無くも、
吳「仰せの通り。」

僧正は雷又に向つて、同様に問ふのである、是とても意ならねど、式の如く答へた。次で齋された黄金の盃には神酒を湛へて、先に夫が唇を着て、次に婦が嘗る、之を三度廻して納めれば、名譽立會人が中に立つて指環の取替が有る。然る後夫婦は僧正に伴はれて神前に拜する。露西亞の習として此に僧正が、「接吻せよ。」

と命ずるのであるが、雷又は此時始て吳城と面を合せたのである。固より双方不得心の此結婚、男は女を我等に憂目を見する七生の敵と惡み、女は男を其夜の人か、あらずかと疑ので有から、互に睨合ふばかりであつた。

「接吻せよ。」

と僧正は再び命じたが、未だ躊躇して決せぬので、

「疑ふことは成りませぬ、神の命ずる所でありますぞ。」

と聲高く勵した。吳城中尉は是までなりと覺悟して、其の高き身材を少しく屈めて、新婦の頬に接吻した。式は之を以て全く了つたのである。参列者は一同夫婦の前に集つて各祝儀を述べた。伯爵夫人は新しき姪として雷又へ挨拶がある。恚る間にも幌尾老人の氣遣と云ふものは一樣でない。今親子の者は聖斷を仰ぎし一件に就て、貴族社會の憎惡を負うて居る際、其の敵の群る中に立交ふのであるから、如何なる危難の身に及ばんも知るべからずと、手に汗を握りつゝ、驚破と言はれ爲んやうありと、些も雷又の傍を離れず、用心堅固に身構へて居るのであつた。

吳城中尉は先づ新婦に挨拶を作り、僧正には感謝の意を表し、叔朋友親族に連れられて休憩室に行き、即刻旅装を整へねばならぬのである。雷又親子は誰一人管ふ者も無く、空漠たる會堂の中に取殘されて、眞晝を欺くばかりなりし蠟燭は皆消されたる微點に立つて居ると、士官の妻などが二三人傍に寄つて来て、物珍しげに兩箇を看ては叫き合ふのであつた。

此の冷遇、侮蔑に堪へかねたる雷又は、

雷「お父様、殘念ですね。這麼目に遭ふくらゐならば、私は死んだ方が勝たと思ひます。」

寒牡丹

寒牡丹

父「何有、なほに 響かたきは首尾好う討つたのじや。響さへ討つたら、それで可いと思はんけりやならん。」

響又の傍に來て一禮する者が有る、見ると宮中の用人、

用「伯爵夫人の御車は御用意が出来まして御座います。」

伯爵夫人とは誰の事、己おのれの事であつたから響又は驚いた。己は今夜から伯爵夫人に成つたのである、又其

が爲に三名の貴族は同時に西伯利亞へ流ながさるゝのであると心着いた。

響「少し待せて置いて下さいまし。而して是非私がお話を致したいと伯爵にお通じ下さい。」

父「お前何云ふ話を爲るのか。」

響「いええ、ちやうつ些と申したい事が有るのですから。」

旋やがて吳城中尉は服を更めて、毛皮の帽子を片手に入つて來た。今や彼は憤いらだを忍び、恨を吞んで流竄りゅうせんの途

に上るのであるから、一種謂ふべからざる悲惨ひげんの顔色を作して居る。

吳「何ぞ御用ですか。」

響「些と申上げにくい事が御座いますので、少々御出立の御猶豫ごじうごを願ひます。」

吳「婚禮の濟次第出發せよと云ふ勅命でありますから、」

響「此度は陛下へいかの思召を以ちまして、過分の御沙汰に預りましたので御座いまするが、私は決して筒様な結果を望みませんでしたのでは御座いません。何も彼も實に意外で、……………」

吳「然し、御満足で御座いませう。」

響「いええ、決して是迄に貴方をお困め申す心は無かつたので御座います。今と成りましては恐れながら陛下の御聖斷が酷こくに過ぎまするやうに私は考へますので。」

吳「御聖斷に對して彼此申上げるのは不敬であります。其は左ひだりに右みぎ、貴方は何故に今と成つて私を然やうに不便ふびんに思召して下さるのですか。」

響「それは、若も貴方が御三方の中の重罪者ちゆうざいしやでなくて、其の罰をお受けあそばしたと致したならば、實に私は何と申上げやうも無く、御氣毒に存じますので御座います。」

吳「いや、私共は三名ともに重罪者であります。」

寒 牡 丹

雷「いえ、お覺も御座いませうが、私の名譽は是非とも御三方中の一方に回復して戴かなければなりませんので度座います。其の一方は誰方で御座いますか、陛下の御前でも仰が無いので御座いましたが、其ばかりを私は残念に存じます。簡様な事をお話いたしまするのは、私もお可憐いので御座いますが、」

吳「今更那樣事を有仰る 必要は無いでせう。伯爵の位も、伯爵の財産も貴方の御手に入つたら、それで貴方の名譽は十分回復されて居るのです。もう其上を御望みなさらんでも宜いでせう。」

雷又は此雜言を胸に据ゑかねて屹と面を正した。聲は少しく頭つて、

雷「何と有仰います！」

私の軀は汚れて居るか存じませんが、心は些とでも汚れて居るのでは御座いませぬ。伯爵の位、伯爵の財産、那樣物は少しも欲くは御座いませぬ、私の満足は其人の姓名を明して戴くので御座います。然ぞかし御不承で被在いませうけれど、名義だけなりとも雷又は貴方の妻、其の妻にお娶みあそばす必要は無からうと存じます、どうぞ有仰つて下さいまし。」

寒 牡 丹

吳「好い加減になさらんか。貴方も自分を辱めた者を御存無いと云ふ筈が無い。私も決して包み隠すではありませぬ、お明し申す必要は無いのです。」

今は雷又も爲方無く、基督の聖像を指して、言ふことの詐ならざるを誓つたのである。其の姿の毒も及ばざる麗しさに、吳城は覺えず恍然と見入つて居た。忽ち彼の心頭に浮んだのは、過ぎし夜の紅茶屋の光景で、雷又の叫聲は再び耳を貫いて響くが如く感じらるゝのである。さては雷又は己を辱めし者の顔を見識る能はざるまでに恐怖して居たのであらう。思へば無道な事を爲た、不便の者である、有繋に彼を憐む情も起つて、其人こそはと既に打明けんと爲る刹那、輾轉として轟く車輪の音は、己等を西伯利亞へ送らんとする檻車の門前に來るのであつた。彼の優しき心は之が爲に挫かれて、復讐の一念は又激した。

吳「我儕三人が是程の嚴刑を科せられたらば、罪は既に償はれて居るのです。其の罪さへ償はれたらば、貴方は何も申分は無いでありませんか。これで御暇を致します、貴方は随分早く御暮しなさいまし。」

と言ふなり踵を回して、足音暴く吳城は出て行つた。其の後影を見送りたりし雷又は、旋て聖像の前に跪いて、

寒 牡 丹

雷「尊き神よ、願くは罪人をして彼ならしめよ。妾は彼を愛するなり。」
馬車の鈴の音は、喧しく起つた。はや彼等は出發するのである。雷又は此を走り出で、戸外に近き窓際に立つた。

雪は繽紛として今降初めた氣色、三人の囚徒は僧正の前に並んで最終の祈禱を受けて居る。何の程にか雪霞の如く集りたる市民は、此憐むべき罪人に同情を表せんとて、來りて告別の涙を澀ぐのである。門内に整列したる兵士は、其の敬愛せる隊長の遠行を送らんと、手にく松明を擧げて、悲む色も顯なり。涙の顔を得擧げぬのは澤毛野老夫人、弟に接吻して、切に其の健康を祈るは阿茅淳公爵夫人、互に憐と手を把つて、飽かずも顔打目成るは吳城伯爵夫人と其甥とである。

三人は終に檻車に乗移れば、騎馬の憲兵が手綱を握ると與に車は徐に軋り初めた。市民に情に堪へずして一度に聲を揚げる、降類る雪を衝いて車は門を出た。雷又は其の響の次第に遠く、追に霞みて、漸く聞えずなるまで石の如く立盡して居たが、父に驚かされて始て夢の覺めたる如く、
雷「お父様、参りませう。」

連立つて入口に出れば、美々しき二頭立の馬車が其處に控へて居て、馭者が聲を掛けた。

「伯爵夫人の御車は此に居りまする。」

(十)

親子は此車に乗つて、伯爵夫人の生家と云ふには餘に相應しからぬ吾家に歸つた。實に此の一夕にして雲泥の地を易へたる雷又はが身上の大變化は他の驚くよりは彼が自ら多く驚いたのである。雷又は之が爲に夜すがら睡られぬのであつた。晨ともなれば、夙に雪を踏んで父と俱に亡母の墓に詣で、泉下の靈も如何ばかり喜ぶ事ならん、と父は感涙を流して此上無き満足の體であつたが、それから還つて來ると、張充めし氣の弛から、遽に身心疲勞の狀を呈して、一時に十年も齡を取つたやうに頹然と衰へて了つた。

雷又は己の居間に入つて見ると、驚く可し、テエブルの上には朋友親屬其他識る限の方から贈つた祝儀の花は、色を競ひ、香を争つて山の如く積んで在る。彼等は多く雷又の母の物故を悲まざりし人、中には幾ど此の親子を見棄てた者の名さへ有る。雷又は此の贈花を見て寂しげに苦笑するのみであつた。

程無く來訪者は入替り立替り推寄せて、賀を述べ、世辭を抒べる、謂びる、佞ふ、何處を推せば那樣音が

寒 牡 丹

寒牡丹

出るかと思ふやうな事を言散す、聞くのも煩うるさくて雷かみなり又は耳みみを潰つぶして應接して居る。漸く客の絶間を見て、親子は吳城家に赴いたが、其の家人共の爲めに又々侮あなづり輕かろんぜらるゝ事ならん、と二人は覺悟の前であつた所、案に相違して、一同謹んで伯爵夫人の命を待つのみで、縮ちぢまるばかりに戰ひり々として居る。彼等は斯人の陰身このひどかげみには皇帝陛下が添たはせ給ひて、手を觸ふるれば立たどころに罰ある事、吾殿わがどのに鑑かんみても知るべし、恐るべし、と一圖いちずに念おもつて居るのである。

雷かみなり又は先づ夫の居間に案内させた。圖はらを啓あけると父親は鼻の下を延して、

父「噫あゝ、立派りっぱなものぢやー」

と覺えず口走つたのも理ことばで、吳城家は貴族中第一位とも聞ゆる富を擁もするので、室内の裝飾は臻いたらざる無きまでに善美を盡せるが上に、尤も由緒ゆゑ有る名門めいもんであるから、他に見る可からざる珍器奇品の數を藏して、僅に其の一二に過ぎざる者が飾つて在るさへ、既に目を驚かすに足るのである。家従は室の床に敷いてある熊の皮を指して、

從「是日殿様このよのさまが兩三年前に獵かりに御出ましに相りまして、御自身に御仕留おしどめあそばしたので御座りまする。」

父「あゝ、然やうですか。」

と父親は見る物毎に片端かたはしから感眼ばかり爲て居た。雷かみなり又は別に思ふ所有り氣に、冷然として唯一ひとまはり 遍目を配るのであつた。

從「伺ひますが、奥方様には此の御居間を御住に遊ばしますで御座りまするか。」

雷「いえ、私共は此方には居住すまひを致しません。」

從「はッ、では御別荘の方にも？」

雷「いえ。」

從「はッ、然やうなれば何方いづれに？」

雷「依樣よはり今までの宅に居ります。」

從「はッ、では當御殿へ御引移は御座りませんか？」

雷「はい、自分の宅が有りますから、其に居ります。」

當家に嫁よめながら自宅に居る、其の自宅と云ふのは長屋ながやで、長屋に吳城伯爵夫人が住ふ、家従は呆あきれて了つ

寒牡丹

寒牡丹

た。

蓄又は壁に掛れる肖像畫を見て、

蓄「是は誰方様です。」

從「其は殿様の御令妹で被居れます。」

蓄「次のほう。」

從「是が殿様の御母公様で。實は此の御肖像は彼地へ御持に相成りまするので御座りましたが、御取急で御失念あそばしましたので御座りまする。」

蓄「それでは早速お送り申上げなければ成りますまい。」

從「御意に御座りまして。」

蓄又は家從の顔を眺めつゝ姑く考へて居た。

旋て屹と心を決した體で言出した。

蓄「貴方は殿様の御着先の居所は御存じですか。」

從「承知いたして居りまする。」

蓄「それでは直に御送り申上げるのですから、何ぞ大な箱を持つて来て下さい。」

委細心得て家從は出て行つた。長椅子に倚懸つて居る老人は膝の上に兩手を置いて、然も委頓した態をして

懵然と娘の方を見て居るのみで、進んで話を爲る元氣も無いやう。家從は手丈夫に出来た大箱を持たせて來

た。蓄又は彼に指圖をしながら自ら手を下して、室内に在るほどの貴重品から書類など迄一切其中に納めて、

彼の二面の肖像畫をばテェブル掛に包んで、是も俱に籠めて、

蓄「早速此箱をお送り下さい。」

從「畏りましたして御座ります。ええ、殿様も然ぞかし御喜び遊ばします事で御座りませう。」

蓄「貴方は何と云ふ御名ですか。」

從「手前は不破洲と申しまする。」

蓄「あゝ、然うですか。自今は始終此邸の事に就いて萬事報告をしてお貰ひ申したいのですが、何事も殿様の御在の時と少しも變らんやうに致したいのですから、どうか其の積で。それから、別して注意してお貰ひ

寒牡丹

寒牡丹

申したいのは、殿様の御不在中には一品たりとも物の紛失しませんやうに。殿様がお還かへりになつたらば、此儘些とも變らない所を御覽に入りたいのですから。」

從「はッ、然やうなれば殿様には再び御選り遊ばしますで御座りませうか。」

と彼は滴はろく々涙を落した。

雷ちか「直に御選おかへりになられる事と思ひます。」

從「はッ、然やうで御座りましたか。何卒一日も早く御選り遊ばしますやう、又其までは随分御健勝に被居おはせられますやう、只唯お案じ申上げますで御座ります。」

雷ちかも打萎うちしなれて立つて居る其の姿を、家從は頻に眺めて居たが、何思ひけん進み寄つて、恐るく其の手に接吻せつぽんするのであつた。

雷ちか「申して置きますが、貴方は一週に一度づつ私の宅まで出向いて下さい。然して種々御話を聞く事に致しませう。今日はもう是で歸りますから。」

と父を見返れば、長椅子ながいすに倚つたまゝ首を垂れて、何時いつかすやくと睡つて居る。冬の薄日うすひを承けた其の顔は、此世の人と想はれぬまでに、白く瘦衰へたるを見て、雷ちか又

は心の中に痛く驚いた。

從「只今御馬車を申付けます。」

と行かんとするを呼留めて、

雷ちか「それには及びません、あの、其處へ行つて、辻車を頼んで来て下さい。」

從「然やうな物に召しませずとも、御邸に御用の御馬車が御座りますのですから、唯今直に支度を致させます。」

雷ちか「いゝに、私は少し考量かんがへが有るので、どうぞ管かまはんで置いて下さい。」

從「はッ、然やうなれば強ひては申上げませんで御座りますが、では、那あの辻馬車を？」

雷ちか「どうぞ然して下さい。」

辻馬車に召れて長屋へ御歸館あらせらるゝ伯爵夫人、不破瀬ふはせは愈よ呆れたのである。

幌尾老人は馬車の内も始終昏々として居たが、家に着くなり寢床ねどこに入つて、正體も無く睡つて了つた。扱其夢は覺めても、彼は碌とこを離れ得ぬ身となつた。疾はやひと云ふのは、精神の過勞が因よで、急劇なる衰弱を來したの

寒牡丹

である。

病勢は日にく暮るばかりで、醫藥の驗も無く、枕に伏して僅に十日と保たずして、老軍醫は孝女の優しき手に抱かれて永眠した。

彼の遺言は、第一に、堅く今日の志操を守つて、移らず、惑はず、上は皇帝陛下の盛徳に負かず、下は屍尾の家名を潰さざらんやう、必ず其の終を全うせよと謂ふ事。第二には、母の思すら明けぬ間に又父の喪に籠らば、年若き身の餘に可傷ければ、我が忌服は略すべしと謂ふ事。

世間では皆謂つた、彼は非職の一軍醫として死んだのではなくて、實に吳城伯爵の岳父として逝去せられたのであるから、身後の榮ある盛大の葬儀が營まる事であらう、と陰に刮目して居たるに、其妻の分差はず質素千萬なるには、誰も一驚を吃せぬ者は無かつた。

蓄又は是等の費用を辨じて後、金匣を探つて僅に拾ルウブル(拾壹圓強)を得た。此の拾ルウブルなる者は豫算の殘額ではなくて、彼の身上の有丈けであつた。之を僕に渡して、

蓄「今月は是限しか無いのだから、是で好い様に遣つておくれ。」

僕「是は拾ルウブル！」

蓄「然うだよ。」

僕「拾ルウブルでは如何な事にも、」

と僕は頭を掻いて退避いだ。

蓄「死にさへ爲なければ可いのだから。」

僕「へい、死んぢや耐りません。」

と云ふやうな、見る影は無い内面の都合。此へ伯爵家の不破瀬が弔問に來合せて、此の爲體を見、又之に處する夫人の度量を見て、頗る畏敬の念を起したのである。彼は吳城家の家人總代として哀悼の口上を述べたつて、

不「扱伺ひますが、私共は御喪中の所は如何致しまして宜いので御座りませうか、何分御指圖を願ひますで御座りまする。」

蓄「いえ、決して然云ふ御念には及びません。歿りましたのは、伯爵夫人の父ではない、或る一個の軍

寒 牡 丹

醫で、伯爵家とは何の縁も無いので、家來衆が忌服するには當りませんから、其のやうに心得て下さい。」

不「はッ、心得まして御座ります。それに、實は、御取込申を甚だ恐入りました儀で御座りますが、本日御別荘の方から致して麥の賣上代を送越しました譯で、右の金は如何取計ひませうか。」

蕾「其の別荘と云ふのは何地です。」

不「御別荘の在ります處は小鞠野こまりのと申しまして、御領分中では此が一番大いので、夏場には例年其へ御越に相成りました。然る處、此度殿様の御出立や何や彼やで、御別荘の召使共に給料が未だ渡りませんで居りますが、是も何とか致しませんではと存じまして。」

蕾「あゝ、可うございます。其は私が取扱ひます。而して麥の賣上と云ふのは何程送つて参つたのです。」

不「えゝ、二萬三キルツブルに御座ります。其外家政上の事に就きまして未だ色々申上げたい儀も御座ります。今日の事で御座りまするゆゑ御遠慮を申上げます。」

蕾「それは急の用ですか。」

不「はッ、可成は至急に取計たく心得まするで。」

寒 牡 丹

蕾「然やうなれば、明日私が出まして善く伺ひませう。」

不「何時頃御越おこしに相成御都合で御座りませうか。」

蕾「三時には参ります。」

不「御食事の御支度は如何致しませう。」

蕾「支度には及びません、些と行く丈ですから。」

不「二時過には御馬車を差出しますで御座ります。貴方様が御召に相成りませぬと、馬は全て罷休おそびで、病氣が出まするゆゑ、どうか節々せつせつお召あそばしまするやうに。」

蕾「又は座一筋ちりひすぢと雖も伯爵家の物をば私するを屑くずしと爲ぬのであるから、之を聞いて少く遅たからつたが、

蕾「然うですか、では迎むかひに寄越よこして貰ひませう。」

不破瀬は是で立去つた。蕾は父の永眠した其の室に入つて、熟つくづく身の行末の振方ふりかたを考へたのである。實に不思議なるは彼が今の身の上で、家には俱すに棲すむべき母も亡なければ父も亡く、嫁いだ夫は遠い西伯利亞に請てきせられて、其の留守を爲ねばならぬやうなものゝ、伯爵夫人は名義のみで、呉城の家族として振舞ふべく

寒牡丹

もあらぬのである。然れば幌尾の娘にもあらず、吳城の夫人にもあらず。何方就かすの蓄又をば如何に處置すべき乎。思廻すほど當惑するのであつた。

翌日の午後二時ともなれば、伯爵家の馬車は長屋の礎を轟かして夫人を迎に來た。蓄又は之に乗つて吳城家に導かれると、玄關には不破瀨が出迎へて居て、直に伯爵の書齋に案内する。煖爐の前の安樂椅子に請じて、彼は小き鍵を夫人に渡した。

不「此の隅の御筆筒に御別荘から達しました金が納めて御座りますから、どうぞ御檢を願ひます。それに御當家の御財産目録も之に入つて居ります。」

起つて其の筆筒を啓けて見れば、二萬三千ルウブルの銀行券が紙包にして横つて居る。蓄又は之に對して有繋に考へたのである、此には二萬三千ルウブルと云ふ大金が無雜作に轉してある、己の財産には單の十ルウブル、其も昨夜から今日へ掛けて若干か減つて居る。それで左にも右にも今月を支へねばならぬと云ふのに、此の莫大なる金子は誰の物であるの乎、皇帝陛下より下し置れたる己の物である。己の物は二萬三千ルウブルの銀行券には止らぬ、當家重代の珍寶奇品を始として金銀珠玉、服飾器財、此の邸まで、總て己の所有

寒牡丹

に屬するのである。とは謂ふものゝ、義として其富貴に處るべからざる蓄又は、飽く迄老軍醫の孤兒の名下に十ルウブルの資に堪へねばならぬ。我必ず之に堪へんと彼は私に頷いた。

蓄「それで昨夜お話の有つた給料と云ふのは何程ですか。」

と彼の銀行券の包を解いて、不破瀨が示す計算表の額を支拂つて、其を明細に己の手控に記した後で、類に殘額を算へて居た。傍に不破瀨は、其金を夫人が如何に始末をすであらうかと、胸轟として見て居るのであつた。彼は此際一言述べたいのは山々でありながら、越權の不敬を憚つて言ふには言はれず言はで已むる心苦しく、取つ舍つ思案するのは幽囚中の主の身の上。

殿には立際に持て行れた金子も多分ならねば、直に費ひ果さるゝ事であらう。西伯利亞の如き邊土にては物價などは非常に高いと聞く、其處に在して不自由なる御身は物一つ調へんにも、看守の警護のと彼方此方には那の金を請受けて御手許へ差上げたならば、殿の御喜は如何ばかりならん、彼は漫涙に曇る目を睜つて、夫人の券を數ふる手頭を凝々然と打目成つた。

寒 牡 丹

夫人は勘定を了ると、一萬五千ルヴル別封にして、其を状袋に入れたが、日ははや傾いて手元は黯い。雷「蠟燭を。」

不破瀬は直に蠟燭を點して来て、デスクの端に置くと、夫人は筆を採つて、さら／＼と上書をして、雷「明日の一番の便で之を出して下さい。」

不破瀬は之を受取つて見ると、西伯利亞の殿へ宛てて在るのであるから、餘の歡喜に潑々と涙を流した。胸が逼つて物が言れぬので、矢庭に跪いて、夫人の手に接吻したのである。然ほどに喜ばると雷又の心の内は又謂はうやう無く楽しいのであつたから、麗しい目をして熟と家従の顔を眺めて居た。彼は旋て起上つて件の封金を推戴き、

不「難有う存じます。手前は實に嬉うて、何とお禮を申上げましたらば、此の感情を表すことが出来るので御座りませうか、手前が此金を頂戴致しましたよりも實際嬉しいので御座ります。殿様には然ぞかしまあ西伯利亞の雪の中で今迄に御存知の無い御難儀を遊ばします事で御座りませう。寒さは寒し、寂さは寂し、右も左も御不自由ばかりで、所好な御賞も召上られず、明暮戀しう思召るゝのは都の空、不破瀬のや

うな這麼親仁の身の上でも、都居住を致して居れば、可羨しいと御考へ遊ばす折も御座りませう。而して何事も御不足の上にお管ひ申上げる者とても無いので御座りますゆゑ、目も當てられぬ情無い御姿にお成り遊ばして、生効も無いやうに思召されながら御暮しなさると考へますと、手前は夜の間も寐る空は御座りませぬ。

手前は殿様には其方此方二十年も御附申して居りまして、恐多い申分では御座りますが、我子も同様にお伶しう存じまするので、此の金子を御受取あそばしましたらば、簡程までに奥方様が御注意下さる事を、殿様には然ぞかし御満足に思召さるゝで御座りませう。手前は此齡に相成りまして、簡様な嬉しい事はついに覺えませぬで御座ります。」

不破瀬は殆ど神に隨喜するが如く、此の夫人の徳を感じて極る所を知らざるのであつた。彼の伯を思ひ、己を恩と爲るの怨ばかり篤きを見て、雷又は却つて身を研らるゝやうに覺えた。

雷「那樣に貴方が喜んで下さると、私も甚麼にか嬉しいのです。此後とも殿様の御身に就いては十分に御注意申上る積ではありますが、到らん所はどうぞ遠慮無く心着けて下さい。」

寒 牡 丹

不「いえ、もう奈何仕りまして、手前風情が企及も無い事で御座ります。唯手前より何分とも殿様の事に就きましては、未長く宜うお世話下されましますやう懇願いたしますで御座ります。」

當「それは、もう、及ばずながら御盡し申す積。で、もう用は有りませんから、貴方は隨意に那方へ。」

不「はッ。伺ひまするが、之には貴方様の御名がお記し御座りませんが、無論御差出人は奥方様で？」

當「いえ、それは貴方の名にして下さい。」

彼は一禮して退出した。迹に當又は伯が在りし頃常に憩へりし其の安樂椅子に身を委せて、稍半時間許と云ふもの、睡れる如く靜に沈吟して居るのであつたが、何を思へるにやあらん、閉ぢたる眼より流ると涙は玉の頬に輝いた。

(十一)

其後當又は屢ば伯爵家を見舞つて、夫の手澤ある器具を眺めたり、藏書を取出したり、又折節は老實なる不破瀨を召して昔語を爲せなどして、當時の身上では其を消遣と爲るのであつた。

誠に此の尊敬すべき新夫人、彼は一意に吳城家の好運に向ふ事のみ計つて、孝々として倦むを知らぬ。

現に同家は徒來鯨生活であつたから、何と無く家内の秩序が立たず、經濟なども頗る亂れて居たのを、當又が出入してからは、尤も此邊に意を用いて、家人の監督を嚴にし、冗員は別荘へ廻して用にて中てる、濫費は十分に節すると云ふ始末であるから、収入は速に裕となつて、目に見えて富は益々累るばかり。不破瀨は心の底から敬服して、吳城家の守本尊と推戴したのであつた。

或日當又は算笥の中を形付けて居ると、古手紙の一纏にしたのが出たので、何氣無く一通を取つて披き見ると、讀むに堪へざる色文であるから、直に燧燼の中へ投込んで了つた。所が、未だ女筆のが有るから、是も火中すべき者かと展べて見ると、女は女であるが、伯爵の實の妹の、豫て名を聞いた繪蓮と云ふの文。此の婦人の事に就ては不破瀨から話も有つたが、彼は決して人の短を説かぬ性で、唯褒めるばかりで、更に要領を得ぬのであるが、伯爵との間に何か不和の事が在つて、音信不通で居るらしい、と常に當又は疑つて居たる處、今ゆくりなくも其の秘密を文中に發見した。

繪蓮なる伯の妹は今より十二年前に夫に死別れたと察せらるゝが、其の死狀が一件の問題で、世間の沙汰にも乗つた程の者らしい。即ち變死である。其の變死に就ては繪蓮も嫌疑者の一人と傳へらるゝらしい。因で文面

寒牡丹

は身の潔白を縷々と述べて、其冤を雪がんと爲に兄の助力を乞ふのであるが、伯は之を願も爲なんだものに見えて、追掛けて三通ほど反復哀願した末に、痛か兄の薄情を怨んだのが有る。雷又は残らず見了つて、熟考へて居たが、旋て其文は舊の處に收めて、直に不破瀬を呼寄せた。

雷「不破瀬さん、轟日那の殿様のお妹御の事を些と貴方から聞きました、私少し考が有るのですから、貴方の知つて居る丈の事を話してお貰ひ申したいのです。」

不「はッ。」

雷「何云ふ御方ですね。」

不「誠に濃厚な、結構な奥様で被居れます。」

雷「で、當時は後家でお在あそばすのでしたね。」

不「御意に御座ります。」

雷「お子様方は？」

不「お七歳にお成なされます若様がお一方お有あそばします。」

寒牡丹

雷「而して旦那様は何で御殺りあそばしたのですか。」

不「はッ、御殺りあそばしましたので御座ります。」

雷「御病氣でですか。」

不「多分然やうかと存じまするが……。」

雷「貴君は二十年も當家に勤めて御在のではありませんか、それで姫様の御配耦が奈何なすつたか、悉い事を知らんと云ふのは、些と受取りかねるではありませんか。」

不「はッ。實は……猶且其の……御病死で。」

雷「何御病氣でした。」

不「はッ。御病氣は……猶且……其の……究竟頓死で。」

雷「不破瀬さんはまあ何を言つてお在なのでせう、病氣に頓死と云ふが有るものですか。」

不「はッ、はッ。然やう、卒中と申すので御座りませうか。」

寒牡丹

雷「不破瀬さん、聴と然うですか。」

不「はッ、確か然やうで御座りました、はッ。」

と禿顛はげから烟けむりを立てて容縮さんしゆくの體であつた。雷又は到底此口を開かせる事は難いと見たから、強て追窮は爲すして、はや時刻も遅しと席を起つて、直に歸らんとした。

不破瀬は其體を見ると、言遣ことづしたことを思出したと言ふ風で、

不「ええ、奥方様には些と御別荘の方へもお遊あそびがてら旁でむきお出向に相成ましては如何で御座りませうか。追々時候も宜う相成つて参りまするし、餘程閑靜な、風景も好い處に御座りまする。それに、此方から御高臨おてまが御座りませんと、段々管理が不行届ふゆきとどきに相成りまして、何彼に就けて御爲に成りませんで御座りまする。」

雷「然し、差當つて出向かなければならんやうな事も無いのでせう。」

不「はッ。別に恁かまと申す次第も無いので御座りまするが、繪蓮様からの御文で御座りまして、殿様の御出發に就きましては那方あちらも大混雑で、其以來規律が立ちませんで、奉公人共が天乎吾乎てんやわんやに遣つて居りまする様子に御座りまするで。」

寒牡丹

雷「然云譯なるなら直にも見廻に行かなければなりませんね。」

不「御意に御座りまする、可成なるお早いが宜しいかと存じまする。」

雷又は再び席に着いて、有間熟しやらくじつと考へて居たが、

雷「一週問ほど経つたら参る事にして、而して當分私は那方ちちらに住んで見ませう。」

不破瀬は此の果斷くわだんに驚いたが、又頗る喜んだ。夫人が一び手を着れば、快刀くわいたうの技倆は忽ち家政の亂麻らんまを斷ち來るは疑を容れざるのである。

雷又は翌日早々發足はつそくの支度に掛つたが、第一に幌尾の世帯を一先た疊まねばならぬ。長年召使ふ料理人だけ供に伴つれる事にし、給仕には暇を出し、家財は知邊しるべの方に預げ、萬端始末して、いよく出立の前晚吳城家に
出向いた所が、最早留守の用意をして、室内の裝飾品等には一切白布の覆が掛つて、見るから衷寂うちさびしく感ぜらるゝ。

雷又は此中を徘徊しつゝ、物思はし氣に爲して居たが、卒然そつぜん不破瀬に訊たづねた。

雷「殿様は先日お送り申した箱をもうお受取になつたのでせうね。」

不「はッ、確にお受取あそばしました。」
 蕾「お喜び遊ばしたでせうか。」

不「はッ、それは非常な御喜で御座りまして、何一つ心を慰める者も無い中に、簡様な物を心着けて送りくれた深切は、身に浸みて忝ない、と懇な御書面で御座りました。」

蕾「それから金子は達きましたらうか。」

不「無論到着致しましたで御座りませうが、未だ其の御便りは御座りません。」

蕾又は此の夜吳城伯爵夫人の邸に暇乞の訪問をして、證に名刺のみを差置いて、別に面會は申入れぬのであつた。後より不破瀬を以て、小鞠野の別荘に移轉する旨を通じ、繪蓮に用事は無きやと問しめた。然る處伯爵夫人は不破瀬に向つて、

夫「別にお頼み申す程の用事も有りませんから、宜う傳へて下さるやうに。時に、不破瀬、お前は今度御出の奥方を奈何考へますか。」

不「手前は那云ふお希しい御方には今までお目に懸りました事が御座りません、誠に御家の御名譽と心得ま

する。」

夫「然やうかね……。」

と伯爵夫人は何故か深く嘆息した。

(十二)

吳城伯爵夫人は甥の結婚一條に就て、小鞠野の繪蓮の許へ委細の通知をしたのであるが、其の大意は、吳城が若氣の至から不慮の禍を招いて、今度の始末に及んだは、悔いて復へらぬ事ながら、同族の爲一門の爲慨きでも猶餘有る次第にて、己も圖らず此の事件の渦の中に巻込まれて、謂知らず心を惱した事である。然しながら、新夫人蕾又と云ふは、財産としては無けれど十分の教育有りて、而も性質温和に其の徳高きことは、當今の女流に見るも希なる所。あはれ、吳城家の爲には好き夫人を得たり、と己は心私に喜ぶのである。いつれ其地へも行かるゝであらうから、其節は宜く觀察して、思ふ所を通じ給へ、と云ふのであつた。

此の新夫人蕾又の事は當地に於ても非常の取沙汰と成つて、誰も情として主家を念ひ、殿の身上を悲まぬ者は無いから、一村擧つて蕾又を思ひ嫌ふこと蛇蝎の如く、他は毒婦よ、美人局よと陰ながら指彈をして居る

際に、此の別荘へ來ると云ふ事が聞えたから、村中は鼎の沸くやうに噂を立て、寄ると接ると管又の評判であつた。殊に別荘附近の者は彼を憎む餘、新夫人が見ては決して交際は爲るな、爲まいと云ふ契約をして、今にも其の得意の面の皮を引剥きくれん、來れ、遅しと待ちかけるのであつた。

管又は不破瀬と料理人などを率て此に着したのは、五月の半、長さ日本傾いて、若葉の綠涼しく夕榮ゆる比。牧場の羊は盡く影を歛めて、路には満目の野花露を帯びたり、薄霧に罩められたる遠方より陰々と響く鐘の音、又面白き山里の夕暮である。

一行を載せた馬車は往還に臨める門を深く入りて、幾重の木立の陰に聳ゆる石造の二階の前庭に引込んで、先づ下りたる不破瀬は管又を介抱して、樓下の一室に導いた。誠に伯爵家の別荘ほど有りて、恠る邊鄙には相應しからず美施を盡せる座敷の模様、テェブルの上に二挺の蠟燭を點して、壁に掛けたる一面の油繪は伯爵の母の肖像である。

管又は之を見ると乍ちシオールを脱捨て、蠟燭を把つて其の額の前に進み暫が間、目も放たず打眺めた。畫かれたる故伯爵夫人は大禮服を着て、眞珠の首飾を懸け、赤き寶石の簪を戴き、微笑を含める容、吳城中尉

とは瓜二つとも謂ふべく酷しく肖て居る。彼は手にせし灯を其處に置いて、我が爲には相見ぬ姑なる人の肖像の前に跪いて黙禱した。

「妾が親愛なる夫の母君よ。其靈の天に在すからは、妾が心をも明かに知り給ふらん。願くは、妾が斯の心の誠に愛で、速に吾夫をして、其憎惡を去りて、憐れましめ給へ。」

實に管又は其の心の底に此如く夫を思ふのであつた。彼は廉潔自ら持ちて、苟も伯爵の勳位を懸はず、伯爵の財産を念はぬのではあるが、吳城伯爵其人をば忘ると能はざるので、彼の三名の中の誰と異き縁を結んだか、其は未だに知らぬのであるが、彼は自ら何故とも覺えずして、他の二人は今に到る迄も憎きに、獨り吳城中尉のみは吾夫と定められざりし先より既に悦ばしいのであつた。

管又は最初に所有地の検分を爲ねばならぬのであるが、夥しい坪數であるから、僅に一週間を之のみに費さねばならぬ。次では此の領内に山も有る、河も有る、森も有る、牧場が有る、菜園が有る、逐一之を見物するには猶一週間の日子を要する。其の心算を爲たのみで、管又は到着後三日の休息を取つた最後の日の午過、裏庭の花簀を看やうと思立つて、二階の居間を出て來る途端に、來客の取次が有つた。

寒牡丹

取「諸座の御新造が見えまして御座ります。」

雷「諸座？ それは何云ふ人なのでせう。」

取「繪蓮様の御家來の妻君で御座ります。」

雷「直に會ひませう。」

旋やがて應接間に行くと、其の婦人が控へて居て、初對面の挨拶が有つたが、如何にも世辭澤山のお饒舌で、優しい聲はするが、陰險の相をして居る。

雷「何で御用ですか。」

諸「いえ、別に何で御座いますけれども、奥方様の御着の御祝おいはひに伺ひましたので、本にもう何日此方へ御越の事かと存じまして、數ならぬ私共まで、此間中から申暮して御待受を致して居りましたので御座います。」

雷「其は好くね。」

諸「奥方様、どうぞ箇様かやうな不束者ふつかもものでは御座いまするが、此後ともお見識みしり置かれまして、御家來同様に御用を仰せ聞けられさするやうにお願ひ申上げまするで御座います。」

雷「はい、雖有う、又お世話になります。」

諸「奥方様、あの、何で御座いまするか、殿様は今度天子様てんしさまからの御申附で西伯利亞の方へ御越し遊ばしたと云ふ事を承はりましたので御座いまするが、然やうで被在おらつしやるので御座いますか。」

之を聞くと雷又は謂はう様無き不快を感じた。今日まで誰一人面と向つて此事を言出した者は無いのである。

雷「其の通ですが、此村の人達は其を奈何思つて居ますね。」

諸「はい、私共は然う思つて居りますで御座いますよ、天子様は私共の御主人様の御主人様で、神様も同然で被在いらつしやるので御座いますから、天子様の遊ばしまする事に點の打ちやうは無いので御座います。如何な事でも天子様の御申付を背そむいては相濟みませんので御座います。」

雷「村の人も皆然う思つて居ますか。」

諸「思つて居ります段では御座いません、それは貴方様。」

雷「けれども私を憎んで居る者が多いと云ふことを聞きました。」

諸「此村でと御意遊ばすので御座いますか。然やうな事が、貴方様、嘘うそにも御座いまして可いもので御座い

寒牡丹

せうか。」

と言つたが俄に聲を低めて、

諸「但、貴方様、私共の奥様——簡様な事を申し上げますのも如何で御座いまするけれども——奥様だけは實の處、貴方様が御嫌で被在おきらひるつしやいますで御座います。」

管「未だ一度もお目に掛つた事は無いのに……。」

諸「いづれ奥方様は御面會にお越し遊ばしますで御座いますか。」

管「私がお訪ね申して、お會なすつて下さる事なら、今日にでも上りたいのだが、お前さんが今度其を伺つて置おきして下さいな。」

諸「それは、あの、奥様も貴方様にお會ひ申したがつて御在ので御座いますから。」

管「でも、今お前さんは繪蓮様は私を嫌つて御在だとお言ひではないかね。」

諸「然やうで御座いますよ、お嫌ひ遊ばして御在ぢや御座いますけれども、又お目にはお掛り遊ばしたいので御座います。餘程變な御方で御座います。」

彼は猶も言ことばを續けて、

諸「私は本に然う思ひますで御座います、奥様は貴方様とは御兄弟に御當り遊ばすので御座いませう、然やうなれば、貴方様と御仲を善く遊ばした方が、甚せんに御身の御爲に成るか知れば致しませんで御座います。

貴方様には天子様がお附おつき遊ばして被在おらつしやるので御座いせんか。其が、貴方様、奥様には千人力にんりきなので

御在います。何なせ爲と有仰りませ、奥様には誠に可厭いやなお噂が立つて居りますので御座いますから、貴方様の御力をお假り遊ばして名譽とやらの恢復くわいふくとやらを遊ばしますが宜よろしいので御座います。」

管「可厭いやなお噂と云ふのは何云ふ事なのです。」

諸「奥方様は成程御存じ無いのも御尤で被在おきいます、もう此の土地では誰一人知りません者は御座いません。奥様の旦那様の御歿おなくなりあそばしましたのは、奈何も尋常事たゞごとではないので御座います。其も是も奥様は皆

御承知で御在おいであそばしながら、別にお訴へあそばすでもなく、ぐづくに泣寐入なみいれにしてお了おしひあそばしたの

で御座います。で御座いますから、世間では何の彼のと悪いお噂も立てるで御座います。」

稍ややくち口くち早はやに善く舌が廻つて、立續たてつたけに辯ずるのである。管又は呆れて、

雷「お前さんも、まあ如何な事でも、御主人の事を然う言下すものでは御座いませぬよ。些とお憤みなさ

諸座の妻も有繫に口敷の多かつたのを悔いた氣色で、爲に話の腰が折れて了つたので、勿々に暇を告げて出て行つた。迹に雷又は庭内を散歩しつゝ思案を凝せる體であつたが、有問あると書齋に入つて不破瀨を呼寄せた。雷「私は少し考が有るのだから、繪蓮様の旦那の——圓磯生様の御役になつた事に就て、貴方の知つて居るだけの事實を包まず話して下さいな。」

例の如く先「はッ」と應へた不破瀨は實際事件の真相は知らぬのであつたから、依様世上の取沙汰に成つて居る一部始終を語つたのであるが、吳城伯爵と同一の考を有つて居るので、即ち此の老實なる不破瀨さへ彼に就いては疑を抱いて居る。

不「那の事件は私も御訴に成つて、十分に御取調あそばしたのが宜かつたらう、と考へまするので御座ります。」雷「世間で言つて居るやうな始末ならば、どうも然う爲なければならんですけれど、繪蓮様は屹度自殺を作つたと信じて御在なのでせう。」

とは言ふものゝ心中では、彼の繪蓮が或は毒殺などを行つたのではあるまいかと疑ふのもあつた。然しなから、伯爵の妹である以上は、其人の悪名は猶且吳城家の不名譽であつて見れば、若も其が無實の罪であるならば、飽くまで冤を雪いで上げたい、左にも右にも之を曖昧に附して置くべきでないと思つたのである。因で、其後は絶えず心掛けて、彼の事實を探らんと爲た。

村中から蛇蝎視せらるゝ雷又は此に來て、唯一人の諸座の妻なる、或は繪蓮の間隙にはあらずやと疑はるゝ其客に訪れし外には、誰交る者も無く、三週間ばかりを過したのである。然るに、或日思寄らずも四頭の白馬に曳せたる美々しき馬車を驅つて、別荘の新夫人に面會を求むる貴婦人が有つた。

其人は當地に於て最も大いなる資産を有し、最も高き教育を受けて、村民の輿望を負へるほどの人物であつたから、人々が徒に雷同附和して雷又は鄙厭するにも拘らず、已の信ずる所を以て、此の新來の珍客と握手せんが爲に駕を控げたのである。

雷又も此の夫人の事は豫て不破瀨から聞いて居るのであるから、禮を厚うして之を迎へ、茶菓を出して款待したる所、客も雷又と會談して、其の尋常の女子にあらざるを知るや、好き朋を得たる可喜しさに、深く満足

の意を表し一還つた。爾後は逢ふ人毎に雷又の事を語つて、盛に稱揚するのであつたから、平生信ずる波
 斯野夫人の言を誰疑ふ者も無く、却つて迷夢の覺めたる想の村人は、一人訪ひ、二人訪ひ、三人四人と歩
 を運びて、桃李の下は自ら蹊を成すてふ雷又が門前。彼の不義の人と交らざらんと契約したる連中も追々に
 旗を捲いて、三箇月許の後は、尠くも波斯野夫人と同等の敬すべき人物を以て雷又に許すほどの勢と
 なつたのである。

此に於て雷又は益々心を用ひて領内の住民を愛み、病人には藥を施し、貧民には衣食を給し、専ら慈善を
 志したので、到る處吳城家の徳に露ほざるは無く、餘澤は竟に領外にまで溢れて、新夫人の美名は四方に
 謳はるゝのであつた。

吾兄を流竄せしめ、吾家を押領したる可憎き仇よ、と絶えず心の底に又を磨いた繪蓮も、萬事に就けて
 痒き處の手の達く雷又の所計、陰になり、陽になつて己を扶くる、又は親く目に暗る毎日の善行は、牙を藏
 して羊を装ふ者の爲し能はざる所、と漸く我折つて感激の餘、西伯利亞なる兄の許へ故々文して彼の徳を
 彰した。

之を手した吳城は、彼の爲に伯爵家が散々に蹂躪せられて、其横暴は愈よ募ると聞くにも劣らず彼の偽善を
 痛憤した。前週には不破頼から送金が有つて、其の添状にも、夫人の勤儉、慈善、貞淑、人望の、御家の
 爲の、何の、彼の、雷又から頼まれでも爲たやうに、徹頭徹尾褒めちぎつて在るのを見て、心頗る不平の
 處に、又々如此、頌徳表を突付けられたので、赫と成つて引裂いた文を、又咬潰して、火の中に打込ん
 で、不和なれども骨肉の妹、他人なれども累代相恩の不破瀬まで、我が七生の怨敵たる匹婦に心を蹴し、
 言を揃へて吾前に其の讃辭を呈する無面目、餘と謂へば恃難き人情かなど、彼を念ひ、此を思ひ、吳城
 は足擦を爲て口惜しがるのであつた。

靈象府、澤毛野の兩名も勅命に由つて各其の財産を雷又の手に致したのでありながら、圖らずも巖に吳城伯
 の新夫人より其の歳入の全部を送らるのであつたから、兩名相談の上簡單なる謝狀を發して之に答へた。
 如此き有様で、彼が爲に罪を以て極寒窮陬の境に恨を呑む身は、誰有つてなかく彼の厚意を恩とし
 て感ずるのではなかつた。謂ふべくんば、彼等の嘗むる辛苦に對して、彼の施せる恩の力の、恐くは猶薄い
 のであつたらう。

然れども、都に在つて親く蕾又の行を見聞せる家族親戚は何も彼を徳として、昨日の仇は今日の友、洵に天の呉城家に賜へる夫人であると噂した。

程無く不破瀬は西伯利亞からの返書を受取つたが、其中には亡母の事、親友の事、愛馬の事、獵犬の事等に就いて縷々と書いてあつたなれど、一言も夫人の事には説及ばなかつた。不破瀬は無情なる此の文を夫人に示すに忍びざるのであつたが、然もならぬので、彼の前に差出したのである。蕾又は之を見ると思はず胸逼つた。其身は伯爵夫人の榮を享けながら、志は之に處らず、己の爲には一錢の資産をも費す事無く、日夜伯爵家の爲に經營して、其の収入の全額とも謂ふべき者を擧げて夫の手許に送るのである。又姑たる人の墓參から法事まで随分心に懸けて怠らず、却つて伯爵の居て營みし昔よりも手厚いくらぬ。夫の誕辰には禮を守つて宴を張り、陰ながら其の健康を祝するなど、家を念ひ、夫を思ふより外はあらぬに、尙此心が通ぜぬのかと、讀訖つた文をいつまでも打目成つて、儘く思續けて居た。不破瀬は傍に見て居るも可傷く、不「殿様には何ぞ一言奥方様へ仰が有るべきに、奈何も怪しからん事で御座りまする。」蕾又は纒に目を以て之に應へた。

不「手前よりは御書面を差出しまする度に、奥方様の御家の爲に御盡力あそばします事、又始終殿様の御身上をお案じ遊ばして、手前まで段々御心着に相成る事、内外の者からは尊敬あそばされて、今日では御同族の方々も皆御満足の趣を、悉う申上げまするので御座りまする。御心底は神明の御照覽ある所で御座りますれば、其内には必ず殿様の御心も解けらるゝ事で御座りませうと考へまする。」

蕾「好く言つて下すつた。私の此の心を知る者は、天に在す吾が神と、不破瀬さん、貴方とだけです。」

不「はッ。」

蕾「お察し下さい。」

不「私は熟く伯爵夫人が可厭に成りました。」

不「取でも無い事を御意あそばしまする。」

蕾「いゝえ、猶且住み慣れた長屋に兩親満足で居てくれました昔が、私は戀しいのです。身の不運とは

謂ひながら、恁う云ふ處に来て恁う云ふ苦勞を爲て居るのを、草葉の陰の親達は然ぞや案じて居りませう。」

不「……………」

蕾「是も勅命ですー」

とやら夫の文を收めて、彼は黒き喪服に點する涙の露を拂つた。

(十三)

早くも秋去り冬來りて、雪降り初めし夜の十時頃、蕾又は獨り煖爐の前に越方行末の事など思續けつゝ、今の身の上の在るに効無き儘さを、つくぐ胸に置餘して、前後も知らで在りける處に、部屋の關の笥と啓く音が耳に入ったので、何心無く見返れば、頭からシヨオルを被つて、外套を着た一箇の婦人が、半身を差入れて内を窺ふのであつた。蕾又は慄然として、

「誰ですか。」と聲を掛けた。

時に廊下に足音がして、直と入つて來たのが不破瀬である。

不「繪蓮様が御越に成りました。」

蕾「何、繪蓮様が？」

此の見知らぬ婦人こそ圓磯生の後家の繪蓮であつた。彼は手早くシヨオルを取り、外套を脱いで、頬に亂れ懸る髪を推遣りながら蕾又の前に身を進めたが、這は抑も什麼、目には溢るゝばかりの涙を含み、面は燃ゆるんやうに熱しながら、又自ら慘怛の氣を帯びて、頓には言も出でず、唳々と忙しく片息を吐いて居る。蕾又は火の傍の椅子を指して、

蕾「まあ、どうぞ是へお出あそばしなして。」

蓮「はい。お初にお目に掛りますが、私は圓磯生繪蓮で御座います。今日まで貴方には御無禮ばかり致して居りました。早速で御座いますが、折入つて貴方に御願が御座います。恐入りましたが、どうぞお出下すつて、那の命をお助け下さいまし。御恩は決して忘れません、又甚麽事を致しても此御恩返しは致しますから、どうぞ些とお出下すつて、助けて戴きたいので御座います。」

此の村には醫者と云ふ者が一人も無い。因で雷又は此に来てから、貧民の爲に自ら往いて病を問ひ、或は需に應じて薬を投じ、數多く人の命を活したのである。彼は父が軍醫である所から、其の膝下に在りし間、唯假初の科外講義として道を聞き、術を學んだのが、所好こそ物の上手にて、後には醫學普通の智識を得て、良や診察調劑の應用を知るのであつた。此故に雷又は昔に金錢衣食を以て貧弱を拯ふのみならず、更に仁術の手を下して尙多くの慈惠を施すのである。然れば吳城伯爵夫人は慈善家として敬愛せらるる傍、又醫者として最も尊重せらるるゝので、今繪蓮が子ゆるに闇の雪を踏んで、半年叩かざりし人の門に哀を乞ふも之が爲であつた。

説了つた繪蓮は恐怖と寒さとの爲に身を顛せつゝ雷又の顔を打目成る。雷又は此人の始に太甚しく己を憎み厭ひし事を知つて居る、後には漸く心釋けて、西伯利亞なる吾夫の許へ此身の善を揚るまでになりし事も知つて居る。けれども領内の目と鼻の間に住みながら、何故か曾て一たびも訪來ず、又我よりも訪はせず、千里をも隔つる如く六個月餘を一面も見せず過しつるは、禮を知らずと謂はんよりは、仍我を敵視するか、但は此身を鄙み輕んずるか、孰かでなければならぬ。今宵の彼は洵に憐むべきも、若し然る心の人なら

んには、必ず如何なる恩をも酬ゆるに仇を以てすべく、左や爲まじ、右や爲まじ、と雷又も日頃の惡感情に牽れて、直に應とは言ひかねて居た。

繪蓮は此體を見るより心益す慌てゝ、

蓮「お出下さる事は出来ませうまいか。」

雷又は未だ答へぬ。繪蓮はわつと泣出した。

蓮「然ぞ私を憎い奴と思召しませう。其の憎い私の爲に力をお假し下さるのは、貴方も御不承で御座います。御不承なのは御尤で御座います。ですから、是は私がお願い申すのではない、一箇の子供が急病に罹つて、生死も知れず苦んで居りますのに、誰有つて薬を遣る者も無く、獨り斃死に死ぬのを待つて居るものと思召して、其の罪も無い子供の命を助けてお遣り遊ばして下さいまし。私からお願い申すのではない、但然云ふ可憐な子供の居るのを見て来て、御通知を致すのと、まあ然う思召して、どうぞ御出を願ひます。恚う致して居ります内も、子供の事が案じられるので御座います。」

之を聞き居る雷又の目に映つたのは壁に懸れる故伯爵夫人の肖像、其の畫ける温顔は彼に向つて何事をか語

つたのである。

蕾「それでは直に参りませう。」

蓮「あの、お出下さいますので?」

蕾「これからお供を致しませう。」

蓮「難有う存じます。お蔭様で子供の命が助ります。」

と繪蓮は歡涙を拂ひつゝ勇を作して身殿を爲る。

蕾「お車で御出で御座いましたか。」

蓮「いえ、此のままで駈けて参りました。」

蕾「然やうなら私も御一緒に参りませう。不破瀬さん、貴方御苦勞でも那の薬艸を持って一緒に来て下さ。」

恠く言置いて兩箇の婦人は直に戸外へ出ると、雪を蹴立てゝ走つた。一足遅れて不破瀬は追掛けたが、兩箇の速さは驚くばかり、男なれども老體の事なれば、彼は途の半にして幾と息も絶えなるとしたのである。

繪蓮は吾家の玄関に入るや否やシヨオルを投棄て、蕾又の手に取つて二階へ昇つた。大ランプを點せる一室の壁際に、亡父の肖像の前なる寢臺に横つて居るのが幼児の利喜三であるが、或は低く或は高く悲鳴を揚げて、泡を噴き、涎を流し、時々手足に痙攣を起して、急性の病苦に堪へざる有様。

蕾「奈何あそばしたのですか。」

と蕾又は床の傍に寄つて、病兒の手を把りながら其母に訊ねた。

蓮「奈何いたしたので御座いますか、二時間ほど前から急に這麼容體になりましたので、一體是はま何病氣なので御座いませう。」

唯嗽々と立騒ぐ僕婢を制して、蕾又は心靜に診察しつゝ、按じて胃部に到れば、患者は忽ち苦しき聲を發して嘔吐するのであつた。

蕾「何か毒にお中りに成りましたのですね。召上り物がお悪かつたので御座いませう。」

不破瀬の持來りし薬艸を取寄せ、解毒劑を調合して、蕾又躬ら之を服さしめ、さて一時間許附切に看護して、十分に手を盡したのである。其が爲病勢は漸次に減退して、然しも苦み呻きし利喜三も今は疲勞

寒牡丹

を感じてすやくと睡り始めた。

繪蓮の喜は何に況へんやうも無い。

蓮「私は何爲て此の御禮を致したら宜いので御座いませう。此の御恩ばかりは死んでも忘れは致しません。若も此子が那の儘息を引取るやうな事が御座いましたら、私は連も後に残つて生きては居られませんので、申さば、貴方の御蔭で親子の命が助りましたので御座います。」

此の感謝に對して蕾又は答ふる所を知らざるのであつたが、説頭を轉じて幼兒の事に及ぼした。

蕾「何時ごろから此のお子様は御發病なすつたので御座います。」

蓮「丁度食事を致して間も無くで御座います。」

蕾「何を召上りました。」

蓮「例の通の物で、別に異つた物は食べさせませんので御座いました。」

蕾「鼠殺と云つたやうな物でもお口へお入れ遊ばしは致しませんか。」

蓮「決して然やうな事は御座いません。是が生れましてからと申すものは、然云ふ危険な物は一切内に置せ

ませんやうに致して居りますので。」

蕾「然やうなら、何ぞ蜜の入つたお菓子でも。」

蓮「いえ、然云ふ物も。」

蕾「女中衆か誰か、貴方に内證で上げた者が有らうと思ひます。」

或は那樣事も有らうと考へたので、繪蓮は直に起つて其の取調に行つた。

迹に蕾又は意を留めて室内の模様を観察したのである。住へる人の如何なる性質を有つかは、其の裝飾乃至整理等に因つて粗窺知らるゝのである。室内は自から快豁にして簡潔に、強て飾らざる裏に優美の處が有るなど、寧ろ此人に對する取沙汰を疑はしむるのであつたから、蕾又は頗る満足の體で居た。旋て返し來れる主婦は、

蓮「今日は誰も物を食べさせは致しませんさうで御座いますが、」

蕾「いえ、然云ふ筈は御座いません。では餘所から誰ぞ參つた者は御座いませんか。」

蓮「諸座の家内、御承知で御座いませう、他が用事を聞きに參つたさうで御座います。」

寒牡丹

と何氣無く言出した給蓮も、之を聞いた雷又も、彼此一齊に或る同じ事を胸に浮べて、懼るゝ如き目と目を見合せた。

爾時雷又は聲を低めて、

雷「那の者はお宅の家來衆の家内ださうで御座いますが、何云ふ人物で御座いますか。」

蓮「他は貴方へも一度伺ひましたさうで御座いますが、餘り胸の宜くない女で御座いますから、随分御注意を遊ばしまして。」

之に答ふる雷又の聲は愈よ低くて、猶連に何事をか語るのであつたが、其の卓子の外には洩れぬほどで、給蓮のは、手狀を爲る影が壁の上に跳るのみであつた。

頁有つて纒に聞ゆる雷又の聲は、

雷「此の御子様を奈何か爲やうと云ふには、其に就て彼等の利益に成る事が無ければならぬので御座います。う。お心當が御座いますか。」

蓮「村の者は兼て私を憎んで居ります、で、若し是が殺りでも致せば、屹度其咎を私に着せやうと云ふ

ので御座います。それに又宅の財産を目掛けて居る者も御座いますので、其や是やを考へますと、實に一日でも安い心は御座いません。未だく那樣事よりは言ふに言はれぬ無念な事が一件有るので御座います。」

と聲囁らせて、餘は差合む涙を拭ふのである。雷又は早くも其事と曉つたが、故と聞流して、

雷「お子様が、殺つたとて、母たる貴方に其咎を着せるなど、那樣無法な事が有るもので御座いませうか。」

蓮「いえ、其には譯が御座いますので。二三日内には屹度今夜の事も尾に尾が附いて貴方のお耳へ入りますから、どうぞお試しなすつて御覽下さいませ。」

之を語れる給蓮が面上には謂ふべからざる悲惨の色が微見えたのである。

雷「怪しからん事では御座いせんか。外の事とは違つて然云ふ事は、貴方も飽くまで證明をお立て遊ばさなければ成りません。而して此後とも十分御用心遊ばしませよ。」

蓮「はい、其はもう承知いたしては居りますが、何を申すにも大勢の敵で、味方と云つては一人も無いので御座いまして、頼に思ひます兄までが、猶且世間の人のやうに私を信じてくれませんので御座いますから、私は何より其が無念でなりません。然し、神は必ず善をお守り下さる事と信じて、行末花の咲く春を樂に、

苦い今の身の上を忍んで居ります。又家の寶とも私の命とも念ひます此子は、甚悪事を致しても屹度保護致しますで御座います。」

蕾「その御覺悟でなければ成りません。有仰る通、世間から疎まれても、神の慈愛を受ければ、其が眞の人と申すので御座います。」

蓮「然う有仰つて下さると、私は實に嬉しいので御座います。兩箇は暫く無言であつた。時に蕾又は席を進めて、

蕾「繪蓮様、圓機生様は奈何して御殺り遊ばしたので御座います。」

此間に會へる繪蓮は、闇中に又の閃くを見たる想、彼は其の意外なるに驚かされるのである。

蓮「實は其に就きまして段々お話が有るので御座います。」

蕾「失禮ながら、御病死を遊ばしたのでは御座いますまい。」
繪蓮は唯空しく目を睜るのみであつた。彼が村民に憎まれ、骨肉に疎んぜらるゝのも、一つ此間の疑問に存するので。病死にあらざれば横死か。横死にあらざれば變死か。變死ならんには誰が手を下せしと爲すや。彼

の闇中の又は躍つて今正に己の吭に洩るのである。

蕾「人手にお掛り遊ばしたのでは御座いませんか。」

蓮「まあ、貴方が何爲て其を！」

と吾を忘れて飛起つばかりの胸の内。

蕾「知つた譯では御座いませんが、然やうではなからうかと、私は考へましたので御座いますが、如何で御座います。」

蓮「貴方は好うこそ然うお考へ遊ばして下さいました！有……有……雖有う存じます。」
涙は急雨の如く下つる。

蓮「此村に人も多く居りながら、而して私の平生をも好く知りながら、貴方の其の半分も考へてくれる者は無いので御座います。是は貴方が有仰るのではなくて、天に在す神様がお告げ下さるので御座いませう。實にお言の通人手に掛つて果てましたに相違御座いません。」

蕾「さあ、其に就ては此に證據が欲しいので御座います、何ぞ證據に成る物は御座いませんか。」